
たゆたう世界

ナカモト工事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たゆたう世界

【Nコード】

N2616T

【作者名】

ナカモト工事

【あらすじ】

不倫に疲れて「人間をやめてしまいたい」、そんな事を思っていた彼女は、不倫相手の妻に刺されて意識を失ってしまう。そして、気がついた時には本当に人間ではなくなっていた――。人間でなくなった事を喜ぶ彼女。しかし、彼女の元に訪れる人間達と触れ合ううちに、徐々に心は変化していく。

1・人間をやめた日

恋は錯覚だ。

遺伝子を残そうとするが故の本能がそうさせているのだ。

だから、この胸の痛みも、頬を伝う滴も、錯覚なんだ。

「もう、関係を終わりにしたい」

そう言われたのは、彼の奥さんが三度目の自殺未遂をした後だった。

彼が私と一緒にになりたいと、奥さんに離婚を持ちかけたのが彼女をそういう行為に走らせた。

私は別に彼と一緒にになりたいとか、そんな気はなかった。そもそも、付き合う気なんてなかったのだ。妻子ある人と付き合うなんて、面倒臭いにも程がある。

ただ、彼の長くて少し無骨な指はどう動くのか、その唇はどんな感触だろうか、腕は、足は、腰は……言ってしまうえば、彼に欲情したのだ。

酒とは恐ろしいもので、普段抑えられている欲望が剥き出しになっってしまう。接待でぐでぐでに飲まされて、彼が家まで送ってくれたその時に、つい、彼の唇をぺろりと舐めてしまった。その後は一夜のアバンチュールってやつだ。

正直、最高だった。素敵な一夜をありがとうございます、幸せな夜の思い出として大切にします。そう拝んで終わらせようとしたのに、彼の一言で台無しになってしまった。

「ずっと、君の事が好きだったんだ」

なんて、面倒臭い。私はそんなドロドロの愛憎劇を繰り広げる気は無い。彼に控え目に、けれど少し突き放す感じで不倫はよくないと説得した。

それなのに、彼の私を見る目は日に日に熱を帯びていった。上司である彼は職権を乱用し、私と一緒に過ごせる時間を増やし、ストーカーよろしく家の前まで待ち伏せしていたりと、求愛行動は留まることを知らずに勢いを増していくだけ。肉食系ではあるけども、押しに弱い私。結局ずるずると流されて関係が続けてしまった。

それでも、嫌々ではなく彼と過ごす時間はとても穏やかで、女としての歓びと幸せを感じてしまったのには否定しない。

いや、そもそもそれは本当に私の気持ちだけからくる感情だったのだろうか。遺伝子は自分の作りに遠い遺伝子を求めるといふ。私が好きだと思ったあの声も、指も、匂いも、目も唇も、全て遺伝子が求めていただけなのではないか。彼の遺伝子を取り込んで子孫を残せと。

思えば、仕事が忙しく疲れている時は早く帰って寝たらいいのに、いつも私を求めてきた。それも、疲れすぎて死を意識した体が死ぬ前に子種を残そうという本能が性欲を煽っているらしい。

私を純粹に好きだからという訳ではなく、遺伝子がそうさせているのだ。私に自分の遺伝子を残そうと。

愛は、家族愛や隣人愛といった言葉もあるくらいだから別として恋は、きつと遺伝子を円滑に残す為の錯覚なんだ。

ああ、なんて煩わしいんだろう。

そんな錯覚ごときに私の心は乱されるのか。

煩わしい。人間でいる限りこの煩わしいものから解放される事はないのだろう。

それなら、私は人間をやめてしまいたい。

……くだらない。どうあっても、死なない限りは人間である事には変わらないのだ。そんな現実逃避なんて時間の無駄だ。私の心がもう少し脆ければ壊れてしまう事もできたのかもしれないが、生憎無駄に丈夫にできている心が今は恨めしい。

それでも、今回はさすがに疲れてしまった。まだジクジクと疼く胸が煩わしい。柄にもなく傷心旅行でもしてみようか。まだ消化していない有休もある事だし。そうと決まれば即実行。まずは本屋に行って旅行本でも漁ろう。

鏡を覗いて身だしなみチェック。一晚中泣いてしまったから目の。太のようだ。今日が休みで良かった。

鼻歌を歌いながら家の鍵を閉めていたら「すみません」と、か細い声がしてそちらを向くと、左腕に包帯を巻いたやつれた女が立っていた。

彼の奥さんだ――…！

見た事は無かったけど直感でそう思った。これはどうするべきか。とりあえず家に上げて粗茶でも？ いや、有無を言わず土下座すべき？ ああ、慰謝料請求しにきたかな？ 参ったな。傷心旅行代をそちらに回さなければ……

そんな、くだらない事を考えていると、腹部に衝撃がきた。奥さんがいつの間にか鼻と鼻がくっつくくらいの距離にいて、にたり、と不気味に微笑んでいる。

――え？

ゆっくりと、奥さんが離れていく。あらわになったのは、私の腹部に刺さった刃物。

え？まさか、ドロドロの愛憎劇の悲惨な結末ってやつ？

痛い。いや、痛いつて言うより、なんか、熱い？ ジンジンと熱い。確かに刺されているのに、なんか、実感が無い。ああ、血があまり出て無いからかな？ この刺さってるヤツ抜くとぶわーって出てくるんだっけ？ ああ、でも血が滲んできてる。ヤバイな。救急車呼ばないと。携帯。携帯を……掴めない。手が震える。なんだろぅ、これ？ ちょっと刺されたくらいでこんな風になるもの？ もしかして、刺されたショックでパニックになってるとか？ なんだ、私も可愛いところあるじゃないか。

「なんで！？ なんでまだ死なないの！？ 早く死んでよ！！」

もぞもぞとしている私に奥さんは金切り声を上げ、そして鬼のような形相で私を思いつきり両手で突き飛ばす。そして、私の頭はコンクリートの壁に打ち付けられた。

「ナミ！！」

私が意識を手放す前に聞いたのは、私を呼ぶ彼の声。何しに来たのよ。また私に煩わしい思いをさせる気？

ああ、でももうどうでもいい。

だって、これでもう人間やめれるかもしれないんだもの。

2・水面の向こう側、美しい世界

ゆらゆら、ゆらゆら。

水面が揺れる。

ゆらゆら、ゆらゆら。

揺れる度に水面の向こうの光が揺れる。

冷たい水の中。冷たいはずなのに、温かく感じる水の中。

いつからこうしていたのだろう。どれほどの時間をこうしていたのだろう。刹那かもしれないけれど、悠久にも感じる。

ゆらゆら、ゆらゆら。

ここは心地良い。何も煩わしい事の無い世界。あれほど疼いていた胸の痛みも今は無い。ここはどこだろう。どうしてここにいるのだろう。

ああ、そんな事どうでもいいか。私は、この心地良い世界ですつと揺蕩たゆたっていたい。

それからどれほどの時間が過ぎただろう。ある日、水面が一つの塊によって激しく揺れた。

その塊は、もがきながらこちらの方へ沈んで来る。たぶん、溺れているのだろう。さすがに溺れている人間を見殺しにするほど腐ってはいない。もがいていた小さな人間を安心させるように柔らかく包み込み、水面の上に出る。

思えばここに来て初めて水の外に出た。ゆっくりと見渡せば、そこは豊かな緑に囲まれた光射す美しい泉だった。

景色の美しさに見惚れていると、小さな人間がけけけと咳をした。いけない。この子を陸に上げてあげないと。

そつと陸の上に横たえてあげると、安心したのか意識を手放しく

ったりした。

少し水を飲んでしまったかな？　小さな人間の胸を軽く撫でると、小さな胸がビクリと一つ跳ね、小さな口がゴポツツと水を吐き出した。

これでもう大丈夫かしら？　いや、服がビショ濡れだ。このまま寝ていたら風邪をひいてしまわないかしら？

手をかざすと、服に吸い込んでいた泉の水が私の水でできた手に『戻って』くる。そう、泉の水が私に『戻って』くるのだ。

今、ハッキリと自覚した。私はこの泉の主になったようだ。いや、泉だけでは無い。泉を中心に広がるこの美しい森。それが全て私の支配下にある。

人間をやめたいと思ったが、まさか本当に人外なものになるなんて……

ゆらゆらと優しく揺れる透明な手を太陽にかざす。澄んだ透明な水は太陽の光を遮る事なく、私の顔も通り抜け、地面まで光を届ける。

——なんて、美しい世界。

今、私は水なので呼吸はしていないが、それでもこの空気は酷く清らかで澄んでいると分かる。木々を優しく照らす太陽の光が、葉の合間をぬって柔らかい土にゆらゆらと光を届ける。そして自らが光を放っているかのように煌めく泉。

この、美しい世界の主は私。不思議だ。あんなドロドロの愛憎劇を繰り広げてしまった穢れた私が、何故こんな美しい世界の主になっってしまったのだろうか。

考えても答えは出ない。なってしまったものは仕方が無い。今の私にできるのは、この美しい世界を守る事なのだ。

カサツと草が動く音がしてそちらを向くと、どうやら小さな人間が目を見ましたらしい。上半身を起き上がらせて、アホの子のよう

に口を開きこちらを見ていた。

ああ、私は人間じゃ無いものね。透明な人型のものなんて誰でも驚くか。もしかしたら怯えているかもしれない。まだ小さいもの。

私は安心させる為に、波打つ手で彼の淡い茶色の髪を優しく撫で、そしてできる限り穏やかに微笑んで見せた。すると、彼の深い緑色の瞳は余計に大きく見開かれ、小さな口をワナワナと震わせた。

あれ？ 余計怯えさせてしまったかしら？ おかしいな。私の営業で培ったスマイルは、癒し系の皮を被った猛禽類の笑みと絶賛されていたのに。この子は勘が鋭くて本能で怯えているのかしら。それとも、単に人外生物が恐ろしいのかしら。

悩んだ末に私が出した結論は潔く泉に帰る事だった。彼の頭から手を離し、泉に向けて後ろを向いた時。

「ま……待つて!!」

振り向くと、涙目になりながらお腹の前で拳を握り締めてぶるぶる震えている。……そんなに怖いなら早く帰ればいいのに。そう思った次の瞬間、彼の精一杯の言葉に、今度は私がビクリしてしまう。

「ま、また……会いに来てもいい!？」

あれ？ 怯えていた訳じゃないの？ じゃあ、どうして震えているの？

確かに震えている。けれど、瞳に怯えの色はなく、むしろ初めての告白をしているいっぱいっぱいの男の子のようで、それがなんだか可笑しくて、私は笑って頷いたのだった。

3・『誓い』

「デイナー！ これあげる！」

嬉しそうにそう言って、彼は私の透明な頭に花冠を乗せた。デイナーという名前は彼が私につけてくれた名前。前の名前は忌まわしい記憶と共に捨ててしまった。

『ありがとう。とても嬉しいわ』

そう言って微笑むと、彼は丸くて柔らかそうな頬っぺをりんごのようにさせて嬉しそうに笑った。なんて可愛いのだろう。きっと私が彼の初恋の人になるのだろう。役得だ。

彼——アレンは、あの日から頻繁にここに来るようになった。王子様らしいので、さすがに毎日通う事はできないようだが、隙あらば抜け出してきているらしい。

アレンは、私を守るこの森の真ん中に位置する小さな国の王子様。森の真ん中にあるのだから、必然的に私とその国も守っている事になる。何代か前の泉の精と、初代の王様が契約をしたらしい。外敵から国を守ると。

その話は国では当たり前らしく、国の民は皆泉の精と森を敬い生きていくらしい。しかし、泉には王家にしか立ち入る事が許されず、一般の民には場所すら知らされていない。なぜなら、契約には『邪なる者を近付けさせるな』という泉の精の要望があるからだ。不特定多数の人間が訪れる事ができてしまうようになれば、その中に邪な気持ちを持つ人間がいては困るし管理ができない。

王家では、齢五歳になつたら泉の精に会い、認めて貰わなければならないというしきたりがある。アレンはしきたり通りに泉に来たものの、どこに泉の精がいるのか分からずに泉の周りをウロウロしていたら、うっかり足を滑らせて泉に落ちたという……なんというアホの子。だが、それがいい。アレンを見てると私のS心が疼いて仕方がない。

彼が来るようになって気づいた事がある。人間をやめた私でも『心』があるという事。けれど、人間でない私は子孫を残す為の本能が無いからか、あれだけ有り余っていた性欲が皆無だという事。そういう事に関係しているのか知らないが、感情が希薄になった事だ。アレンを可愛い、いじめたいという気持ちはあるけれども、何か膜を張ったような、どこか遠くから見ているような、言ふなれば人事のように感じてしまうのだ。

けれど、それを哀しいと感じる事はなく、ふわふわ、ゆらゆらと常に穏やかな気持ちでいる。

本当に人間をやめる事ができて良かったと思う。煩わしい思いをする事もなく、こんな可愛い子に懷かれて、穏やかな気持ちでいられる……ここは天国かと思うくらいに素晴らしい世界だ。

はっ。本当に天国じゃないだろうか。だって、私は刺されて、頭を打ち付けて、あの世へ真つしぐらだったのだから。もしくは、どこぞの猫型ロボット漫画の都市伝説として知られる最終回のように、全ては植物人間になってしまった主人公の夢オチでした。なんて、鬱展開ではないだろうか。さすがにそれは泣ける。感情の薄くなつてしまった私でも、そんな鬱展開は有るのか無いのか分からない背中が冷える思いだ。

私がちよつと泣きそうな顔になっていたからだろうか。アレンが心配そうな顔で私を覗きこんでいた。

「どうしたの？ どこか痛いのか？」

この全身水でできた身体のどこに痛覚があると言うのか。

しかし、イタズラ心でお腹に手をあてて、『お腹……お腹がああ……し、死ぬううう！』と大袈裟にごろんごろんと転げ回ってみる。目論見通り、アレンは涙目になりながらオロオロしている。ああ、その困った顔がまた可愛い。

そして、「痛いの、痛いの、とんでけー！！」と真剣にやるのだ。たまらず吹き出してしまった私を見て、騙された事を悟りショックを受けた顔をしている。ふふ、そうやって人は大人になっていくのよ。

「デイナー嫌いー！！」

頬をふくらませてぷいっとなつぽを向いてしまうが、私にそんな攻撃はきかない。ただ可愛いだけだ。

私はそっぽ向いてしまった彼を背中から抱きしめて言う。

『私は好きよ』

「ボクは嫌い！」

『でも、私は好き』

何度か同じ事を繰り返した後、彼は黙ってしまった。不思議に思っている、急にこちらに向き直り、私のお腹らへんに顔を埋めてボソっと言った。

「じゃあ、ボクのお嫁さんになって……」

そうきたか！　これはマズい。子供だからと言って侮る事なかれ。軽くいよいよって言ってしまったら、真に受けて大きくなって一途に想い続ける人間もたまにいるのだ。

この子は特にダメだ。一応、将来国王となるのだから、こんな人外生物に心惑わされてはいけない。

『私はダメよ。お嫁さんにはなれないわ』

「どうして！？　好きだって言っただじゃない！　ウソだったの！？」

『いいえ、嘘じゃないわ。でも、私はダメ。生殖機能が無いもの』

「せいしょ…？」

『つまり、私は人間では無いから子供を産めないの。アレンは大人になったら王様になるでしょう？　王様は子孫を残す事もお仕事なのよ。だから、私はお嫁さんになれないの』

アレンは傷付いた顔をして、何か言おうと口をパクパクさせた。けれど、幼い彼にはまだ、複雑な気持ちを言葉にする術は持たないらしい。

私はそんな彼の頬を両手で包んで、額に口付けした。

『私の可愛い王子様。あなたのお嫁さんにはなれないけれど、私はあなたの側にずっといるわ』

そう言つて微笑むと、彼は泣きそうな顔をして、何も言わずに走り去って行った。

……可哀想に。人間であるが故に恋をする。そして恋に破れて哀しい思いをしなくてはならないんだわ。

この時の私はまだ、彼を、そして人間を、本当に哀れに思っていた。

アレンが来たのはあれから太陽と月が入れ代わるのを八回見た後だった。その時の彼の顔はまだ五歳だと言うのに、少し大人びた顔をしていた。

「デイナー、ボクは立派な国王になる」

彼の手には王家の紋章がついた銀の指輪。それを私に差し出した。

「ボクはいつか人間の女の人と結婚して、いっぱい子供を作る。このからだは国のために捧げる。でも、心はデイナーにあげる」

驚いた。これが五歳の子が言う台詞だろうか。私が人間だったら、うっかりショタの道に走っていたかもしれない。それだけ可愛らしい容姿に不釣り合な大人びた雰囲気の魅力だった。

『この指輪は……王家の婚姻の儀に使う大切な指輪よね？ 持ち出したら怒られるんじゃない？』

「だいじょうぶ！ ボクが王になるんだ！ つまりはボクが法だよ！」

無いはずの血の気が引いた気がした。いつかどこかで同じような台詞を聞いた事があるからだ。

それは人間だった頃の話。私に煩わしい思いをさせた彼が仕事の中に、あまりにも不自然に私と二人だけで進める仕事を作った為に周

りから不興を買ったのだ。「オレ達もなみちゃんと二人だけになりたい！」と言ったふざけた感じではあったけれども。それに対し、うちの課の責任者である彼が言った台詞が……

「うるさい！ 誰と誰がどんな仕事をするのかはオレが決める！！
うちではオレが法律だ！！」

……である。普通、そんな事を言ったら信用はガタ落ちしそんなものだけでも、不思議と彼を慕う人間は多かった。

過去に氣をとられているうちに、いつの間にか私の水でできた手に指輪が握らされていた。

「これはボクの『誓いの証し』だよ。ボクが結婚しても、死んでも生まれ変わっても、ずっとボクの心はディーナと一緒にいるっていう証し。大切にしてくね？」

私は曖昧に微笑むしかできなかった。

そういう気持ちが煩わしかったから、人間をやめたいと願ったのに、その煩わしい気持ちを他者から……それも自分が可愛がっていた子供から向けられるなんて、どうすればいいのか困ったのだ。

なんとも思っていない人間だったら、酷い言葉で突き放す事なんていくらでもできるのに。

そんな事を思って、自分の気持ちが不思議になった。どうして、なんとも思っていないかったら酷い言葉を言えるのだろう。逆に、この子にどうして酷い言葉を言えないのだろう。

突き放して、嫌われてしまっても、この子がもうここに来なくなるだけだ。別にそれでもいいじゃないか。好きとか嫌いとか、面倒臭い。私は心静かにここにいたいだけ。

「ディーナ……イヤなの……？ やっぱりボクのことくらい……？」

指輪を返そうとアレンの方を向けば、彼は泣きそうな顔をしていた。

嫌い、その言葉を言おうとしたのに、私から出た言葉は全く逆のものだった。

『嫌いなわけないわ。ありがとう、大切にするわね』

嫌われたくない。アレンの心を傷付けたくないというよりも、アレンに嫌われたくないと、そう、思ってしまった。

この気持ちは、人間の時の名残なのだろうか。これは独占欲？それとも庇護欲？　なににせよ、私はなんて浅ましいのだろう。そんなものの為にこの子の気持ちを縛り付けるような事を言ってしまった。

人間でなくなって、心が鈍くなったと言っても、やはり私は私なのか。私という意志が持つ欲は消えないという事か。

幸福な夢の時間が壊された気がした。またいつか煩わしい思いをするのだろうかという不安を抱きつつも、それでも嬉しそうに笑うアレンを見て、私の鈍くなったはずの心は幸福感に満たされるのだった。

4・とても綺麗なひと

アレンから指輪を貰った日の夜の事。私は夢を見た。

いや、正確には眠る必要の無い私にとって夢では無いと思う。泉の中からゆらゆらと揺れる優しい月明かりを眺めていた時、意識がいつもより朧げな感じになり、月明かりではなく別のものが見えたのだ。

真っ白な四角い部屋。

真っ白な布団の中で眠る点滴に繋がれた人間の私。

眠っている私の頬を愛し気に撫でる男。

彼は私に話しかけているようだが、何を言っているのかは聞こえない。まるで無音映画を見ているかのよう。

そして、彼の瞳から一粒の涙がこぼれ落ちたのを見た時、私の中の何かが酷い拒否反応を起こし、激しく波打つ水のように視界が歪んだ。

一瞬の乱れの後、私の意識ははつきりとし、見えるのは真っ白な部屋ではなく、ゆらゆらと水面に揺れる月明かり。

……。

……何だったのだろう、今は。あれは確かに私と……彼だった。人間だった頃に入院した記憶は無いから、あれは今までの私の記憶とは違う。それならば……

……あれは、現在の私の姿？

ありえない、いや、そうあってほしくない想像に私の心は波打つ。彼は一体いつまで私に煩わしい思いをさせるつもりなのだろう。

たとえ、万が一にも人間である私が生きていたとしても、私は戻りつもりは無い。

私は、ずっとこの心地よい世界で揺蕩っていたいのだから。

あれから、変な夢のような幻覚のようなものを見る事はなくなつた。

安心して変わらない日々を過ごすが、一つ変わってしまった事もある。アレンが滅多にここに来なくなつたのだ。王様になるための勉強を頑張つてしているらしい。

アレンが来ないからと言って、私のする事も心情も特に変わった事はなく、日々緩やかにこの美しい世界を見守っている。

木々の囁きを聞いて、動物達と戯れて、眠る事の無い私は夜になると泉の中で月の明りを眺めながら揺蕩うだけ。

そしてどれくらいの時間が過ぎただろう。久しぶりに顔を見せたアレンは驚くほど『男』になっていた。

「ディーナ、久しぶり。淋しかった？」

そうやって爽やかに微笑む彼は、私の大好きなブラピを少し線の細くしたような、私が人間だったら是非今晚ひと勝負お相手頂きたいくらいの精悍な美男子に成長していた。

『……大きくなったわね？ 何歳になったの？』

「つれないな、久しぶりに会ったっていうのに、それだけ？」

苦笑いしながら私の透明の手をとる彼の手は、手入れが行き届いている綺麗な手だけれども、大きくて少し無骨な男の手で、そこ

から繋がる腕は白いシャツに隠れていても分かるほど遅い腕だった。

淡い茶色のサラサラの前髪がかかる深い緑の瞳は、熱のこもった眼差しで私を見つめる。

……人間の神秘ね……あの小さくて可愛らしかった男の子が、こんな色っぽい男になるなんて。

『会えてとても嬉しいわアレン。でも、凄く遅くなっていたから驚いてしまったの』

そう言うと、彼は嬉しそうに顔を緩めた。その笑顔は幼い頃の彼のままで、変わらないものもあるという事に少しの安堵を覚えるけれど、その笑顔はすぐになくなって、彼は顔を曇らせた。

「実は今日、報告があつて来たんだ……」

アレンはそこで一旦口を噤むと、より暗い面持ちになった。なんだろう、そんな顔をするほど大変な事があつたのだろうか。

多感な年頃であろう彼の悩みを真剣に聞いてあげようと、私は彼の次の言葉をじっと待つ。

「……僕、十八歳になってしまったから……結婚する事になったんだ……」

『うんうん、それで?』

「それで……って……それだけけど……?」

『え? それだけ?』

何やら不満そうな顔をする彼に、私は何の悪気もなく首を傾げる。
いや、だって、ねえ？ 結婚とか、おめでたい事じゃないのかしら？ そんなリストラされたサラリーマンみたいな顔をしているから、どんな大変な事があったのかと心配して損してしまったわ。

『おめでとう、お式はいつ？』

本当に悪気は無かったの。だって、アレンがまさか本当に、淡い初恋をずっと胸に抱いて大きくなっても一途に想い続ける純情な人間だったなんて、決して綺麗とは言えない社会で生きていた薄汚れた私には想像つかなかったの。

「……君にだけはそんな風にすんなり祝って欲しくなかったよ……。僕は、ディーナと約束したから、頑張っていたっていうのに……。『立派な国王になる』ために、君に会いたくても我慢して、君にがつかりされないように、色んな勉強を頑張ってたんだ……」

アレンは悔しそうに顔を歪めて俯いてしまった。それでも彼の言葉は続く。

「僕は確かに約束したよ。『人間の女の人と結婚してたくさん子供をつくる』……。と。けど……。けど……！」

彼は泣きそうな顔を上げて私を真っ直ぐ見据える。その顔は子供の頃私に『お嫁さんになって』と言って、駄目だと言われた時と同じような顔だった。昔と違うのは、彼はもう立派な青年であって、複雑な気持ちを言葉にできない子供ではもうない事。

「僕が好きなのはやっぱりディーナなんだ！ 昔は結婚するという事も、子供をつくるという事も、簡単な事だと思っていた！ けど

！ 色んな事を学び、知っていくうちに、それは簡単な事じゃなくて、とても大切な事だと気づいた！」

そうね、人間にとっては種を残すということでも大切な事だわ。それは動物全部に言える事だけど、人間は『結婚』という契約によって自分の立ち位置を確立しつつ、子供の立場を守るというとても大切な事。

「僕達王族は自分の意志だけで行動してはいけないと長い歴史から学んだよ……でも、だからって、愛する人でもない人と結ばれて、子を為す事はとても不自然な事だと思ってしまっただ……。それは結婚する女性にとっても失礼な事だと思うし、何よりも、君と……ディーナと共に在りたいと望んでしまっただ……。」

『体は国のために、心はディーナに』……なんて、無理だったんだ。体と心が別の所に在るなんて、そんな器用な事、僕にはできないよ……。」

可哀想なアレン。あなたは実直すぎて、自分で心を不自由な位置に持って行ってしまうのね。

いつの時代でも、どの国でも、結婚しながら他に愛人をつくる男なんてたくさんいる。それはきつと、この国でも変わらないはず。そういう男を見てきていないはずは無いのに、それでも誠実でありたいと願うのね。

体と心が自由にならなくて涙する彼の頬を優しく撫でて、私は言う。

『それなら、国を捨てなさい』

「……え？」

何を言われているのか分からないといった風に、彼は子供の頃のように無防備に口をあぐり開けて私を見つめる。思わず笑ってしまいそうになるのを堪えて、私は繰り返す言う。

『私と共に在りたいと願うなら国を捨てなさい』

「……そんな事……できる訳無いじゃないか……」

『それなら、どうするの？ このまま結婚して、いつまでも私の事を想ってうじうじするの？ 私、うじうじしてる男は大嫌いな。私と共に在るか。それとも、私の事はすっぱりと諦めるか。選びなさい』

こんな風に言われて諦めきれんくらいなら、とつくに私への想いなんてなくなっていただろう。でも、私は心の逃げ道を作ってあげたかったのだ。

自分で私への想いを断ち切ったのでは無い。私に迫られて仕方なく選んだのだと。自分で自分の気持ちを裏切ったのでは無いのだと。

アレンは頭を抱えて黙り込んでしまった。彼にとっては苦渋の選択なのだろうと思う。

何せ五歳の時から私を想い続けて、勉強を頑張っていたのも国王になるためというより、私に認めて貰うためだったのだ。

言うなれば、人生から私を切り離すという事は、今までの生きる糧を失うようなものだと思う。

彼がここにやって来たのは昼過ぎだった。それが日が傾いて、泉を茜色に染めだした頃、ずっとうずくまって黙っていたアレンは顔を上げて私の方を向いて言った。

「……僕は、もう、ここには来ないよ」

彼は苦しい面持ちで言う。

けれど、夕日を映した深い緑色のその瞳には迷いの色など無い。

『アレン、私はあなたを尊敬するわ。きっと、立派な国王になれる』

それは心からの賛辞だった。

こんな綺麗な人間を私は見た事が無い。

類は友を呼ぶと言うが、私の周りは己の欲望に忠実な人間ばかりだった。世の中弱肉強食とばかりに恋人のいる相手でも攻め落とし（さすがに不倫していたのは私だけだったが）、元彼女と修羅場になっても「あなたの魅力が足りなかったただけでしょ」と何の悪びれもなく言い放つ強者ばかりだった。

勿論、自分を押し殺して何かを我慢する人間も見てきたけども、現状を変える気も努力も何もしていないのに、不満ばかり言う現状を受け入れきれない人間ばかりだった。

だけど、このアレンの様子はどうかだろう。

私がアレンの立場なら確実に私を愛人ポストに持っていくだろう。だって人間じゃないから不倫にはならないでしょ？ という言い訳つきで。

だけど、アレンはそれをしなかった。私の存在も、アレンの立場も、私を愛人にしてもどうともなるようなものだというのが。あくまで誠実であろうとして、全てを受け入れた上で心から自分の事よりも他を優先させたのだ。

己の欲望を優先させ、その末に刺されてしまった薄汚れた私からすれば、彼はとても綺麗で、とても眩しく見えた。

私は、泉の底に大切に保管しておいた王家の紋章のついた銀の指輪を彼に返そうと差し出した。けれど、そんな私の手は押し戻される。

「これからは心から国のために、そしてこれから結ばれる人のために尽くそうと思う。だけど、君に対する気持ちを無かった事にしたくは無いんだ。これは、確かに僕の心が君と共に在ったという証し……迷惑かな？」

私は思わず笑ってしまった。女より男の方がロマンチストだと聞くけども、本当にそうだと思う。美しい思い出は美しいままで……って感じがしら？

意外とそういうのは嫌いじゃなかった自分に驚きつつ、いきなり笑いだした私に不審な目を向ける彼に、今度は穏やかな微笑みを向ける。

『ありがとう、ずっと大切にするわ。……アレン、元気でね』

「ありがとう……君も…元気で……」

そして彼は一度も振り返る事なく去って行った。

私は、そんな彼の背中を見送った後、夜になっても月明かりに照らして指輪をずっと眺めていたのだった。

5・長男との初接触

あれから間もなくして、王太子が結婚したとパレードの様子を見ていた鳥達から聞いた。それはそれは幸せそうな若く可愛らしい夫婦だったという。

指輪を見て、少しほろ苦い気分になったような気がしたけども、それよりもアレンが幸せそうだったと聞いて安心した。彼ならば、本当に良き王、良き夫となるだろう。

今はアレンの子供が、いつかこの泉を訪れる事を楽しみにしている。

そんな楽しみができて間もなく、城からの使者が来た。

私への挨拶に来る間もなく、王太子妃が懐妊してしまったので、挨拶は産後にして欲しいのだとか。

別にそれはいいのだが、もうできたのか……早いな……相性が良かったのだろうか……とアレンの仕事の速さに驚きつつも、子はさすがいと言っし、これでアレンと奥さんの絆が深まればいいと思う。

そして時が流れ、ある日、街の方が騒がしいな、と思っていたら、どうやらアレンの子供が産まれたらしいとまた鳥達から聞いた。万年温暖な気候のここには四季がなく、私自身も時間に関心が無いため、どれくらいの時間が過ぎたか分からなかったが、十ヶ月は経っていたようだ。

なんにせよおめでたい。出産祝いを持って馳せ参じたいが、昔の女が祝いに行くというのは嫌味だろうか、と思いとどまった。まあ、付き合っていた訳ではないから昔の女という訳ではないが、きっとアレンの中では私と過ごした日々はめくるめく美しい日々になっていて、純情な彼にとって私は昔の女のポジションと変わらない位置

にいると思う。

彼の子供には五歳になった時に必ず会える事だし、のんびり楽しみに待っておこう……と、思っていた矢先、また使者が来て王太子妃が懐妊したので挨拶はまたお待ち下さいと言われた。

という出来事が、翌年も、その次の年も、またその次の年も……と続いた。

いや、子供が産まれるのはおめでたい事だとは思うけども、ちょっと作りすぎではないだろうか。奥さん、ずっと妊娠状態ではないか。

仲がいいだけなのか……それとも「たくさん子供を作る」という私との約束を守っているのだろうか……それとも、アレンが絶倫なのか……

そんな想像をして、小さい頃の可愛らしいアレンを思い出すと、少しやるせない気分になった。

そして、通算五人目の子供が産まれたと聞いた年の事、一番始めの子供が私の元へやって来た。

「始めまして。僕はセルジュです。よろしくお願いします」

『……よ、よろしく』

アレンの時に比べてしっかりとっている様子に感心してしまった。アレンのアホの子っぷりを思い出すと、本当に彼の子供だろうかと思っほどだ。

赤みがかった金髪は母親譲りだろうか。顔つきも可愛い感じに柔らかい雰囲気だったアレンとは違い、子供にしてはスマートな輪郭と少し釣り上がった瞳にキツイ印象を受ける。

それでも、深い緑色の瞳は確かに彼と同じ色。それが彼の子供な

のだと私は実感する。

あの小さかったアレンが子供を……と、感慨深くなる私の気分はすっかりお婆ちゃんのものだ。

お婆ちゃんの気分になつて、甘いお菓子でもあげたいところだが、あいにくこんな森の中にはそんな人工物は無い。

なので私は小さい甘い果実を、孫ににこと差し出した。ところが、孫は私をお婆ちゃんどころか、穢らわしいものを見るような感じで私を上から下へと舐めるように見るではないか。

……え？ 私、何か変な事した？

「……父上の初恋の相手だと言うから、どんなものかと思っていれば、ただのバケモノじゃないか」

……バケモノ……いや、確かに人間では無いけど……バケモノ……

「言葉ではあらわせない美しさだと父上は言っていたけど、母上の方がずっと綺麗だ」

あ、なんだ。ただのマザコンか。それなら仕方ない。

それよりもそんなふてぶてしい態度をとっているが、この子は分かっているのだろうか？ 王族は私に会って認めて貰わないといけないという事に。そして、私が自分がいつか王になるかもしれない国を守ってくれている『泉の精』だという事を。

別に私を敬えって思ってる訳では無いけれど、感謝の気持ちを知らない馬鹿のために動きたくも無い。

私がここに来てから、変な小悪党……盗賊？ つばい人間を追いつくくらいしかしてないけれど、歴代の『泉の精』の記憶を覗いてみると戦争時には他国の侵攻を『泉の精』の力によって許した事

が無い。

今のこの平和があるのは『泉の精』の力が大きい事を知り、そして今もまだ守られているのだという事を王族ならば理解しなければいけない。理解しない人間が王になるのであれば、私は役目を放棄する。

『帰りなさい。私は、あなたを認めません』

認めない、という事は、この国を背負って立つ事を認めないという事。それは王族である事を認めないという事になり、下手をすれば国外に追放されるのだ。

その言葉の重要性に気づいたセルジュは、今までの生意気な態度もどこへやら。顔を青ざめさせて小さく震えだした。

……うわあ、そんな顔されたら私が凄く悪者みたいじゃない。ちよっと子供相手に厳しくやりすぎたかしら？

いやいや、大人げなくちよっとイラッとした事は認めるけど、こういう子にはガツンと言ってやらないと、甘やかすとつけ上がるだけ！……なはず。子育ての経験なんて無いから分からないけど。

ほら、早く謝っちゃいなさい。そうしたら今度はちゃんと大人の余裕をもって優しく諭してあげるから。

なんて思っていたのに、セルジュは俯いたまま私の方を見ずに、フラフラと去って行ってしまった。

……あら。マザコンって打たれ弱いのかしら？ どうしよう、このまま行かせてしまっただけ良かったのかしら？ まあ、すぐに国外追放なんて事にはならないと思うし……多分。しばらく様子見をしよう。

そうしてセルジュとのファーストコンタクトは終了した。

6・大切なもの

夜の帳が静かな森を覆い、仄かな月明かりだけが泉を照らす頃。
私はずっと一人の少年の気配を追っていた。

言わずと知れたセルジュだ。

彼は私に認められなかった事が余程ショックだったのか、それとも母親に合わせる顔が無いと思っているのか、ずっとフラフラと森を彷徨い歩いている。

子供だから仕方が無いとは思うが、少し危機感が足りないのではないか。この森には私の支配下にある動物しかいないので今は襲われる事は無いが、私が意識していなければたちまち彼は凶暴な動物に喰い殺される事だろう。そのあたりも説教リストに加えておくでしょう。

さて、自分探しの旅もいいだろうと黙って見守っていたが、もう夜も遅いしそろそろ軽く動物をけしかけて帰そうか……と思っていた時の事。不愉快に感じる意思がいくつかセルジュの周りに集まって来た。

私は様子を見るために泉から一度出て、指先だけをまた泉の中へ入れる。そこから波紋が広がり、月明かりだけを映していた泉は波紋がおさまると同時にセルジュの姿を映し出した。

そこにはセルジュだけではなく、数人の小汚い男。見るからに真つ当に生きていない男達が、泣きわめくセルジュを掴んで品定めするかのように下卑た薄笑いを浮かべ舐めるように見ている。

……人攫いの類だろうか？　そうでなくとも、私が今まで追いつてきた野盗と似たようなものだろう。なにせよセルジュが危ない事には変わらない。

私はこの国を、そしてこの国の民を守護する『泉の精』の務めを

果たすべく力を行使する。

私が力を流し命じると、いつもは沈黙を守っているだけの木々が、その枝を手のように伸ばし男達に向けた。

不気味に動く木に驚愕して動けない男を一人。二人、三人と木の手が絡みとり、そして残るはセルジュを捕まえている男だけになった。その男は顔を恐怖で歪めるも、セルジュを抱えたまま剣で木の手を薙ぎ払い走りだす。

しかし、逃げきれるはずがない。森は私の領域なのだから。

アオー———

狼の遠吠えが森に響く。

夜になると闇に同化したように見える灰色の毛をした彼らは木の合間を駆ける影となり、逃げる男を取り囲む。金色の瞳を光らせて唸りながら徐々に詰め寄る狼の群れに、男は震えながら一心不乱に剣を振り回す。

危ないではないか。私の可愛い子達が怪我をしたらどうしてくれるのか。

それ以上は近寄らせないようにして、私は再び木に力を流す。そして、囲まれて逃げ場のなくなった男は、抵抗も虚しく木の手に捕らえられた。その際、セルジュが男の手から転げ落ちて痛そうにしていたのはご愛嬌だ。

ひと息つき、涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにさせているセルジュをそのまま狼に街の方へと送らせようとしていた時、ゆらゆらとこちらに向かって来る幾つかの火の灯りが見えた。

あきらかに人工のものである灯りに、ああ、セルジュのお迎えかしら、となんとなく感じ、街ではなくこちらに向かわせるように狼に指示する。

狼に囲まれて、顔面蒼白に戦々恐々としながら歩くセルジュを見て、少し笑ってしまったのは秘密だ。

そんなのんびりとした私と打って変わって、近付いて来る人間達の先頭に立つ女は様子がおかしかった。泣く子も余計泣いてしまいそうなほど鬼気迫る勢いで駆け寄って来るものだから、思わず半歩ひいてしまう。

「精霊様……！ セルジュはっ……！？ セルジュを、ご存知ありませんか！？」

少しお腹が膨らんでいる女は、赤みがかった金髪を汗で額に張り付かせながら私に詰め寄って来た。

『だ、大丈夫よ……ほら、今こちらへ向かって来ているから、少し落ち着いて……？』

彼女の視線を泉の方へ促すと、「セルジュっ！！」と叫びながら泉に勢いよく飛び込もうとする。それは水泳の飛び込み選手も絶賛しそうなほどとても綺麗なフォームだった。

「アドリエンヌ様いけません！」

「アドリエンヌ様おやめください！」

「それは本物ではありません！」

彼女が地面から少し浮いた時、後ろに控えていた従者達が青ざめながら必死に女を止めようとするも、彼女の耳には届いてないようで、ひたすら「セルジュー！ セルジュー！」と叫びながら泉に飛び込もうとしている。

……天然って怖いわね……従者の方達も可哀想に……
おそらくセルジュの母親でありアレンの妻であろう女と、苦勞し

ていそうな従者達を見ながらそう思った。

彼女達のコントのようなやりとりを遠巻きに眺め、少し経つと、狼に囲まれていまだ戦々恐々としているセルジュが私達の前に姿を現す。

「は……ははうえー！！！」

セルジュの叫びに狼達はビクツとした後、逃げるように森へと帰って行った。そして障害が何もなくったセルジュは、昼間の賢そうな顔もどこへやら、すでに涙なのか鼻水なのか分からなくなっている液体を垂れ流しながら母の腰らへんへとタツクルする。

女は泣き喚きながら腰にへばりつく我が子と、泉に映る我が子を見比べて「あら？ セルジュ？ え？ こっちは？」と混乱しているようだ。そこでどちらが本物が分からないというのが私には理解しがたいが、きっと天然という生き物は我々の理解を超える思考回路をしているので仕方ない事なのだろう。

女は一通り混乱した後、やっとどちらが本物のセルジュかを悟り、そしてここがどこであるのかも思い出したようだ。

「せ、精霊様、失礼致しました……！ わたくし、王太子アレンの妻、アドリエンヌと申します。ご挨拶が遅れました上に、見苦しい姿をお見せしてしまい大変申し訳ございません……なにとぞ、ご容赦のほどを……」

そう言つて、今にも頭を地面に力の限り擦りつけながらの土下座をしそうなくらい恐縮しきっている彼女の顔は、まるで死刑宣告を下されるのを待っている人間のようなようだ。よく見ると身体も軽く震えている。

私を一体何だと思っているのだろうか？ 少し粗相をしただけのメイドを容赦なく切り捨てるような暴君では無いのだが。

『顔をあげて？ 私は何も気にしていないわ。そもそも、もっと早くにセルジュを帰さなかった私に否があるのだから』

「……！？ お、お前には関係無いだろ！？ 僕が勝手に森にいたんだから！！」

生意気な態度は健在のようだ。いや、責任を私に押し付けられない潔さと正義感のあらわれ……にも見えなくもない、かな？

「セルジュ、そもそもこんな時間まで何をしていたの？ お父様も心配なさっていたのよ？」

アドリエンヌの言葉に、セルジュは私に『認めない』と言われた事を思い出したのだろう。顔をまた青くさせて黙り込んでしまった。よし、ここはお婆ちゃんが助けてあげよう。

『セルジュが今ひとつこの国と私の在り方を理解していないようだったから、そのままだと認める事はできないと言ったら拗ねてしまったのよね？』

まるで助けになっていないのは自覚している。ちよつとしたイタズラ心だ。しかし、よく聞くとちゃんと理解できたら認めると言っているようなもの。それに気づいてくれるだろうか？

「セルジュ……あなた、何か精霊様に失礼な事をしたのね……！？」

「僕は何も悪くない！！ 悪いのは、コイツと……父上だ！！」

私のちよつとした気遣いはあわれ無かった事にされ、何故か悪者

扱いされる私。それに何故今アレンが出てくるのだろうか？

「僕達や、母上がいるっていうのに、こんな……こんなバケモノを“愛人”にしてるだなんて……！！」

パシンー！

アドリエンヌがセルジュの言葉を遮るようにその頬をぶった。

その後誰も口を開く者はおらず、従者達が持ったいまつの燃える音と、遠くから聞こえる獣の鳴き声が、静かなこの場によく響いた。

我が子をぶった彼女の顔は悔しそうに歪められていて、そんな母親に対して何故自分がぶたれたのかを理解できずただ彼は呆然としている。

私も呆然としている。セルジュがぶたれた事に対してではなく、セルジュの“愛人”発言に対してだ。もう何年もアレンと会っていないというのに、何がどうなってそうになったのだろうか？

「あなたは、お父様の何を見ているの！？ あんなにも、わたくし達を愛してくださっているお父様がわたくし達を裏切るはずがないでしょう！？」

「だ……だって……。泉の精の話をする時の父上は……いつもいつも嬉しそうで……僕たちよりも、母上よりも、大切なものを、自慢するように話す、から……」

「精霊様が特別なのは当たり前でしょう！？ お父様にとって初恋の方であり、わたくし達のこの国を守ってくださっている敬愛すべき方なのよ！？」

何故アレンの初恋の相手が私だと知っているのだろうか。いや、深

く考えずとも分かるか。きっとあの実直すぎる彼は、馬鹿正直に赤裸々に告白したのだろう。

「ただ勘違いしてはいけないのはわたくし達と、精霊様に対する感情は全く別のものなの！ お父様にとってわたくし達以上に大切なものはないのよ！！ どうしてそれが分からないの！？」

心が、軋んだ気がした。

アレンにとって、彼女達家族以上に大切なものなんてないだろう。それは、分かっている。

ただ、今のこの感情が、人間の時に『彼』と『彼』の奥さんに対して抱いた感情と似通っているような気がして、あれだけ煩わしいと思っていたものがまた私の中に芽生えてしまったのかと、絶望にも似た暗い感情が私の中に渦巻く。

……いや、大丈夫。大丈夫だ。ほら、私の心はあの頃のように疼いてなんていない。アドリエンヌの言葉に、一瞬、過去を思い出してしまったただけだ。

「本当に……？ 本当に、僕たちの事が一番、大切……？ 母上のこと……ちゃんと、愛してる……？」

「勿論よ。お父様は、世界で一番、わたくし達を愛してくださっているわ」

アドリエンヌがそう言ってセルジュを優しく抱きしめると、セルジュは堰を切ったように大声で泣きだした。

私の前では、ただの小生意気な子供でしかなかったセルジュは、今は母に抱かれ年相応の顔をして、無防備にただ泣いている。

そんな我が子を抱いて慈しむように背中を撫でるアドリエンヌの顔はとても穏やかで、セルジュに向けているものはまさに無償の愛

といったところだろうか。

そんな疑う事も、変わる事も無いものを持っている彼女らを、少し羨ましく思う。

人間だった時には私にも親はいて、それなりに愛情を貰っていたはずだが、それは当たり前すぎて気づく事はなかった。親がいなくなつてありがたみが分かるとよく聞いていたが、まさか私がいなくなる立場になつた後に気づくなんて皮肉な話だ。

アドリエンヌは、セルジュが帰りが遅くなつただけで酷く取り乱していた。きっと、本当にいなくなつてしまつたら、絶望よりも酷い哀しみが彼女を襲うのだろう。

そう思うと、私の両親も哀しんでいるのかな……と想像して、今さらながらにとんでもない親不孝をしたものだ、と思う。

アドリエンヌの腕の中で泣いていたセルジュの泣き声は、段々と小さくなつていき、やがてしゃくりあげるだけになつた頃、俯きながら私の方を向いて言った。

「ひつく…ご、ごめ…ひつ…なさ…ひつく…」

私へのあの生意気な態度は、ただ家族を想うあまりの態度だった。まあ、ただの勘違いだった訳だけど、子供だから勘弁してあげよう。私は彼の額に『泉の精』の加護を込めた口付けを落とす。

そして、耳まで赤くなつてしまつたセルジュに、私は言う。

『セルジュ、昼間の話は撤回するわ。でも、今日の出来事に関する反省を五百文字以上、二千文字以内の文にして後日持ってくるように』

ごめんなさいで済んだら警察はいらないってね。
なんて、ちょっとしたイジワルで言っただけだったのだが、後日

セルジュが二千文字ピッタリに反省文を書いて来た時は少し驚いた。

7・流れいく穏やかな日々

私はまた、夢のような幻を見る。

真っ白な四角い部屋に、真っ白なベッドに横たわる私。
違うのは、側にいるのが『彼』ではなく、母であるという事。

母の印象は、一言で言うところ『福々しい』、だった。

太っていた訳ではないけれど、丸くて張りのある頬と、いつもに
こやかな表情が福の神のようで、私はよくお饅頭を母にお供えした
ものだ。

そんな母だったのに、今は頬はこけ、面持ちも暗い。

それに、まともに寝ていないのだろうか、と心配になるほど目の
下のクマも酷いし、服はヨレヨレで髪もボサボサで……いつも身な
りを気にしていた母なのに、痛々しくて見ていられない。

これは本当に一体何なのだろうか。

どういう原理でこんな幻を見るのだろうか。

そもそも、これは幻なのか、それとも現実なのか。

ごめん。ごめんね、お母さん。親不孝ものでごめん。

私、ここにいたい。もう、人間になんて戻りたくない。

それだけ、ここはとても心地良いの。

ごめんね。

丸まった母の小さな背中を眺めながら、私はただ謝罪を繰り返す

しかなかった。

セルジュ事件から時は流れ、二人目の子供シャルロットという女の子、三人目の子供レオナルドという男の子が泉に訪れた。

どちらも、賢そうなセルジュと打って変わって、無邪気ずぎるといっか、なんとというか……。アレンの純粹すぎる部分と、アドリエンヌの天然の部分を併せ持ったような……。可愛いんだけど、少し将来が不安になるような子供だった。

彼らはアレンのように頻繁にここに来るなんて事はなく、それでもそれなりに私の事を慕ってくれているようであまに顔を見せに来てくれる。

「精霊さまー」

「せいれいさまー」

「あ、おい！ お前らそれ以上行くな！」

ぼちゃーん。

セルジュの叫びも虚しく、シャルロットとレオナルドは泉に落ちてしまった。

状況説明をすると、私は泉の対岸にいて、アホの子二人はそれに気づかなかったのか、それとも泉の上を走るスキルでも修得していると勘違いしていたのか、とにかくそのまま一直線に私の方へと突っ走って、泉に落ちた。

「バカかお前は！？ 泉があるのが見えなかったのか！？」

「だってー、レオが止まらないから、行けるんだって思ってー」

「えー？ ボクはあねうえが止まらないから止まらなかったんだよー？」

「人のせいにするな！ いつもいつも前をよく見るとあれだけ……」

泉に落ちた彼らを拾ってセルジュの前に持ってきてあげると、セルジュのお説教タイムが始まった。苦労してそうね、セルジュ。将来ハゲないといいのだけど。

気づかれないくらいの目線で、そっとセルジュの赤みがかった金色の髪の毛を眺めていると、彼の肩越しに木に隠れてもじもじしている女の子が見えた。四番目の子供だろうかと思い、微笑みながら手招きするも、肩をひとつ震わせて木の陰に隠れてしまった。

人見知りが激しいのか。新しいタイプの子ね。セルジュ以外はみんなアホの子だと勝手に思っていたけど、そうではなくて良かった。セルジュの髪の毛の心配も少なくなるというものだ。

「オレリア、こっちへおいで。ちゃんと精霊様にご挨拶するんだ」

馬の耳に念仏状態の二人へのお説教を諦めたセルジュが呼ぶと、女の子はおどおどしながらも近寄って来る。

「あの……オレリア……です……」

……なんて可愛い子なの。いや……可愛いと言うより、綺麗、と言った方がいいかしら？

整いすぎている顔立ち是人形のように、恥ずかしさで俯いた顔に

長く濃いまつ毛が影を落とし、妙な色気を醸し出している。母親譲りの赤みがかった金髪は兄妹全員お揃いだけど、それでも一際輝くその髪の毛はとても上質な絹糸のようだ。

「精霊様、三女のおレリアです。すみません、人見知りが激しくて……でも、僕たち兄弟の中で一番優しい子なんです」

そう言っただけでオレリアの頭を撫でるセルジユの表情はとても優しいものだった。シャルロットやレオナール含め、弟妹達をとて大切にしている事がよく分かる……。ん？ 今、 “三女” って言った？ 次女はどこへ行ったのかしら？ まさか……

「……セルジユ、レオナールって女の子だったの……？」

「えー？ ボク、女の子だったのー？ しらなかったー」

「えっ？ レオ、オカマさんなの？」

「お前らはちよつと黙ってろ！ ……精霊様、レオナールはれっきとした男ですが……」

「あら、そうなの？ “三女” なんて言うから、レオナールが次女かと思っただわ」

ワザとボケただけで、セルジユは真に受けて長い時間息をついた。あんまりからかいすぎると、セルジユの毛根によけい負担をかけてしまうかしら？ 自重してあげないといけないわね。

「次女は……その、なんていうか、ちよつと変わった子で……。いい子なんです、その……ちよつとお転婆すぎるといいうか……。す

みません、近々必ず挨拶に来させますので……」

齒切れが悪すぎるのは、庇いきれない何かが次女にあるという事だろうか。

『私は別にいいのだけど、王族はここに来ないといけない決まりがあるのでしょうか?』

それよりも、自ら苦勞を背負い込んでそんなセルジュの毛根の方が心配だ。

いまだ泉に來ない妹の事を考えてまた長いため息をつく彼に、私は人間の毛根に良いらしい薬草をウサギに取ってきて貰ってプレゼントすれば、何の効果があるのか知らないみたいだったけど、涙ぐみながら凄く喜ばれた。

周りの人間はマイペースすぎる人間ばかりで、自分の事を心配して何かをしてくれるという人間がいないらしい。……ホント、苦勞してるのね。

セルジュが年々苦勞性としてのレベルを上げる一方、比例してこは賑やかになる。それは不快な事ではなく、むしろ私に一種の安らぎを与えてくれた。

セルジュは生意気な子供の印象から一転して、苦勞性の心優しい少年だと分かった。

シャルロットとレオナルは双子かと思うほど行動や言動が似通っているアホの子。だけど、その突き抜けた無邪気さは見ていて楽しいし、微笑ましい。

オレリアは最初こそ全然喋らなかつたものの、シャルロットとレオナルに引つ張られて私と絡むうちに段々とお喋りになり、今では私に一番懐いて頻繁にここに來るようになった。彼女は本当に愛されるために生まれてきたような子で、仕草の一つ一つが愛らしく、

どんな花よりも可憐に微笑むのを見れば、きつとどんな気難しい人間でも笑顔になるだろう。

彼らと過ごす時間はとても穏やかで、見返りを求めずただ無邪気に私を慕ってくる彼らと一緒にいると、私まで綺麗な生き物になったかのような錯覚を覚えるのだ。

それからまた時は流れ、六番目、七番目、八番目の子供もここに来た。特に問題もなく挨拶は済み、彼らもまたここに遊びに来るようになる。纏まって遊びに来れば、その時はもう保育園……いや、動物園のようだ。

飛び回る園児（野生児）達六人と、それを保育士（飼育員）のように見守るセルジユ。本当に彼らを見ていると飽きない。

毎年一人づつ増えて賑やかになっていくけれど、変わらない穏やかな時間。人に流れる時間は早くて、この時間もそう長くは続かないだろう。だからこそ、愛おしく感じるのかもしれない。

人間である事を厭った私が、彼ら人間を愛しく感じるのもおかしい話だけでも。

そんな穏やかで愛おしい時間の中、現れたのはまた毛色が変わった女の子だった。

毛玉。

第一印象はそれだ。

とにかく蛾次郎をひどくしたような感じで、もじやもじやの髪の毛は目まで覆われていて、表情をうかがい知る事はできない。

だが、これだけは言える。

この子、私と同じ匂いがする。

8・毛玉の衝撃

人間であつた頃の私を表すなら、偏屈。その一言に限る。

歳と共に協調性なるものを学習し、その性質はなりを潜めていったが、子供の頃は本当に酷かったと思う。

カラスが何色かと聞かれれば白と答え。女なのに自分は男だと主張し。かと言って男子に混ざって遊ぶ訳でもなく一人でお人形遊びをしていたり。教育番組なんてガキの見るものよ、と仁義なき映画をこよなく愛していた。

そんな私と同じものを、今日の前にいる毛玉から感じる。

『……はじめまして。あなたのお名前は？』

「……目クソ」

そんな名前を本当につける親がいるならぜひ見てみたい。

一筋縄ではいかないと思っていたが、せめて名前くらいはちゃんと教えて欲しいものだ。セルジュに名前だけでも聞いていれば良かった。いや、そもそもこの子は王族の人間なのだろうか？ 何も知らない子が迷い込んで来たのかもしれない。やっとな次女が来たのかと思ひ込んでいたが、身なりが酷すぎる。

蛾次郎も驚きのもじりもじりした薄灰色の髪の毛。その色も兄弟お揃いの赤みがかつた金髪とは違うし、服も酷いものだ。どんな冒険をして来たのかと思うほどあちこち破けている。しかし着古している感じではなく、むしろまだ綺麗な部分だけ見るとまだ真新しい感じがするし、素材も上質のものだろうか。

……そういえば、セルジュが次女はお転婆すぎるとか言っていた気がするが……。まさか朝から今現在（昼過ぎ）の間にそこまでボ

口ポロにして来たのだろうか……。一体どんな大冒険をして来たのかと言うのか。

「ねえ、どうしてそんなに服が破れているの？」

「押し寄せる暗殺者たちから命からがら逃げのびて、森で息を潜めていると伝説の白い獣が現れて、私を楽園に連れて行ってくれると言うからついて行けばそれは獣の罠で、いきなり現れた底なし沼に私は落とされ、必死の思いで這い上がり、気がつけばここに」

なんとという壮大な嘘をつく子だろう。伝説の白い獣や底なし沼がこの森に存在するなどついぞ聞いた事は無い。

「お、お姉さま……。嘘はダメです……」

毛玉のなめらかな口に感心していると、彼女に負けず劣らずポロポロになったオレリアが泣きそうになりながら現れた。ポロポロになっても衰えない美貌は本当に素晴らしい。それよりも、お姉さまと言っていたが、やはりこの毛玉が次女なのか……

「ダンスの練習から私を道連れに逃げ出して、壁をつたい木をのぼり、森に入ってすぐにウサギを見つければ追いかけて回して、そのうちゆうに川に落ちて私を踏み台にして逃げたくせに……」

恨みがましい目で毛玉を見るオレリア。しかし毛玉はそんなオレリアを見る事もせず、疲れたとばかりに横になってお昼寝タイムに突入しようとする。……セルジュの苦勞が分かる気がする。そして私もこんな風だったな、と思い出して子供の頃私に関わっていた人達に謝罪して回りたくなった。

「もう！ お姉さま起きてくださいー！ まだ精霊さまにちゃんとご挨拶もしてないですー！」

「別にいいよ。私、この国出てくし」

『どうして出て行くの？ 何かやりたい事でもあるの？』

必死なオレリアが哀想で、助けてあげようと寝転がっている毛玉に話しかけてみる。しかし彼女はもじやもじやの下に隠された目で私を一瞥しただけで、何も言わず寝に入ってしまった。

……分かる。同じ人種であろう私には分かる。黙り込む時。それは自分にとって不都合な事がある時だ。問いの答えなんて特に無くても、不都合な事さえなければ適当な事を言っておしまい。だが、黙り込む時は何かやましい事、もしくは嫌な事があつた時。

つまり、彼女がこの国を出て行くと言った事にはちゃんと理由があつて、なおかつそれはマイナス思考によるものになる。

あの円満家庭の中に一体どんな不満があつて出て行くと言っているのかは知らないが、偏屈な彼女の単なる誤解である可能性が高い。そんなつまらない誤解で出て行けばきっとアレン達は悲しむだろうし、彼女にとつても誤解したまま離れるというのはとても不幸な事だと思う。偏屈な彼女には説得なんて無意味かもしれないけれど、彼らが悲しまないようにできる限りの事はしよう。

『ねえ、名前は何と呼べばいい？』

「だから、耳クソだつてば」

「もう！ だからどうしていつもそんな汚いこと平気で言うの！？ ほら、ちゃんとオデットですつてご挨拶してくださいー！」

ありがとうオレリア、もうそれで充分よ。名前が知りたかっただけだから。さすがに『毛玉』なんて呼べないし。

『オデット。顔を上げて？』

顔が土まみれになるだろうに、そんな事も気にせずうつ伏せになっているオデットに近づいて言うが、微動だにせずにあたぬき寝入りをしている。……偏屈の大先輩である私にそんな態度をとるとはい度胸だ。

私は力わざに出た。オデットの周りに生えている草を急激に成長させて操り、お腹周りに巻き付けて無理矢理立たせる。によると動く草の不気味さにオレリアは「ひいつ」と小さく悲鳴を上げていたが気にしない。

『人と話す時はちゃんと人の目を見なさいと……』

ゆらゆらと波打つ手でオデットのもじやもじやをグイッと上げると……私は驚きすぎて、次に出す言葉を失ってしまった。

オレリアの美貌を例えるなら、春の花。彼女の微笑みはとても可憐で人の心をなごませる。それに相反するかのようなこのオデットのまさかの美貌に思わず魅入ってしまう。

人が立ち入れない場所に積もる雪の上にある静謐な氷。そんなイメージを抱かせる。

白すぎる肌の上に浮かぶ水色の瞳、スツと通った鼻梁にその下にある薄い唇。オレリアも充分整いすぎていると思っていたのだが、オデットがさらに整っていると感じるのは人が触れてはいけなと思うわせる神秘的な雰囲気のせいだろうか。よく見ると、薄灰色だと思っていた髪は、ちゃんと手入れをすれば銀色に輝くのもかもしれない。

『……なんて、もったいない』

草に絡みとられて不満そうに暴れていたオデットは、私の呟きに「は？」と不審そうな目を向ける。そんな視線を無視して、私は彼女の額に口付けを落とした。

「ちよっ……！？ 何すんの！？ 気持ち悪い！！」

『今、あなたに呪いをかけたわ』

「……は？」

『これから一週間、毎日欠かさずここに来る事。もし、来なかった場合……あなたは“豚”になるわ』

本当は皆にしたような加護の口付けなんだけど、ここに来させるために嘘をついた。さすがに豚は嫌なようで、「豚バラ肉……」と呟きながら青ざめている。この様子ならちゃんと毎日来るだろう。隣りでオレリアまで泣きそうになっているのはちよつと可哀想なんだけど。でも、オレリアが皆に言ってくればなおさら、セルジユを筆頭にした焦る家族一同に無理矢理ここに送り出される事だろう。

ふふ、腕になるわ。一週間でオデットを可愛くしてみせるわよ。

こうして、『オデットを説得』という目的を忘れて、一週間の美容強化期間が始まった。

9・微睡み、見上げた空

「せい……精霊様……。オデットは……。一体、どんな失礼を、したのでしょうか……？」

今にもハゲあがりそうな悲哀に満ちたセルジュが言った。

「お願いいたします精霊様！　どうかオデットをわたくし達のデイナーになさらないでくださいませ！」

娘が豚になったら食べる気満々のアドリエンヌが私にすがり付く。

「お願いします精霊さま！」

「お願いします！」「精霊さまお願いします！」

「せいれいさまー！」「精霊さまー！」

アレンを除く王家が勢揃いしてオデット以外が私にすがり付いてくる。まだ五歳になっていない子供も来ているから、総勢十二人だ。アドリエンヌのお腹にいる子も含めれば十三人になる。一体何人産む気だろうか。

「大丈夫よ、オデットがちゃんと一週間サボらずに来ればいいだけの話だから。それよりも、言ってたモノをちゃんと持ってきて貰えたかしら？」

私が望んでいたモノを出すように促すが、半狂乱になっている彼女、彼らの耳には届いていないようだ。唯一セルジュは叫んでいるが、今にも倒れてしまいそうなほど青ざめて意識はどこかにお散

歩中らしい。現実逃避もいいけれど、セルジュがしっかりしてくれなければ、天然家族は留まることを知らないで困る。

「大丈夫だって言ってるじゃない、もう！ いいから帰ってよ！」

セルジュが持っていた箱を奪い取り、オデットは泣きわめく家族達の背中を押して帰るように促す。それをオデットの強がりだと勘違いしたアドリエンは、オデットを抱きかかえて離さない。それにつられるように、家族一同はまたオデットを中心に泣きわめく。という光景が日が暮れるまで続き、オデット美容強化期間・一日目は結局何もできずに終了した。

二日目、今日はオデットが一人で現れた。良かった、何もできずに一週間を費やしてしまうかと思った。しかし、昨日はちゃんと綺麗な服を着ていたのに、何故今日はまた服をボロボロにしているのだろうか？

「……あの人たちを撒くのに必死だったのよ」

くだらない嘘をつく余裕も無いほど疲れているようだ。何が起ったか気になるところだが、今はそつとしておいてあげよう。

「大変だったわね、お疲れさま。じゃあ、こっちに來て寝転んでくれる？」

訝しげにしているオデットだが、豚になるのを回避するために渋谷の方へ寄って来た。私はオデットを頭が泉に浸かるくらいの位置に仰向けに寝かせ、もじやもじやの髪の毛をゆっくりと梳かすように泉の水を染み込ませていく。

「……ねえ。何してるの？」

『そうね、しいて言うなら、お人形さん遊びかしら？』

見るからに嫌そうな顔をするオデット。そんな彼女を横目に、私はお人形さん遊びをしていた小さい頃を思い出し、その頃好きだったアニメの歌を口ずさむ。

内容的には、人間の子がかくれんぼしているところをクマの子が見ているのだけど、何故かお尻を出した子が一等賞になるという不可思議な歌だ。

「何それ、お尻を出す意味が分からない」

確かに。しかし、子供向けの歌なんて得てしてそんなものだと思う。

意外と鋭いツツコミを見せたオデットにもめげず、私は歌い続けながらオデットの髪にトリートメントをなじませていく。

トリートメントは、この森にあるハーブやハチミツなどを使って、昨日持つて来て貰っていた薬剤調合道具セットで作っておいたのだ。“人間の髪の毛にいいらしい”という歴代の泉の精のあやふやな記憶ではあるけども、まあ何もしないよりはマシだろう。

強情なもじやもじやを梳いて、梳いて、トリートメントを揉み込んで、揉み込んで、ついでに頭皮マッサージをして……と丁寧にしていたら、気持ちよかったのだろうか、オデットは色素の薄いまつ毛を重たそうに上下させている。

無防備なその姿に、自然と私が紡ぐ歌はアニメの歌から、さらに遠い昔聞いたものへと変わっていった。

ねむれねむれ 母の胸に

ねむれねむれ 母の手に
こころよき 歌声に
むすばずや 楽しゆめ

私の歌声に誘われて、動物達が顔を出す。

ねむれねむれ 母の胸に
ねむれねむれ 母の手に
あたたかき その袖に
つつまれて ねむれよや

風が歌い、木々が踊る。

柔らかい陽の光が射し込み、花が笑う。

気がつけば、オデットは動物達に包まれて、小さな胸をゆっくりと上下させていた。

オデットの美貌も手伝って、その光景はまるでおとぎ話の中のようにうだった。

美しく、心地よい世界。夢のような世界の中で、母に歌って貰った歌を歌いながら、母の幻を思い出す。小さく、丸まったあの背中を。

「泣いてるの？」

透明な声が私の歌を遮った。驚いてオデットを見てみると、眠ったと思っていたのに、そのアクアマリンの眼差しは静かに私を見上

げていた。

『泣いてないわ。そもそも、私から涙は出ないの。水から水が出るなんて可笑しな話でしょう？』

「でも、うちの弟妹たちが迷子になった時の顔によく似てた」

迷子……。言い得て妙だな、と変に納得してしまった。確かに私はこの不思議な世界に迷い込んだようなものだろう。しかし、私は望んでここにいたのであって、母のいない不安に泣くような迷子の子供ではない。……どうしようもない郷愁と罪悪感はあるけれども私がどう答えようか迷っている、オデットはどうでもいいと言のように、再び目を瞑り言った。

「ねえ、もつと歌って」

不思議な子だ。鋭く心を覗いたかと思うと、次の瞬間にはもう無関心になる。だけど、否定も肯定もしないその態度がなんだか心地よくて、微睡みの中にいるような感覚で空を見上げる。

そして私は歌う。頭上に広がるこの空と、母の腕の中からいつか見た空を重ね見て。

10・この世界のこと

オデットと過ごした一週間は、美容強化期間と言うよりも、私の勉強の時間だった。

元々髪の毛以外は何もする必要の無い上等なものだったので、お手入れの時間はほんの小一時間程度で終わるのだ。しかしオデットは終わっても帰る事はなく、本を持ってきて日が暮れるまでここでも過ごした。

小さな身体に不釣り合なとても大きくて分厚い本を読んでいるものだから、どんな内容のものなのかと覗いてみるも字が読めない。そもそもこの国の言葉が何語なのかすら理解していないのだ。

では、どうやって話しているのかと言うと、テレパシーとでも言うのだろうか。私には視覚以外の五感が無いので、実際には音を聞く事ができないし、声帯すら無いが、“感じる”のだ。

どこかで音が聞こえると、私の全てがそれを感じ、人間であった頃よりも鮮明に、正確に私へと伝わる。それは人間や動物の発する声でも同じ。ただ、それが“音”としてだけではなく、“意思”として私に伝わってくるのだ。そして、私も“意思”を飛ばして会話している。

そんな訳で、特に不自由は無かったのだが、さすがに字は読めない。以前、セルジュに反省文を書かせた時は、彼に朗読して貰ったので、今回も朗読して貰おうとオデットにお願いしたのだが、とても嫌そうな顔をされた後に「あまり大声で言えるようなものじゃない」と言われた。

大声で言えないなんて、一体どんな不道德な内容なのかと聞けば、遠い国の聖書なのと言う。信仰する神が違うため、あまり大っぴ

らに読めないのだそう。

聖書と言えばキリスト教だろうと思って、なけなしの知識を披露すれば、「まったく違う」とそっけなく返され、逆にどの宗教だと聞かれた。だからキリスト教だ、と言えば、あの世界的に有名な宗教をまったく聞いた事が無いと言う。

そこで、やっと私の中で疑問が浮かぶ。

その疑問を消化するように、オデットに嫌な顔をされながらも色々な質問をぶつけてみた。今さらながら、この国の名前に年号、周りの国の名前、信仰している神の名前、他にどんな神がいるのか、等々。

それらの答えは、私の予想を確実に正確なものにしていく。さらに極めつけはオデットが持ってきていた聖書の中に書かれている絵だった。

二足歩行の獣の絵。

萌え要素たっぷりの人間の容姿に獣耳などではなく、狼のようなライオンのような獣の容姿そのまま、身体付きだけが人間に近くなった感じのものだった。

人間だった頃にも、そういう悪魔的な絵を見た事はあったので、神話の中のものだろうと思っていたのだが、オデットがその絵を指さし、「これが昔うちの国に攻めて来たゴリユール人」とあたかも実際に存在するかのように言うのだ。今もそのゴリユール人とやらは存在するのかと聞いてみれば、当たり前だという風にオデットは頷く。

そこでようやく気づいた。ここは、地球ではないのだと。

今まで、タイムスリップをしたのかと思っていた。私自身はファンタジーな存在ではあるけれども、普通の人間しか見た事無かったし、魔法のような不思議な存在も聞いた事が無い。名前の響きもフ

ランスっぽかったし、フランス語なんて知らないから文字を見ても、フランス語ってこんなだったっけ？ 時代が違うなら、文字も違って当たり前かしら？ と思うくらいだった。

何よりも、無関心すぎたのが大きい。

正直、ここが地球では無いと知った今でも、特に混乱する訳でも悲嘆に暮れる訳でもない。

それは順応性が良いからといった訳ではなくて、私の希薄になった感情では少しの驚きを齎しただけで、そういう事もあるもんなんだな、と他人事のように感じるだけなのだ。

そんな無関心溢れる私を見て、オデットは「この国の守護精霊のくせに何も知らないなんておかしいでしょ！？」と、次の日からオデット先生による勉強会が始まった。

オデット先生は、まだ九歳なのにとても博識だった。

まずはこの国と泉の精の歴史から始まり、経済学、宗教概念を通じての哲学、果てには戦術指南書まで持ち出してきた。一体彼女は何になりたいのだろうか。

まあ、そんなオデット先生のおかげで、ある程度この世界の事は分かったのだが。

まず、世界は丸いという概念が無い。それは純粹にこの世界の摂理が地球とは違うからか、単に文化レベルが低いからかは分からない。でも、戦術指南書なるものに描かれていた戦争に使う道具を見た限り、文化レベルはとても低いとうかがえる。地球で例えるならば、中世どころかそれよりも少し前くらいのレベルではないだろうか。

風呂に入らない、糞尿を道に撒き散らす、といった不潔なイメージが中世以前にはあるのだが、この国の住民達はとても清潔そうで違和感を覚える。それも、オデット先生によるこの国の歴史の授業で解消された。

汚物で大地や水を穢す事を良しとしない初代『泉の精』が、『上水道をしっかりとしろ』と注文をつけたらしい。糞尿の一部は肥やしにするそうだが、それ以外は下水道を通って、二段階に分けて処理をし、最後に私がいる泉からひいている水で浄化してから川に流すのだそう。

よく分らないが、この国の下水道は地球の中世以前に比べたらとても発展しているのではないだろうか。そもそも汚物を綺麗にする技術があつたなら、疫病は蔓延していなかっただろうし。

文化レベルに、どうにもチグハグ感がある。

単に、積極的に戦争しないからそっちの技術が発展しなかっただけなのか。別の世界で地球の常識を当てはめて考えてはいけないのか。

それとも、初代『泉の精』もことは違う世界から来て、上下水道の技術を提供したのか。

なんて事を考えていたら、オデット先生に「ちゃんと聞いているの！？」とお叱りを受けた。言い訳混じりに考えていた話を話すと、水色の瞳が飛び出してしまうんじゃないかというくらい驚かれた。

どうやら、『泉の精』が代替わりしていて、しかも私がすでに二桁の代だという事を知らなかったらしい。国では、建国の時から三百年もの間ずっと同じ精霊だと思われていたようだ。

「寿命があるの？」

と聞かれたが、むしろそこは私が知りたい。

いや、本当のところを言うと、そんなに興味は無い。人間にさえならなければ、私は死ぬのだとしても、ミジンコになるのだとしても構わないのだから。

ただ、歴代の『泉の精』の記憶を覗いて見ると、代替わりの前後だけでも『荒れる』のだ。激しく波打つ水面のように、何かの意思が強く拒否しているかのように、私の意識の侵入を拒む。

特に興味は無いけれど、そんな意味あり気な現象が起きればちょっとした好奇心が疼くというもの。しかし、どう頑張っても見えないので、そこまで執着の無い私は早々に諦めたのだが、オデットの言葉でまた好奇心が顔を出す。また今度挑戦してみよう。

他にも、この国の情勢だとか、周辺諸国の不穏な動きだとか、主に政治的な事をオデット先生から聞いたのだが、馬ならぬ精霊の耳に念仏状態だった。

適度に相槌を打って、真剣に聞いているフリは頑張っていたが、興味が無かったので全く身に入らなかった。一生懸命教えてくれたオデットには悪いと思うけども、私は人間社会に興味は無い。この泉から広がる美しい世界を守れさえすれば、それでいいのだ。

すっかりオデットの美容強化期間だという事を忘れかけた日もあったのだが、ぎりぎりお手入れをしてから帰って貰ったりと、最初の二日は除いて五日間、あっという間に過ぎた。

結果的に言うと、大変満足だ。

絡まって手ぐしすら通すのが困難だったもじやもじやの薄灰色の髪の毛。それは予想していた通り銀色に輝いた。いや、予想を遥かに超えた美しさになった。

オデットが動くたび、ふわりと柔らかく波打つ銀色の髪。その煌めきと共にふわふわと揺れる髪のおかげで、冷然なイメージを抱かせるオデットの美貌が、若干柔らかいものへと変わる。雪の女王から、雪の妖精になった感じだろうか。

それに、髪だけでなく、何故か肌まで綺麗になった事が驚きだった。

あまり赤みを帯びていなかった白く透き通る肌は、より透明に、けれど頬と薄い唇にほんのり色づいた桃色が、健康的な美貌をあらわしている。

髪しかお手入れしていなかったのに、何故……と、一週間を思い出してみると、泉の水のせいかもしれない、と思った。

オデットはまずここに来て顔を洗い口をゆすぐ。起きてそのまま来るからだ。酷い時は寝着のまま来ていた。そして喉が渇くと泉の水を飲む。

下水処理も最後に泉の水で浄化すると言っていたし、何か色んなものを綺麗にする効能があるのかもしれない。そう考えると、オデットのこの髪 of 煌めきも納得がいく。とてもじゃないけど、一週間で綺麗になるなんて思えないほどに傷んでいたのだから。

泉の効能に驚きつつも、綺麗になったオデットをニコニコと眺めると、気味が悪いといった目で見られた。

「結局、一週間私をここに来させて、何がしたかったの？」

この子は鏡を見ていないのだろうか。ああ、寝着のまま来るくらいだから、そう考えるだけ無粋というものか。

最初に、薬剤調合道具セットと一緒に鏡を持って来て貰っていたので、それを取り出してまたニコニコとオデットに見せた。どんな反応をするのかと、少しワクワクしながらオデットを見ていると――

パリンッ！！

鏡を私の手と共に、勢いよく払いのけられた。

まるで穢らわしいものを見たような、穢らわしいものに触れたくないように――オデットは忌々し気に顔を歪ませる。

『オデット……？ どうしたの？』

地面に散った鏡の破片が陽の光を乱反射させ、オデットの揺れる瞳に幾つもの光が映る。

そして、せつかく綺麗になった銀色の髪をぐしゃぐしゃと掻き乱し、乱れた髪の間から覗く氷のような瞳が私を睨んだ。

「どんなことしたって、汚いものは汚いのよ」

『……え？』

何を言っているのか。そう問いかける前に、オデットは私に背を向け、そのまま走り去って行ってしまった。

何が汚いのか。何がオデットをそう思わせたのか。私は何か変な事をしたのだろうか。

思考がぐるぐる、ぐるぐると回る。

最初に訪れたのは混乱。それから不安。そして最終的に——怒りだった。

そうだ、あの子は偏屈の後輩だったのだ。自分が綺麗になっても、素直に喜ぶはずがない。きっと、よく分からないところで勘違いなんなりして、無駄に悩んだりするに決まっている。絶対そうだ！

それともアレか。美的感覚がおかしいのか。ブサイク専門をB専と呼ぶアレなのか。人が望んでも手に入らないような美貌を持っているクセになんて贅沢な。世の中に化粧で誤魔化しきれない容姿に嘆く女が一体どれほどいると思っているのか。

許せない。その根性（美的感覚）叩き直してやる！

その日。

精霊になつて初めて、霧のかかったような意識がハッキリした事に、その時の私はおかしな方向にいった怒りのせいで気がつかなかったのだった。

11・怒れる宝石

オデット矯正計画に乗り出した私は、まず同士を募った。私にはオデットがここに来る事を待つしかないので、できる事が限られてくるからだ。

なので次の日、オレリアが都合よく来た事に飛びついて、早速昨日の流れと、オデットの美的感覚を矯正しようという旨を話したところで、驚きの……というか、やはりというか、逆に可愛らしい気もするような、そんな感じのオデット事情を聞かされた。

「オデット姉さまは美的感覚がおかしいわけではないんです。ただ、すごく自分の髪の色が嫌いみたいで……」

ほら、私たち兄弟つてみんなおそろいの髪の色をしているでしょう？ 瞳の色も誰とも一緒ではないし……。だから、一人だけ違うのをすごく気にして……」

つまりは、醜いアヒルの子の気分な訳だ。

勝手に疎外感を感じて、それが曲がり曲がって『汚い』というおかしな方向に行ったと。そして、汚いと思っっているその色を、さらに汚くして隠すようにもじやもじやにしていたと。思い込みって恐ろしい。

でも、もじやもじやにするくらい、仲間ハズレが嫌だっていうのが、意外と寂しがりやなんだな、と感じて可愛らしいところもあるじゃないか思ってしまった。

でも、だからと言って、許すはずがない。あの美を冒瀆しているもじやもじやを完璧に厚生させる事が、今一番の私の使命なのだ。

『美的感覚がおかしいんじゃない事は分かったわ。でも、オレリア

だって、オデットがもじゃもじゃのままでもいいとは思わないでしょう？。』

「もちろん！ オデット姉さまの美しさを一番知ってるのは私だもの！ 今まであのもじやもじやに隠されて私が一人占めしていた美しさをみんなに知られるのは嫌だけど、最近精霊さまのおかげですます美しくなってきた、それはそれですごく嬉しいんだけど、やっぱり私だけのオデット姉さまでいてほしいんだけど、でもやっぱり……」

どうやらオレリアはシスコンだったようだ。この後、オデットの自慢話を延々と聞かされてどうしようかと思った。

「……なわけで、何をしてオデット姉さまのもじやもじやが綺麗になったのかと、今城中はそのお話で持ちきりなんです」

適当に聞き流していたら、どうやらシスコン話から美容方法の話に変わっていたようだ。

『数種類のハーブとハチミツとかを混ぜ合わせたものを塗ってみたんだけど、それよりもこの泉の水を使ったのが良かったみたい。お肌も綺麗になっていたでしょう？。』

「たしかに……！！ もともと真っ白だったのに、最近はもう光っているのかと思うくらいに白くて綺麗で、まるで絵本の中から出てきたような……」

そしてまたオデット自慢の時間が始まった。

オレリアはセルジュの次にまともな子だと思っていたのに、思わぬ落とし穴だ。天然じゃなかったら家族コンプレックスになる呪い

にでもかけられているのだろうか。

さすがに、自由にさせていたらこのまま日が暮れると思ったので、無理矢理話の方向性を変えて、落ち着いたところで本題に入る。

『オデットは一言で言うと、寂しいのよ。皆とは違うから、きっと仲間ハズレにされたみたいに感じるのね。だから、そういう風に感じなくさせればいいの』

「どうやってですか？」

『そうね……。疎外感を感じているのは……やっぱり『愛情』が足りないと感じているからだと思うの。』

だから、いかにオデットを愛しているのかを伝えるのよ。その上で、そのままでもいいんだって事をとにかく訴えるの。髪色なんて関係なく、家族だって事を理解させるのよ。それにはオレリア一人だけではダメ。家族全員でオデットに訴えかけるのよ。オデットは綺麗だ、自慢の家族だ……って。

ただ、気をつけないといけないのは、オデットはとても気難しい（偏屈）から、直接的に言ってはダメ。さりげなく、それとなく、遠回しに訴えるのよ』

「わかりました！」

まかせてください！ と姉のために鼻息荒く意気込むオレリアを見て、オデットの事が本当に好きなんだな、と圧倒されつつ、その気持ちにオデットが少しでも気づいてくれればいいと思った。

他の家族達にも、美容強化期間一日目の反応を見る限り大切にされている事は一目瞭然だし、それをオデットがちゃんと理解できれば、私がこれ以上出しゃばる必要は無いだろう……

……と思っていたのは甘かった。

いつものように、のんびりと動物達とお喋りしたり、ぼんやりと空を眺めていたある日の事だった。

キラキラした何かがこちらに爆走して来ているのが視界に映る。

ふわふわと揺れるたびに煌めく銀色の髪、の上にはスパンコールが付いた大きなリボン。

白く発光しているかのような肌を包んでいるのは、ビラビラと大盛りのレースのドレス、にふんだんに散りばめられた小さな宝石。

服だけでは飽き足らず、首や腕、耳にもジャラジャラとアクセサリーが成金なんて目じゃないほど付けられていた。

まさに歩く宝石。いや、走る宝石がこちらに向かって来ているのだ。私は発する言葉も失って、ただソレを凝視してしまう。

この清閑な森に不釣合なギラギラとしたソレは、呆気にとられている私の前に辿り着くと、憤りもあらわに荒々しく叫んだ。

「アンタでしょ！？ アンタの差し金なんでしょ！？」

怒れる宝石、もといオデットの叫びが森に響き、近くにいた鳥が驚いて羽ばたいていった。

12・陽が射す場所

何が？　そう言葉にしようにも、あまりのギラギラ具合に圧倒されて、ブンブンと首を横にふるのが精一杯だった。

「嘘つきなさいよ！　オレリアが『精霊さまに愛情表現をしろって言われた』って言ってたんだから！」

怒れる宝石、もといオデットの言葉に啞然となる。

いや、確かにそういう事は言っただけ……。それと、今のこのオデットのギラギラに何の関係が……？

「あれから、何かおかしいなって思ってたのよ。みんなして挙動不審だし、うつすら笑いながら『綺麗だね』なんて言ってくるし」

うわ……それは気味が悪い……

「それだけなら良かったのよ。それだけならね……！」

深く重いため息をつけば、スパンコールでギラギラとしているリボンの端がオデットの顔にかかった。それが目に入ったオデットは苛立たしげに荒々しくリボンを引っ張り投げ捨てる。

「あまり害もなかったから放っておけば、だんだんと増長していつて、私と目が合うたびに『綺麗だね』って堂々と言うようになって、最近じゃ『いただきます』のかわりに『オデットの美しさに乾杯』なんて言うのよ！　何の嫌がらせよ！」

さらにお母さまなんて毎日、毎日、私を可愛い可愛い言いながら、

ビラビラした服を着せたがるわ、オレリアもそれに便乗してキラキラしたものの付けたがるわ、下の子達はそんな私を囲んで、『綺麗』『可愛い』の大合唱するわ……。

それが少しずつ増長していくのよ！ このままじゃ私そのうち増えすぎたレースとキラキラに埋もれて窒息死してしまうわ！」

私が忠告した『さりげなく、遠回しに』という言葉はどこへ行ったのだろうか……。

後で聞いた話なのだが、オデットのあまりにもの無反応具合に、『この程度じゃオデットの心に響かない！』と段々とエスカレートしていったそうだ。加減と手段を考えて欲しかった。

『それは……大変だったわね……？』

「何ひと事みたいに言ってるの！？ アンタのせいでしょ！？ まったく、守護精霊のくせして、守るところか災難に合わせてどうすんのよ!？」

『オデット。確かに、あなたの家族達は少々度が過ぎるところもあるかもしれない。でも、それはあなたを想うからこそその行動なの。あなたはとても愛されているのよ？ そんな気持ちを災難だなんて言っではいけないわ』

「アンタに何が分かるのよ!？」

オデットは、また綺麗に整えられていた銀髪をぐしゃぐしゃと掻き乱す。

ああ、これは重症だ。いや、もじやもじや具合で重症なのは分かっていたけれど。久しぶりに聞いた「誰も私の事なんか分かってくれない」的な台詞に、ここの穏やかな時間にとっぷりと浸かってい

た私には少々刺激が強かった。

『何を馬鹿な事を言っているの？ 分かる訳無いじゃない』

刺激された私の心に反応して、泉がさざ波立つ。

『何が分かるの』ですって？ それで、『分かる』なんて言っても『分かるはずない』って否定するんでしょ？』

私の意識が、覆っているものを蒸発していくように、ふつつつと沸き起こってくる。

『でも、『分からない』なんて言おうものなら『どうせ私の事なんて誰も分かってくれない』って余計殻に閉じこもってしまうんですよ？ そんなの、『私の事分かって』って言ってるのと同じなのよ？』

穏やかさを失った私の様子に、オデットは私を睨みつけるようにしているけれど、その水色の瞳の中には怯えの色が揺れている。

『言つとくけど、誰もあなたの気持ちなんて分からないし、あなたも誰の気持ちも分からない。』

似たような感情を他人と共有する事もできるけれど、結局は別の生き物なの。完全に同じ気持ちを持つ事なんてできないのよ。

分からないからこそ、少しでも分かるように、近づけるように努力するんじゃない。そんな努力もせずに勝手にひねくれて、小汚い髪の毛にした挙げ句、人の気持ちまではねつけて、馬鹿じゃないの？

そんな事も分からずに、ただ自分は孤独だ、可哀想だ、なんて自己陶醉するのは、本当にただの馬鹿としか言いようがないわ』

悲劇のヒロインぶった思考のせいで、手を伸ばせばある幸福を捨ててるなんて、愚かしいにも程がある。

大切だと思った子だからこそ、大切だと思った人の子供だからこそ、余計に苛々する。

「何よ……何よ……！！ アンタなんか嫌いよ！！」

オデットの瞼の中の清冷な氷が溶けて、大粒の雫が零れ落ちた。

一瞬、水晶が零れたのかと思うほど、それはとても綺麗だった。

けれど、綺麗な涙を流す彼女は、その涙の美しさも帳消しにしてしまうほど、顔を真つ赤にさせて顔を歪ませている。

憤怒。まさにそんな言葉がしっくりくる。

「自己陶醉なんかしてないわよ！」

地を蹴る煌めく靴。

陽の光を受けて、髪が、服が、腕が、オデットの動きに合わせて煌めく軌跡を描く。

キラキラと弧を描くそれに目を奪われて、油断していた隙にいつの間にか私はオデットに組み敷かれていた。

「私はただ、この髪の色が嫌いなだけよ！ 白くて、不気味で、誰にも似ていないこの髪が！！」

オデットの白くて小さな手が振りかぶる。
ぽよん。

振り下ろされた先は私の水でできた身体。緊張感の欠ける音を立てながら、ゆらゆらと身体が波打つ。

「鏡を見るたびに！ お父様やお母様のものでない髪を見るたびに

！ 私は誰なのか分からなくなつて……！ 本当に私はあの人たちの子供なのかつて、いつも、いつも、不安で……！！
みんなが楽しそうに笑つても、私は笑えないの！ みんなの中にいると、よけい私の異質さが浮き上がつて、私は違う生き物なんだつて、ここにいちやいけないんだつて……！！」

ぽよん。ぴちよん。

白い手が私の身体を揺らすたび、オデットの瞳から零れる小さな水晶が私の上に落ちてくる。

それが私の身体に一粒、また一粒と融けるたび、オデットの感情が流れ込んできた。

孤独、不安、恐怖。

小さな身体に必死に詰め込んで、今にもはち切れてしまいそうだった。

「……もう、いやだ……！ 苦しいよ……誰か、助けてよあ……！！」

すがり付くように私の胸に顔を埋めて泣く彼女を、私は身を起こし抱き上げた。

『助けて欲しい？ だったら私が、助けてあげる』

潤む水色の瞳が私を見つめる。銀髪が乱れて顔に張り付いているのを、私は慈しむように撫でながら整えて、そして――

『なんて言つと思つたら大間違いよ！！』

投げた。

キラキラと弧を描きながら宙を舞うオデット。
その時のオデットの顔と言ったら見ものだった。まさに豆鉄砲をくらった鳩。これをネタに、これから数十年彼女をからかう事になる。

バシャーーン！！

泉へと勢い良く落ちたオデット。すぐ浮かんでくるだろうと思っていたのに、彼女はもがきながら沈んでいく。

あ、しまった。あれだけジャラジャラ宝石を付けていれば、そりゃあ重いか。

急いでオデットを引きあげて、咳き込むのが落ち着いてから、私はまた彼女を抱き上げて言う。

『少しは目が覚めた？』

オデットは恨めしげに私を睨む。『助けてあげる』と言った言葉を一瞬でも信じてしまったのだろうか。生憎、私は人間だった頃勤め先で、すぐに新人が泣いて逃げ出すから指導をやらせるなど警戒されていたほどの他人に厳しい人間だったのだ。

『あのね、誰も他人の心が分からないのと同じ。自分を助ける事ができるのは自分だけ。』

悩むのも自分。悩みの答えを見つけるのも自分。誰かが道しるべになってくれたとしても、示してくれた道を行くか行かないかは結局は自分が選ぶの。分かる？』

「……わかんない」

『そうね、まだ子供だものね、子供には難しいわよね』

「……！？ バカにしないでよ！！」

『ふーん？ じゃあ、どういう意味が分かったの？』

私の安い挑発に乗っかってくるも、やはり理解できずに黙るオデット。

私も正直、子供相手にこれで分かってくれるとは思っていないし、ひねくれた価値観を一瞬で変える事なんてできないだろうとも思う。でも、どうにもこういう人間を見ているとイライラしてしまうのだ。

『要はたかが髪色ごときでウジウジすんな！ って事よ！』

そう、どんな理屈をこねようと、結局はこれが言いたかったのだ。

『オデットがどんなに拒否しようとも、あの純朴なくせに絶倫なアレンと天然万歳なアドリエンヌの子供に変わりないし、その銀髪はとても綺麗だし、家族全員オデットの事を大切に思ってるし、特にオレリアなんかはこっちが引くくらいオデットの自慢をするし、とにかくオデットが思い悩むような事なんて何も無いんだから』

「ぜつ……りん……？」

あつ、しまった。子供相手に使う言葉ではなかったか。

『と、とにかく、オデットがいつまでもそんなだったら、セルジ

「ユの髪の毛がなくなる日も早くなっちゃわよ?」

「え……なんで?」

『知らないの? 心労がすぎると、ハゲちゃうのよ?』

「ハゲ……セルジュ兄様が……ハゲ……」

『そうよ。セルジュの髪の毛を守りたいなら、心配させるような事は……』

「ぶっ……はは! あははははは!! ハゲ!! セルジュ兄様が……!! ハゲー!!」

どうやらツボにハマってしまったようだ。絶倫という単語を忘れさせようとセルジュをネタにしてみたが、効果覿面すぎたかな。

「僕は……ハゲてませんけど……?」

密かに先程から木陰で成り行きを見守っていたセルジュが、ハゲ発言に堪えきれず出てきた。ネタにしてごめんねセルジュ。また毛根に優しい薬草あげるから許して。

セルジュが言葉を発したのを合図に、わらわらと他の兄弟達も出て来て、笑いすぎて地面に転がり回っているオデットの周りに集まってくる。

「オデット姉さま、大丈夫? ああ、こんなにびしょ濡れになって、でも、そんなオデット姉さまもうつくし「オデット、なんで泣いてんのー?」「さむいの?」「オデットねえさま、おかしいる?」「

オデットがわらってるー」「オデットねえさま、わらったかお、かわいいねー」

笑い転げるオデットに、その周りで言いたい放題の兄弟達。まるで纏まりが無いような光景だが、彼らがオデットを心配している気持ちが伝わってくる。

『いつまで笑っているのオデット』

笑いすぎてお腹を痛そうに抱えているオデットの脇に手を入れ、私と同じ目線まで持ち上げた。

『今日はサービスよ。私が道しるべになってあげる。彼らの気持ち素直に受け入れなさい。そうすれば、あなたは救われるわ。言ってる意味、分かる？』

「……わかんない!!」

笑い顔から、頬を膨らませて不機嫌そうな顔に変わるオデット。けれど、その目線はただ無邪気に笑いかけてくる兄弟達に向いていて。また水色の瞳が潤むのを私は見逃さなかった。

春の陽射しのような兄弟達に囲まれて、オデットを覆っていた氷が溶ける音が、聞こえた気がした。

【オデットの日記】

【エビュール暦三百八年 輝月の五十三日目】

今日は最悪だった。

木から落ちるわ、ウサギを追いかけてたら川に落ちるわ、変な生き物に呪いをかけられるわ……。

ああ、明日から一週間あの変な生き物と一緒にいなきゃいけないなんて……憂鬱。

【エビュール暦三百八年 輝月の五十四日目】

泉の精の歌っていた歌が、頭の中でずっと響いている。

お尻を出した子いっとうしょう……なんの呪いだ。

でも、その後の子守歌っぱいのは聞いていても気持ちよかった。

おひるねの時にはまた歌ってもらおう。

【エビュール暦三百八年 輝月の五十五日目】

信じられない。

この国を守っているくせに、この国のことをなんにも知らないなんて。

最近、まわりの国が騒々しいっていうのに、興味もなさそうに……なんて精霊だ。もっとしっかりしてほしい。

【エビュール暦三百八年 輝月の五十八日目】

今日は、歴史を覆す事実が判明した。

三百年ずっと同じだと思っていた泉の精が、もう二十代目くらいになっていたらしい。

どういう仕組みで代替わりするのか聞いてみても、それも興味無さそうに知らないと言っただけ。こんなヤル気の無い精霊にこの国を任せていいのかと不安になった。

【エビュール暦三百八年 輝月の六十日目】

腹立たしい。

この一週間、あの精霊が私の髪で何をしているのかと思えば、綺麗にしようとしていたらしい。よけいなことを。

こんな、白くて気味が悪い髪をどんなに綺麗にしようとしても、よけい不気味さが際立つだけじゃない。

【エビュール暦三百八年 水月の三日目】

なんか……おかしい。

みんなが私をやたらチラチラ見てくる……。

なんというか……珍獣を捕獲しようとしているみたいなの……いつたいたいのなの？

【エビュール暦三百八年 水月の五日目】

お父様が半笑いで私の髪の毛を褒めてきた。気持ち悪かった。

【エビュール暦三百八年 水月の八日目】

最近、やたらみんなが私の髪の毛を褒めてくる。半笑いで。なんなの？ バカにしてるの？

お母様以外の人間をめったに褒めないあのセルジュ兄様まで私を褒めてくる……。遠回しに嫌味を言われてるんだろうか？

【エビュール暦三百八年 水月の十三日目】

最近、露骨すぎる。私を見るたびに「綺麗」という単語をまぜてくる。

今日の晩ご飯の時なんか「オデットの美しさに乾杯」ってお父様……なんの嫌がらせ？

【エビュール暦三百八年 水月の二十五日目】

もうたえられない。

無視をすればするほど、みんなの言動が激しくなってくる……。

そんなに私のこの髪が異質だって言いたいのか？ そんなの分かっているのよ。私が一番分かっているんだから。もう、ほうっておいてよ。

【エビュール暦三百八年 水月の二十六日目】

ワケが分からない、あの精霊。

『助けてあげる』なんて、優しく言ったかと思えばいきなり泉に投げるなんて。一瞬でも油断したのがくやしい。

言ってることもなんのことだかサッパリだった。正直、子供に対する言動じゃないと思う。

あぐくの果てに、『ウジウジすんな！』なんて、さんざんグダグダと説教みたいなこと言っておいて、最後にそれは無いと思う。なんておとなげ無い精霊だと思った。

そう思ったら、なんだかおかしくなってきた。必死に笑いをこらえてたのに、お父様のことを『絶倫』だとか。セルジュ兄様のことを『ハゲ』だとか。セルジュ兄様がハゲちゃったのを想像しちゃって、もう、おかしくてこらえきれなかった。

なんだか、思いつきり泣いて、叫んで、笑って、つてしたらスツキリした。

スツキリした後あの精霊が目の前に来た時。

世界が変わった気がした。

透明なあのかからだの向こう側の世界が、キラキラしていて、とても綺麗な世界に見えた。

ホントに変な精霊。

無気力かと思えば変なところでヤル気になるし。子供にたいして、たしなめるとかそんなんじゃないくて本気で怒るし。

『精霊』なんて、そんな高尚なものに思えない。どっちかっていうと……生臭い。そう、俗臭がぷんぷんする。

あれはきつと、自分を一番に優先させる類のヤツだわ。

でも、それがいつそ清々しく感じる。うわヅラだけの偽善的な人間よりもよっぽど安心する。

そんな変な精霊を見ていたら、なんだか今まで悩んだことがバカバカしくなった。むしろ、何に悩んだかすら一瞬分からなくな

った。

これからも、ウジウジすることがあったら、あの精霊に会いに行こう。

また泉に落とされるかもしれない。そうしたら私はまたあの精霊を殴ろう。きっと、あの人は私を受け入れてくれる。

そしてまた、私を笑わせてくれるんだ。

13・限りある輝きに祝福を

ああ、まただ。

真っ白な四角い部屋に、真っ白なベッドで眠る人間の私。
今回は、『彼』でも、母でもなく。幼なじみが側にいた。

彼女は彫刻のように動くことはなく、まつ毛エクステで重そうになった双瞼でじつと私を眺めていた。

やがて、彼女は高級バッグから何かを取り出して、おもむろにそのゴテゴテとしたネイルを付けた手を私の顔に近づける。

え、それ……油性……ペン……！？

あつ、ちよつ、お前何してんの？

ねえ、ちよ……ああ！！

……おデコに『肉』……つてお前！？ 子供みたいな事すんな！！

え？ まだすんの？ うわわわ、ヒゲ書くならまだラーメンマン
みたいなヤツの方がマシだよ！ 何青ヒゲみたいにしてんの！？

最悪！！ お前、戻ったら覚えてろよ！！

「……！？ ナニ……？」

私の叫びに反応するように、彼女がこちらを向いた。

——え？

目が、合った。
声も、聞こえた。

これは、現実？ それとも、幻？
分らない。恐い。私は、どこにいるの？
嫌だ。恐い。ここにいたくない。

視界が荒れ狂う波のように歪む。
それは、泉の精が代替わりする時を覗いた時と、同じような――…

――…いさま…

――せいれ…さまー

誰かの声がする。
ここは、どこ？

ゆらゆら、ゆらゆら。

見上げる水面には、ゆらゆらと外の世界が泳いでいる。

ああ、そうだ。私は『泉の精』。森と、その中にある小さな国を
守る精霊。

いつから私はそんなものになったのだろう？ どうして私はそんなものになってしまったのだろう？

私の中にある渦巻く違和感が、一生懸命答えを探そうとしても、
膜を張ったような意識がそれを阻む。

ゆらゆら、ゆらゆら。

今の私はまるであの水面のよう。形なく揺れ動き、幻の世界を映し出す。己の存在さえも、幻のような――

――私の意識が、どこか遠くへ消えてしまいそうになった時、一つの塊によって水面が激しく揺れた。

既視感。

それは、柔らかく微笑むあの子と初めて出会った時を思い出させた。

あの日と違うのは、溺れて沈んでくるのではなくて、確かな意志を持って私の方へ向かってくる。

静かな氷を思わせる理知的な瞳は、水と同化しているはずの私に確かに向けられていて。

伸ばされた白く小さい手が、私の意識をすくい取った。

ザバッ……

「もう！ 呼んでるんだから早く出てきてよ！」

泉の外へ最近できた小さな友達と共に出た。彼女は整った顔を不機嫌そうに歪ませている。けれど、私は今自分の身に起こった事を整理するので精一杯だった。

「――私、消えかけて、た……？」

「……え？」

小さな友達の、不安に揺れる水色の瞳が私を見つめる。

何が起こったのか。分からない。分からないけれど、私は消えかけていたんじゃないだろうか——この世界から。そして、それを引き止めてくれた小さい手。

『オデット。私、あなたに助けられたみたい』

そう、彼女の手が私の意識に触れた瞬間、薄れた意識が浮上するのを感じたのだ。

理解できなくて、不思議そうにしている彼女の濡れた銀髪を撫でる。気恥ずかしそうにしているが、まんざらでも無さそうに俯いている彼女の様子が微笑ましくて、私の心にじんわりと温かいものが広がった。

『さあ、今日は何をして遊びましょうか？』

「今日も勉強よ！ アンタのためのね！」

今日も空は高く、青い。柔らかそうな雲が流れ、それを追いかけるように鳥達が羽ばたいている。

緩やかな時が流れる空の下には、おとぎ話の中のような森。

木々が囁き、花が歌い、動物達は森の中を踊るように駆け回る。

鏡のように輝く泉の側には、美しくて小さな少しお転婆なお姫さま。

もう少し。

もう少し、このままで——…

人に流れる時間は早い。

今日は、オデットの十八歳の誕生日。それに併せて、彼女の立太子の儀も行われる。

そう、オデットは女であるにも関わらず、長兄であるセルジュさえも押しつけて次代の王の座を勝ち取ったのだ。そうなった背景には、私の存在が大きかったという事は否定しない。

事の発端は私の何気ない一言だった。

『そんなに政治に興味あるなら、オデットが女王になればいいのに』
本当に何気無い一言だった。まだ小さいのに、やたらと政治の話、主にこの国の現在の情勢についての不満、改善点などを懸命に話すものだから、じゃあオデットが頑張ればいいじゃない、という軽い気持ちで言ったのだ。

この国は、酷い男尊女卑の風習がある訳では無かったのだが、男が王の座に就くという暗黙の了解的なものがあつたため、最初は聞き流していたオデットだったのだが、次第に野望が燃えてきたらしい。

オデット曰く、「アンタを見ると、我慢という言葉がバカバカしく感じてくる」……だとか。そこは褒められていると前向きに解釈した。

そんな訳で、欲望に忠実になったオデットは飛ぶ鳥を落とす勢いで益々勉強に熱心になり、武術も嗜む程度では収まらず並の使い手では相手にならないほど極め、更には私の指導の元、男を手玉にする術も身につけ——超人。まさにそんな言葉がしっくりくる人間に成長した。

超人オデットは、まずその美貌と実力で国民の支持を得、父王アレンの腹心を懐柔し、それからアレンに直訴、そして最大の難関だと思われていたセルジュはというと、「うん、僕は二番手の位置がしつくりくるからいいよ」とあっさりオデットに王の座を譲るという骨肉の争いなどとは無縁に、実にすんなりと事が運んだのだった。本当に平和すぎる国だと思った。

遠くで、人々の歓声が聞こえてくる。きっと今頃お披露目パレードみたいなのをしているのだろう。

私も祝福しよう。あの子の輝く未来のために。
限りある生命の灯が燃え尽きるまで。最後のその時まで、輝きを失わないように、私はここで祈ろう。

鳥達が羽ばたいていく。花と共に、私の想いを乗せて。

14・矛盾する心

最近はアドリエンヌも子供を産んでおらず、子供達も成長して、泉で遊ぶよりも恋に勉強にと忙しいようだ。

あの賑やかで穏やかな日々を想うと、この美しいだけの景色がどうにも物足りなくなる。希薄になった感情でもはつきりと自覚できる“孤独”。身を切り裂くような激しい感情では無いけれど、ジワジワと徐々に蝕む病魔のよう。

——寂しい。

思っ、て、苦笑する。人になりたくない私が、人であるあの子達に温もりを求めるなんて矛盾している。

銀の指輪を太陽にかざして眺める。

アレンから貰った銀の指輪。最近、何故かこれを眺める事が多くなった。これを眺めていると、寂しさが和らぐ気がする。何故だろう。

私は、自分で思っていた以上にあの子を大切に思っていたのだろうか。それとも、もう会えないという抑制が、今頃反動となって表れてきたのだろうか。

ぼんやりとした意識では、その答えを導き出す事ができない。私の意識を覆っているものの奥の奥では、私は、何を思っているのだろうか——

「精霊様——！！！」

ぼちゃんっ

甘く響く声が聞こえたかと思えば、勢いよく後ろから抱きつかれ

る。その勢いで、銀の指輪が泉に落ちた。

「あれ？今、何か落ちました？」

『ええ、昔可愛い子から貰ったものがね。いつも泉の底にしまつてあるから気にしないでいいわ。それより、今日はどうしたのオレリア？』

振り向くと、春の花を思わせる美女が、輝く赤金色の長い髪を拗ねるように弄りながら言った。

「……また、オデット姉様に好きな人を取られたんです」

滲んできた涙が長く濃いまつ毛に付いて、彼女が瞬きをするたびにキラキラと光る。そんな演出が付いた瞳で懇願するように見れば、男は彼女を守りたくなるだろう。

だが、こんなに美しくも庇護欲をそそられるオレリアよりも、オデットの方が一枚も二枚も上手なのだ。

『だからオレリアも、私の“男ゴコロ操作術”の授業に参加すれば良かったのに』

「そんなこと、私にはできないですううう！」

何を想像しているのだろうか、羞恥で顔を真っ赤にさせながら地面に突っ伏して本格的に泣き始めてしまった。

まだ彼女達が子供だった頃、私が『可愛いだけじゃいつか飽きられて捨てられるわよ』と、子供相手に言う事じゃないと分かっていたながらもイタズラ心で“男ゴコロ操作術”の授業を行っていた事も今は懐かしい記憶だ。

オデットは女王になるための勉強の一環として真面目に受けていたのだが、オレリアは「そ、そういうことは、おたがいの真心があれば大丈夫なんですっ」と無駄に純粹さを發揮して私の授業を避けていた。

その結果がこれだ。正直者はバカを見るといった言葉をよく体現している。

いや、決してオレリアをバカにしている訳でも、オデットが卑怯な手を使って、わざとオレリアの想い人を取っている訳でもないのだが。

オデットはあくまで人の上に立つ者として、人を従わせる手段として少し活用しているだけなのだ。少しでもあの美貌だから、本人が思っている以上の効果を上げて、本人の知らないところでオレリアのような被害者が出ているらしい。

そして、オレリアもそれが分かっているから、オデットを憎めないのだ。

「オデット姉様だから、仕方無いんです……だって、普段は氷のようなのに、ふとした瞬間に微笑む姿はさながら永久凍土に射した女神の慈悲の光のようで、それに心を奪われてしまうのは仕方ない事なんです……」

なんだかよく分からないが、無愛想な人間がたまに笑うギャップがいいというアレだろうか。

「仕方ない……そう、仕方ないんです……でも、それでも、苦しい……」

はらはらと静かに涙を落とすオレリア。その庇護欲を掻き立てられる姿を男の前で見せればいいのに。

『オレリアの好きな人は、オデットともう恋人同士なの？』

「いいえ、オデット姉様は興味が無いようです……」

『それなら、諦めるのは早いんじゃない？』

「どうしてですか？もう、あの方の心はオデット姉様に囚われているというのに……」

『人の心ほど変わりやすいものは無いのよー？結婚してたって他に好きな人ができたりなんてよくある話だし』

経験者は語るってね。結婚してたのは私じゃなくて『彼』の方だったけれど。

ああ、でも、きっとアレンならそんな事はないんだろう。誠実で不器用な彼は、たった一つのものを守るので精一杯に違いない。よそ見をする余裕なんてないだろう。

不器用な彼が涙を流す姿を思い出して、それをとて愛おしく感じる自分に気づく。それが、恋愛感情なのか、それとも子供達に対するものと同じなのか、今の私には分からないけれど。

『とにかく、諦めるのは早いわよ？ オデット相手だから仕方ないとか、頑張らない自分に対しての言い訳にしか聞こえないわ』

「……っそ、そんな事は……！？」

『オレリアは、オデットにも負けなくらい綺麗だから大丈夫。自信持って？ ね？』

アレンの不器用な所が似てしまったオレリアを抱き寄せる。

可愛いオレリア。あなたの父親のように泣かないで。私まで悲しくなってしまう。アレンのようにあなたを縛るものなんて無いのに、我慢する必要なんて無い。

「オレリア」

私の腕の中から聞こえるすすり泣く声を遮るように、澄んだ声が聞こえてきた。

こちらへ向かってくる彼女の波打つ銀色の髪が、ふわりと揺れる。子供の頃よりも研ぎ澄まされた美貌が、輝きを放っているかのよう。にその銀髪を、白い肌を、アクアマリンの瞳を見せる。

手を伸ばせば触れられる位置まで来た彼女は、紅く色づいた薄い唇を開く。

「アンタ、まだウジウジしてんの？ 精霊様もそうやって甘やかすから、オレリアがいつまでもそんななのよ？ なんで私みたいに泉に放りこんだりしないわけ？」

『オデット。オレリアの心はあなたみたいに頑丈にできていないの。繊細なの。分かる？』

「何それ、ケンカ売ってんの？」

「えっ？ あ、あの、オデット姉様？ 精霊様？」

軽く喧嘩のようになっていた私達を見て、オレリアは泣く事も忘れて慌てている。しかし、これは私とオデットなりの挨拶のようなもので、本気で喧嘩している訳ではない。こういう場面を何度も見ているはずなのに、オレリアは純粹すぎていまだに本気で喧嘩していると思っっているのだ。

「や、やめてください！ケンカはよくないですー！」

「だいたい、オレリアがウジウジしてるのがいけないのよ？ 私は別にアイツの事なんとも思ってたないって言ってるじゃない。早く告白しちやいなさいよ」

『そうよ、告白しちやいなさいよ。望みのない相手より、自分の事を好きって言うてくれる可愛い女の子の方がいいに決まってるんだから』

「えっ？ あ、あの……」

「そうよね。私の事好きって言うてくる男も、すっぱりフッたらすぐ他の女と付き合ったりしてるヤツ多いし。だから大丈夫よオレリア」

『なんて言っても可愛いしね、オレリアは。だから大丈夫。告白しちやいなさい』

「そうよ、むしろ告白しない意味が分からないわ」

「えっ？ えっ？ な、何……？」

『だから告白よ』

「そう告白」

『早くしないと他の女に取られちゃうわよ？』

「そうよ、だから早くしないと」

『早く早く』

「告白告白」

「も、もうやめてくださいー！ー！！ 分かりましたから！！ 告白しますからー！ー！！」

洗脳は成功したようだ。叫んでから青ざめているオレリアに「言ったからには必ずしなさいよ」と釘を刺したオデットと笑い合う。こうしていると、人間だった頃を思い出す。女友達とくだらない話をしたり、恋の話をしたり。楽しい時間。かけがえのない時間。それは今の私には人間の頃の半分にしか感じない。

人間である事を疎んじた私。どうしてそう思ってしまったのだろうか。それは、心を手放すほどのものだったのだろうか――

「オデット！オレリア！」

思考の波に吞まれそうになった時、低く鋭い声が聞こえて我に返る。

「セルジュ兄様、どうしたの？」

肩で息をしながら切羽詰まった様子の兄に、オデットが心配そうに問いかけた。

「父上が……っ！父上が倒れた……っ！！」

アレンが、倒れた。

それを、私はやはり自分とは関係の無い、どこか遠くの世界で起こっている事のようにしか、感じれなかった。

15・命のキセキ

人に流れる時間は本当に早くて。

彼と初めて会った日の事を、今でも鮮明に思い出せる。まだ彼は五歳で、小さくて、可愛くて、ここが楽園なら彼は天使のようだった。思った。

可愛い私の王子様。それがいつの間にか“男”になり、“父親”になり、その子供達ももう大きくなって。そして、今、彼に“死”の気配が近付いて来ている――

アレンが病に倒れてから、三ヶ月が過ぎた。時間に関心の無い私がどうして明確に分かるのかと言うと、三日に一度、誰かしらが泉の水を汲みに来るようになったからだった。

泉の水は、下水道の浄化もあり、色々な美容効果もある事も分かっている。病気にも効くのではないだろうか。オデットが藁にも縋る思いで、アレンに泉の水を飲ませる事を提案したのだ。

「精霊様、こんにちは。本日も水を戴きに参りました」

『こんにちは、セルジュ。……顔色が良くないわ。あなたも飲んだら?』

元々苦勞が滲み出ている顔つきが、今は目の下のクマも酷いし頬もこけて、なんとも痛ましい感じになっているセルジュに水を勧めると、幸が薄そうなうつすらとした笑みで感謝された。

『ちゃんと食べてる? 睡眠は? どんなに忙しくても身体が資本

なんだから無理しちゃ駄目よ?」

「ありがとうございます。それは分かっているのですが……母上と弟妹達の暴走を抑えつつ、政務をこなさなければならぬので……」

セルジュ曰く。アレンが倒れた日から取り乱しっぱなしの天然素材の家族達が、アレンの部屋に行っては泣きわめき、どこから入手したのか不明な怪しげな薬を飲まそうとしたり、ご利益があるという怪しげな壺を高値で購入しようとしたり、奇声を上げながらおかしな祈禱をし始めたり……とにかく心休まる日が無いのだとか。可哀想に。

いつもの毛根に優しい薬草と、今日はさらに精力がつく薬草を持たせてから彼を見送ったのだった。

この国の医療技術はまだ未発達で、アレンの病を治す事はできない。病の名すら分からないのだ。しいて言うなら“不治の病”だろうか。そんなものに襲われた家族達が取り乱すのは当たり前前の事だろう。

彼、彼女達には何もできない。ただ、緩やかに、けれど確実に近づいてきている“死”を見ている事しかできない。

それは、どれほどの苦痛なのだろう。

人間だった頃は、近い人間が死ぬという出来事が無かった私には想像すらできない。今も、やはりどこか他人事のように感じるだけ。

哀しくはない。ただ、どこか、虚しいだけ。

アレンが倒れてから数ヶ月。一向によくならないアレンに代わり、オデットが新女王の座に就いた。国民から慕われていた前王アレン

が倒れたという事に沈んだ空気に包まれていた国は、若く美しい女王を迎えて活気を取り戻したようだった。

戴冠式の前後はさすがに慌ただしい日々を送っていたオデットだったが、それ以外のやる事はあまり変わらないらしく、しばらくしたらまた定期的にここに顔を出すようになる。

彼女は相変わらず仕事熱心なようで、私が興味が無い事を知っていても政治の話を中心にしていた。どうやら今は、彼女が子供の頃に私が施してあげたトリートメントや、泉の水を使った美容グッズを国内外に売り出して一儲けしようと考えているようだ。父親が生死の狭間を彷徨っているというのに、自国の守護精霊を利用してまで儲けようとするなんて実に遅い事だ。でも、それは決して自分の懷を潤わせるためのものじゃない事は知っている。

愛するこの国を豊かにするために。

愛する父が愛したこの国を守るために。

きっと、近い未来アレンは死んでしまうだろう。けれど、アレンの意志を継いだオデットが生きていく。

人に流れる時間は早くて。瞬きをしている間に散ってしまう花のように儚いもの。けれど、どうしてこんなに愛おしいのだろう。

セルジュの翠色の瞳が。

オレリアのどこまでも真っ直ぐな純粹さが。

オデットの国を想う心が。

子供達の柔らかい微笑みが。

確かに、アレンの生きた証し。

それは、命の軌跡。

ただ遺伝子が残るだけだというのに。その遺伝子に、心を乱され

るのが煩わしいと思っていたはずなのに。

温かな命の繋がりが、とても眩しく、愛おしい。それはまるで奇跡のようで、輝きを伴って私の心を揺らめかせる。けれど、一瞬の揺らめきの後にはもう、一つの波も起こらない水面のように静まる。煩わしい事なんて何も無い美しい世界。それは、引き換えにとっても大切なものを攫っていつてしまった気がする。

ああ、私は、私の心は、どこに行ってしまったのだろう。

アレンが倒れて、もうすぐ一年になる。

日々やつれていくセルジユ。ひたむきに生きているオレリア。国のために努力を怠らないオデット。日々成長していく子供達。巡り変化していく日々の中、私だけは何も変わらない。

ふわふわ、ゆらゆらとこの世界を揺蕩う。哀しい事も、煩わしい事も何も無い、穏やかで、虚しい日々。

そんな日々の中、私は今日も王家の紋章がついた銀の指輪を月にかざして眺めていた。これを眺めているとアレンが側にいる気がして、どこかへ行ってしまった心が満たされる気がするのだ。

——会いたい。

そんな、叶わない事を想って、すぐにその想いをどこかに追いやる。彼は、もう動ける身体ではないし、意識も無い日が多いらしい。もし病ではなくても、会う事は無い。だって、私が彼を突き放したのだから——

——ガサッ。

何かが草を踏む音が聞こえ、そのすぐ後に、ずざつ、という何かが倒れこむような音がした。それは、大人の男の形をしていた。

仄かな月明かりは、彼の艶を失い色素が薄くなった茶色い髪を、ぼんやりと浮かび上がらせる。

——どうして、ここに……。そう考える間もなく、彼は起き上がろうとして、力が入らずにまた転びそうになったので、私は急いで駆け寄り彼の身体を支えて仰向けに寝かせてあげた。

青白い月の光は、彼の顔をより蒼白に見せ、刻まれた深い皺が実際の年齢よりも上に見せる。瞼を上げる事さえも苦しげで、ようやく開いた翠色の瞳が私を見つけ、そして——子供の頃と何一つ変わらない笑顔を浮かべた。

「……会い、たかった……ディーナ」

私を『ディーナ』と呼ぶのはたった一人だけ。
たった一人。アレンだけ。

16・コロロの、行方

別に他の子に名前を聞かれなかった訳じゃない。
なんとなく、教えるのを躊躇ってしまったのだ。

アレンから貰った名前。それは銀の指輪と同じように、大切に大切に、誰にも見つからないように、泉の底にしまっておきたくて――

「ディーナ……」

潤いをなくした唇から漏れる掠れた声が私を呼ぶ。

『アレン……。老けたわね……。何歳になったの？』

「はは……。つれないな、久しぶりに会ったっていうのに……。それだけかい？」

私がイタズラっぽく笑うと、アレンもつられて笑う。

立つ事すらままならないその姿は、可愛いものでもなく、逞しいものでもなく、痛ましいほどに弱々しいものだけだ。その笑顔はいつまで経っても変わらない。無邪気で、純粹な、私の可愛い王子様のまま。

しかし、その笑顔は長く続かなかった。アレンは笑みが浮かんでいたその顔を歪ませ、胸の辺りの服を掴みながら小さく呻いた。

『アレン。どうしてこんな身体でここに……。？』

「僕は、きっと……。もうすぐ死んで、しまう……。その前に、どう

しても、君に……会いた、かった……」

彼は身体の痛みを抑え込むように、荒くなった息と共に吐き出すように言った。

私に会いたかった……？ まさか、アレンはいまだに私への想いを断ち切れていなかったと言うの……？ そんなはずはない。だって、子供達からいつもアレンとアドリエンヌの仲睦まじい様子を聞いていたのだから。もう私の事なんて、忘れていたんじゃないの……？

私の戸惑いをよそに、彼はいつかの逞しい腕など嘘のような痩せ細った手で私の頬を撫でる。まるで、とても愛おしいものを慈しむように。

「僕は、幸せだった……。少しおつちよこちいだけど、献身的な妻。沢山の、可愛い子供達。温和な国民達。僕の人生は、“愛”に溢れていた……。それなのに……」

彼は何かを堪えるかのように眉を寄せた。それは病の苦痛によるものではなく、今までずっと心の奥底に閉じ込めていたものが溢れ出して、油断すると感情の波が彼を呑み込んでしまいそうに見えた。

「それなのに、僕は、君を忘れられなかった……！！」

その言葉で、ギリギリのところを保っていた彼の心の防壁が、決壊した。

「妻を愛しながら……！ 子供達を慈しみながら……！ 満たされた日々を過ごしているはずなのに……！僕は、いつでも心のどこかで、君を求めていたんだ……！！僕は、僕は、なんて、浅まし

いんだ……!!」

感情の波が彼の瞳から溢れて、青白い頬を濡らす。

「確かに、一番大切なはずなのに、愛しているのに……。彼女達も、僕の愛を信じて、疑わなかったというのに……」。

家族を想う、安らかな気持ちとは違う……。君を想う、焦がれるような気持ちに、いつも僕の心は、君の元へ行きたいと叫んでいた……。

それは、なんて……。なんて、酷い裏切りだろう……」

なんて事だろう。私にとってはほんの一瞬の時間だったけれど、人である彼にとって三十年近い年月というのは、とても長いものなのではないのだろうか。その長い年月を、私への想いと、家族への想いの間に挟まれて、ずっと苦しんでいたのだろうか。

彼が、純粹すぎるが故に。

『泣かないで、アレン。……。まだ、私の事を好きだったなんて驚いたけど……。あなたは、あなたの義務を……。いいえ、それ以上のものを全うしたわ。いつだって子供達も、アドリエンヌも、幸せそうな顔をしていたもの。彼女達に幸せを与えたのは、紛れもなくアレン。あなたなのよ？』

あなたは、誰も裏切っていない。そうでしょ？ 心がどこに行きたがっていたって、あなたはどこにも行かなかった。私の元へ来なかった。ずっと、家族の元にいたのよ』

そう、どんな事を言っても、結局私の元へ来なかった。人間だった頃、幾度となくその状況に心が悲鳴を上げていたのを覚えている。口ではいくら私を愛していると言っているけど、「土日は会えない」「子供が熱を出して」「嫁の実家に呼ばれて」……。いつだって、

家族を一番に優先させていた『彼』。

そんな『彼』に嫌悪感を抱きながらも、離れられない自分も嫌いで、苦しくて、辛くて、思い通りにならない心なんていらな思った。ただど――。

だせど、この虚無感はなんだろう。

今は、アレンが泣いていても、『彼』との事を思い出しても、自分が何を思っているのかが分からない。

アレンに哀しんで欲しくないと感じている事は分かる。だけど、それを感じている心が、何も感じていない私に遠くから教えてくれているだけのような気がして。全てのものがあやふやな存在に思えて、今、目の前で泣いているアレンでさえ、非現実的なものに見えてしまう。

「デー、ナ……」

我に返りアレンを見ると、彼の息がより荒くなってきている事に気づく。

『アレン……。苦しいの？ もう帰った方がいいわ。歩ける？ 動物達を遣いに出して誰か呼んで来て貰いましょうか？』

しばらく待ったが、息をするので精一杯なようで返事はない。このままだと本当に死んでしまうのではないかという危機感に、私が動物達を呼ばうと立ったその時。

痩せ細った手が私の腕を掴んだ。

「いい、んだ……。ここに、いたい……」

『でも……』

私の言葉を遮るように、彼は私の腕を掴む手に力を入れた。その痩せ細った手に、どうしてそんな力があるのかというくらい、強く強く。

「君の、側で……死に、たい……」

もうあまり開かない瞼の中の翠色の瞳が、縊るように私を見つめた。けれど、確かな強い意志を持ったその眼差しに、私は何も言えなくなった。

純粹で、実直すぎるが故に、心と身体が自由にならないと泣いたアレン。誰にも見つからないのに、心に私を住ませただけで家族を裏切ったと泣くアレン。

私には、そんな彼の精一杯の我儘を拒む事はできなかった。

最後に私を選んでくれたという浅ましい優越感もあったのかもしれない。

けれど、最後まで、彼の心を自由にさせてあげたかったのだ。

『アレン……。分かったわ。一緒にいてあげる……。あなたが、安らかに眠れるように』

彼の半身を起こして背中から抱き抱えると、荒かった息が少しマシになった。

彼の涙が頬を伝い、そのまま私の腕へと落ちて融けこむ。

家族への罪悪感。心を解き放った解放感。そして、私と共に居れる事の至上の幸福感――。

アレンの涙が、それを私に伝えてきた。

「デイー、ナ……。僕があげた、指輪……。まだ、大切に、してくれてる、かい？」

『ええ、大切にしまつてあるわ』

「今度こそ、誓う、よ……。死んでも……。生まれ、変わっても……。僕の心、は、君と、共に……」

アレンの息が、少しずつ小さくなってきていた。それと同時に、心臓の動きも緩やかになる。自然と、アレンを抱く腕に力が入った。

『アレン……。指輪、大切にするわ。ずっと、ずっと……』

「嬉しい、よ……。ああ、ディーナ……。僕は、幸せ、だ……。妻に、子供達に、どんな言葉で、罵られたって、いい……。僕は、ずっと……。こうして、いた……。い」

途切れ途切れになりながらも、会えなかった分を取り戻そうと話すアレン。それもやがて空を覆っていた夜の闇が白み始めた頃、掠れて小さくなった声がより力を失い――

「ありがとう……」

そう言って、アレンは何も言わなくなった。

『アレン。私の可愛い王子様……。おやすみなさい……。』

アレンと初めて会った日の事を、今でも鮮明に思い出せる。まだ私の自我がハッキリとせず、ただ泉の中で揺蕩っていただけの頃、足を滑らせて沈んで来たアレン。顔を真っ赤にさせながら、また私に会いに来ていいかと聞く姿がとても愛らしかった。

無邪気で、純粹で、可愛くて……。とても、大切だった。

その、アレンが今、私の腕の中で死んでしまった。

哀しい。

ああ、なんて哀しいの。

何も感じない。

あれだけ可愛がっていたのに。
会いたいと、思っていたのに。
どうして、何も感じないの。

哀しくない事が、哀しい。

アレンを抱きかかえたまま、太陽が昇っていく姿をただじっと眺めていた。

陽は昇り、やがて沈む。そしてまた陽は昇り、そうして世界は時を刻んでいく。時は人の身にも、動物にも、植物にも訪れる。

私だけ。私だけが変わらない。

変わりゆく世界に私だけが取り残されてしまったようで、人でない事に、初めて恐れを抱いた。

まだ太陽が昇りきっていない頃。数人の従者を連れたオデットとアドリエンヌが、息を乱しながらやって来た。

アレンがもう息を引き取ってしまったという事に、従者達も、いつも小憎たらしいオデットさえも慟哭していたけれど、アドリエンヌだけは、私の腕の中で幸せそうに眠るアレンを見て、ただただ茫然としていた。

その時のアドリエンヌの顔を、私は忘れる事ができなかった。

16・ココロの、行方（後書き）

【ボツネタ集】

take 1

アレ「ああ、あったかい……ディーナの身体は冷たいはずなのに……あったかい……なんだか……眠くなって、きた……」

『寝るなー！！ 寝たら死ぬぞー！！！！』

私は必死に彼の頬をぶちました。するとどうでしょう。私のビンタと共に闘魂も注入されたようで、彼は勢いよく立ち上がり、「元気ですよー！」と叫ぶじゃありませんか。

そして彼は回復し、その後生きた化石となるまで長生きしたそう
な。

（fine）

take 2

アレンの息が、少しずつ小さくなってきていた。それと同時に、心臓の動きも緩やかになる。自然と、アレンを抱く腕に力が入った。

ネロ「僕はもう疲れたよパトラッs……」

『えっ！ちよっ！？アレンは！？アレーーン！！！？』

t a k e 3

加山雄三「ぼくあ、幸せだなあ」

『えっ！ちよっ！？アレンは！？アレーーン！！！？』

以上、ボツネタというより、小ネタ集でした（ノ、）

17・優しい檻

気がつくと、私はまた現実なのか幻なのか分からないものを見ていた。

そこは真つ白な部屋ではなく、ぐちゃぐちゃになったどこかの部屋。

壁は所々陥没しており、床には色んな物が散らばっていた。割れた食器。引き裂かれたぬいぐるみ。乱雑に散らばる子供用のオモチヤ。

ただ散らかったのではなく、明らかに誰かが暴れたのであろう後の部屋には、ヨレヨレになった服を着て無精ひげを生やした『彼の姿』

この部屋の主であろう頂垂れる『彼』の手には、一枚の紙。

それに書かれている文字に、私は目を見張った。

そこには、彼の名前と、おそらく奥さんのものである名前。そして、その上部には――『離婚届け』の文字。

え……？ どうして？ 私はもう、いなくなっただから、安心して奥さんと子供と、暮らせばいいじゃない。

ああ、人を刺すくらい狂ってしまった人とはもう一緒にいられないって事？ そんな身勝手な。彼女を追い詰めた原因は私にもあるけれど、それは彼だって同じ。

自分の欲のために一人の人間を狂わせてしまったんだから、『離婚』という形で逃げるんじゃないくて、ちゃんと責任を取りなさいよ。

「それは、違うよ」

私のひとり言に答えるように、彼が呟いた。

私はまたもや目を見張る。今の私は、水の身体さえない意識だけがここにいるのだ。“声”が届くはずが無い。いや、でも、そういえばこの前も、幼なじみが私の“声”に反応を示していたような……。

——何が、違うの？

「逃げたんじゃない。どれだけ君が大切か、気づいてしまったんだ……。どんなにアイツや子供に恨まれようと、俺は、もう……」

試しに彼に話しかけてみれば、また私の“声”に答えるようにして彼は言う。

そして、彼が俯いていた顔を上げた時——真っ直ぐな瞳が、私を捕らえた。

瞬間、意識だけだったはずの私は、人間であった頃の姿へと形を成した。

戸惑い、自身の姿を確認する。水では無い、肌色の腕がある。けれど、確かな存在ではないらしく、顔の前まで持ち上げた右手の向こうで、彼がこちらに向かってくる姿が透けて見えた。

彼は腕を広げ私の身体を包み込もうとするが、不確かな存在の私に触れられるはずもなく、彼の手は空を切る。

ここにいないけれど、ここにはいない私を感じ、彼は血色の悪い顔を泣いてしまいそうなほど哀しげに歪めた。

「お願いだ……！！ 戻って来てくれ！！ 今度こそ……今度こそ、俺は、君の側を離れたりしないから……！！」

馬鹿な人。もう、遅いの。私はもう人間ではないし。どうやって戻れるのかも分からない。戻れるのかすら分からない。もし、戻れたとしても、まだあなたを愛しているのかも分からない。

私の心は水の檻に囚われて、何も感じなくなってしまった。それが、とても哀しい。その哀しいと思う気持ちすらも、ただの知識として認識しているだけであって、私の中にはただ空虚なものが広がるだけ。

ああ、なんて哀しいの。

あなたがどんなに泣き喚いても、あれだけ求めていたあなたが私の元へ来てくれると聞いても、少しの喜びも、猜疑心も、憐憫の情さえも、何も感じない。

泉の精になったばかりの頃は、確かにまだ近くに心を感じていたはずなのに。それなのにもう、どこにあるのか、存在しているのかすら分からない。

いつからだろう、心がどこにあるのか分からなくなってしまったのは。私の周りだけに流れる緩やかな時が、そんなものを感じさせなかった。

それは、水の流れに削られる石のように、緩やかに形をなくし、いつか私という自我すらなくしてしまうのかもしれない。

——怖い。

唇が、無意識のうちに、その言葉を紡ぎだした。

彼が目を見張る。触れられないというのに、また手を伸ばし、そしてまた空を切る。

私も触れられないと分かっているながら手を伸ばさずにはいられなかった。けれど、やはり彼が差し出した手を掴む事はできず、彼の手を通り抜けた。

——怖い。怖い。助けて……！！

「待つてくれ！！ 行くな！！」

私に必死に手を伸ばす彼の姿がさざめく波のように歪む。
直後、渦巻く奔流が私を呑み込んだ。

何が起こっているのか考える余裕などなく、それは私を急激に流していく。

流れはごうごうと荒れ狂い、“何か”の悲痛な叫声を伴い渦巻く。
——怖い。嫌だ。消えたくない。助けて。

叫び、もがいてみても、流れはそれをせせら笑うかのように易々と私を押し流していく。

私は為す術も無く、ただ“何か”の意識の波に流され、混ざり合い、自分が何なのか分からなくなってきた時、それを見た。

幾人もの人間の嘆きを。

意識の奔流の中は嘆きの記憶が渦巻いていた。

ある者は恋人に。またある者は友に。さらにまたある者は血縁者に。心を裏切られ、慟哭し、そして叫ぶ。

心などいらないと。

ああ、これは私だ。別個の存在だけれど、求めたものは同じ。
心を放棄し、人間である事すら放棄した、幾人もの“私”。

そして知った。あの泉の存在意義を。

幾千、幾億もの痛苦の叫びが時空を裂き、流した涙が泉となり、

膨大な嘆きはうねりとなって同じ痛みを持つ者を呑み込み、泉へと流れ着く。

そして、痛みから己を守るために自ら優しい水の檻に閉じこもるのだ。

私は一人ではなかった。

私が気づかなかっただけで、あの泉の中には私以外にも多くの意識が揺蕩っていたのだ。

きつと、私の心はそこにある。

恐れる事なんて何も無かったのだ。だって、私は守られていたのだから。同じ痛みを持つ者達に。

心が表に出ようとするたびに引き戻し、守ろうとしてくれていたのだ。痛みを感じてしまう前に。

ああ、なんて優しく、哀しい檻だろう。

それは身を切り裂くような痛みを失くす代わりに、沸き立つような歓喜をも齎さなくなる。

誰かと共に在る歓びも、大切なものを喪失した哀しみも、情の全てを失くしてしまう。

哀しい。哀しい。歓びすらも否定してしまうほどの痛みが哀しい。心を放棄してしまうほどの傷を負ったのに、それでもまだ誰かを守ろうとする、その優しい心が哀しい。

人に傷つけられたのに、まだ人の温もりを求めてしまうのか。求めているのに、痛みを恐れてその檻から出てこれないのか。

いいわ。私もあなた達と共にいよう。

臆病で、孤独を嫌う哀しいあなた達のために。あなた達と同じ、哀しい私のために。

共に、哀しみも、苦しみも、歡びも、全てを閉じ込めて。少しでも孤独が和らぐように、混ざり合い、揺蕩い、少しの優しさを世界に流しながら。

この、心地よい世界に、融けてしまおう――

【オデットの日記2】

【エビュール暦三百二十年 双月の三十二日目】

今日、お父様が死んだ。一年も持ったのが奇跡だと医師から言われた。やはり、あの泉の水の効果だろうか。あらゆるものを浄化する効能は病にまで効くのか……。病にかかってしまっ前から飲み続けていれば、もしかしたら病などとは無縁になるのではないだろうか……。

泉の水を使った美容品を我が国の名産品にしようと思っていたが、それはやめた方がいいかもしれない。泉の水の効能が他国に知れば、争いの火種となりうる可能性は高い。

病を知らず、若さと美貌を保たせる。特に権力者などは目の色を変えて欲しがるだろう。

…… お父様が死んだ日にまでこんな事を考えてしまう自分は、本当に可愛気がない娘だと思う。

思い返してみても、お父様の前で素直になった事など、一度も無い。

甘えていたのだ。どれだけ私の態度が冷たかろうと、お父様の愛情は変わる事などないのだと。変わらない愛情を見たくて、心にもない事ばかり言っていた。

なんて幼稚なのだろう。そんな事で愛情を試してばかりで、私はお父様に何一つ返す事ができなかった。

愛していたのなら、何故もつと優しくしてあげられなかったのか。私も愛していると、何故伝えなかったのか。せめて、もう少し笑いかけてあげていれば。

お父様の好物を奪って困らせる顔をさせるのではなくて、好物を

差し出していれば。

お父様は笑ってくれただろうか。

いや、そんな事をしなくても、お父様はいつだって私に笑いかけ
てくれていた。

そんなお父様に私は何一つ返せなかった。なんて親不孝な娘だろ
う。今さらどんな後悔をしたって遅い。

もう、お父様は、いないのだから……。

【エビュール暦三百二十年 双月の四十日目】

お母様の様子が最近おかしい。

皆はお父様がいなくなつた淋しさで、少し心が病んでいるのだと
言うが、どうも違うような気がする。

そう、あれは誰かの想い人が私の事を好きだと知った時の女の様
子に似ている。

お父様が精霊様の元で息を引き取つたという事が、それほどまで
にお母様の心に痛手を負わせたのだろうか。

お父様の初恋の相手が精霊様だという事は周知の事実。しかし、
誰から見ても私達は深く愛されていたという事もまた事実。

それだけでは足りないのか。一番に愛されないと堪えられないも
のなのか。まだ誰も愛した事のない私には男女の事柄など分からな
いけれど。

精霊様に抱かれて幸せそうに眠るお父様の顔を思い出すと、これ
が、愛するという事が、と懂れにも似た言いようのない気持ちにな
る。

お母様はそれが許せないのだろうか。自分の元ではなく、他の者
の側でそんな顔をしていた事が堪えられないのだろうか。

なんにせよ早く元のお母様に戻って欲しい。

もつけない人間の心を知る事なんてできないし、その心を追い求めても仕方のない事。

私達は、生きているのだから。生きていかなばならないのだから。

【エビュール暦三百二十年 豪月の三日目】

お父様が亡くなってからしばらく慌ただしかったが、やっと落ち着いてきたので、手元にある美容液の数も少なくなってきた事だし、泉に行く事にした。

美容液を切らすと、姉妹達がうるさくて困る。……そういえば、最近は何故かセルジュ兄様も一所懸命髪に付けてたな。育毛剤としても効果があるのだろうか……。

最近、美容液を大量生産しようとしていたので国内でハーブを育ててはいるのだが、やはり森のハーブの方が質が良い。それに、意外と淋しがり屋なあの精霊に顔を見せてあげなければ。

そう思って泉を訪れたのに、精霊様は出て来なかった。最近来なかったから拗ねているのだろうか？ まったくおとなげ無いんだから。

泉に飛び込んで引きずり出そうかとも思っただけれど、最近風邪気味なので今日はやめにした。代わりに、石を何個か投げておいた。

【エビュール暦三百二十年 豪月の十五日目】

お母様はよくなるどころか、益々おかしくなっていく。

お父様と一緒に眠っていたベッドを壊したり。お父様の肖像画を

切り裂いたり。その目には狂気が宿っていて、もう穏やかに笑うお母様の面影など無い。

皆はやはりお父様がなくなった哀しみで乱心したのだと思っているが、それは違う。

裏切られたと思う心が憎しみとなって狂ってしまったのだ。その証拠に、お父様の痕跡を消すかのように破壊して回っている。

あれだけ仲睦まじかったのに。あれだけ愛し合っていたのに。

最後の最後で、お父様はなんて事をしてくれたのだろう。

心を押し殺してまで守ってきたものを最後に壊していくなんて……。

お父様を軽蔑する気持ちはある。しかし、王としての立場が理解したくもないものを理解してしまう。

精霊様は人間では無いので妃に迎えられるはずもない。お父様には兄弟もいなかったため、お父様しか王位を継ぐ者はいなかった。どれだけ精霊様を愛していても、お母様と婚姻するしかなかったのだ。

それなのに、望まぬ生活なのに、私達は幸せだった。望まぬ立場に立たされてなお、お父様は私達に深い愛情を、優しい幸せを与えてくれた。

それなのに、どうして憎めようか。

お母様の事を思うと憎みたい。しかし、お父様が与えてくれたものが大きすぎて憎めない。

私はどうすればいい？ お母様が狂っていく姿を見ているだけしかできないの？ いっその事、お父様を憎んでしまえたら楽なのに。苦しい。心の行き場所が無い。

精霊様ならこんな時どうするの？ 教えて欲しい。それなのに、どうして出て来てくれないの？

どこに行ってしまったの？

【エビュール暦三百二十年 輝月の五十六日目】

お母様が死んだ。

狂いながら。恨みながら。呪いながら。

私は生涯、あの禍々しい光景を忘れる事はできないだろう。

お母様は自らの血を使って呪いの陣を描いていた。

部屋全体に広がる陣を描くのに、一体どれだけの血が必要だった事だろう。血を出すために己を切り、血が出なくなったらまた別の場所を切り。どれだけの苦痛がお母様を襲った事だろう。

狂ってしまったお母様にはそんなもの感じなかったのか。痛みをなくしてしまうほど、憎しみに心を囚われていたのか。

哀れなお母様。お母様は一体、最後に何を望んだのだろう……。

お母様が何の呪いを施したのかは分からない。ただ、陣に使われていた文字は、お母様の母国の古い言葉だという事だけは分かった。弟妹達はお母様の母国の人間を呼んで見て貰おうと叫んでいたが、私とセルジュ兄様はそれを許さなかった。

自国の姫が嫁いだ先で、何かを呪いながら命を断った事が知れれば、彼の国との友好関係にヒビが入るだろう。それだけは避けねばならない。彼の国に見限られれば、こんな小国などたちまち干上がってしまう。

母の死を嘆くよりも、損得を優先させる私を見て、政治の事など露とも関心の無い弟妹達には、私はどれだけ冷たい人間に見えた事だろうか。

恨むなら恨めばいい。蔑むなら蔑めばいい。

私は、この瞳のように心まで氷になろうとも、この国を守るのだ。

お父様が愛し、精霊様が守るこの愛しい国を。

【エビュール暦三百二十年 水月の十日目】

キツイ。お母様が亡くなってからというもの、セルジュ兄様が使
いものにならない。いつその事休んでくれればまだ他の人間を使う
事もできるのに、無駄に責任感が強いものだから、無理矢理仕事を
しようとする。

でも、心ここに在らずな状態でまともにこなせるはずもなく、そ
の負担が全て私に回ってくるのだ。

キツイ。でも、弱音は吐けない。お父様とお母様の相次ぐ死の上、
セルジュ兄様が弱ってる今、私まで安易に弱音を吐けば不安は国中
に広まってしまう。

でも、キツイ。苦しい。吐き出してしまいたい。

それなのに、どうして出て来てくれないの？ 私が弱音を吐ける
のは、あそこだけなのに。

本当にどこに行ってしまったの？ もう、どこにもいないの？

精霊様まで、私を置いていってしまうの？

18・共有する痛み

遠くで誰かが泣いている声が聞こえる。

哀しいの？ だったら、あなたもここに来ればいいのに。ここは、哀しい事も、苦しい事も、煩わしい事なんて何も無い世界。

そう、何も無い。心を震わす楽しさも、歓びも、何も無い。けれど、ここは優しい世界。

何も感じないけれど、悠久の平穏がここにはある。

それなのに、あなたは どうして私を呼ぶの？
私は、ここにいたいのに。

ここにいたいのに、その声に、引き寄せられてしまう。

透明な声が私を呼ぶたび、閉じ込めているはずの心に波紋が広がる。

いつもは強気な声が涙で震えるたび、隠しているはずの心が震える。

徐々に声が近くなる。それと同時に、明滅する銀色の光。

心の目を瞑っていても瞼を通り抜けて射し込むその光は、泣きたくなるほどの温もりを伴い私を侵していく。

抗う気など起こさせない不思議な光は徐々に大きく、近くなる。

そして、一際大きく煌めいた瞬間、眩い光の向こうに、甘く優しい記憶を見た。

銀色の髪を持つ青年。水色の瞳は、癒しの力を持つ水のように優しく揺れる。

彼が何かに呼ばれたかのように泉に手を差し入れると、水は美しい女の姿へと形を成した。

それは、“泉の精”の始まりの記憶。

ほんの一瞬だった。一瞬だけだったのに、原初の泉の精が感じた甘く焦がれるような気持ち、鮮烈に私の心に焼き付いた。

狂おしいほどに心を締め付ける、その感情の名は何だっただろう。思い出したくて、でも思い出さなくて。

何かが私を突き動かし、叫んでしまいそうになる。

甘い記憶に溢れた光が温かすぎて、泣いてしまいそうになる。

全ての感情を閉じ込めたはずなのに。光が、水の檻を溶かしている。

——やめて！！　そう、叫ぼうとした時。

光が裂けた。

裂いたのは、白く華奢な手。

発光しているかのようなその白い手は、迷いなく伸びてきて——

私を、すくい上げた。

——せ……ま……

——せいれ……さま——！！

誰かが泣いている声が聞こえる。
それは、とても近く。手を伸ばせば届く場所で、彼女は泣いている。

『オデット……？ どうして、泣いているの？』

気がつくと、朝靄が薄く漂う中、オデットが全身ずぶ濡れになって泣いていた。

「どうしても、こうしてもないわよ！！ 馬鹿！！」

ぼよん。白い手が何度も私めがけて振り下ろされる。そのたびに間の抜けた音が響き、私の身体はゆらゆらと揺れる。

……馬鹿？ って、私に言っているのだろうか？ ここにはオデットと私以外いないものね。きっと私に言ったのだろう。……私、何かしたかしら？

『オデット？ 馬鹿って言った方が馬鹿なのよ？』

「うるさい！！ 茶化さないでよ！！ 私、怖かったんだから……！！」

『……怖いって……何が？』

今は朝方。怖い夢でも見たのだろうか？ それとも、朝のお散歩中に変質者にでも追いかけられたのだろうか。私もそういう類の人間に遭遇するのは、いつも何故か朝方だったからよく分かるわ。まだ明けきっていない薄明るい中、人の気配が少ない時間に丸出しで

追いかけてくるアレは怖いわよね。

……え？ あ、違うの？ その目付きは、明らかに私を責めているわね。冤罪を主張するわ。だって、私何もしてないもの。私はただ、あそこで……って……あそこって、どこ？

「五ヶ月も出て来ないで何してたのよ!？」

オデットが涙声で叫んだ。五ヶ月？ 確か、この一ヶ月は地球の約二ヶ月分だったはずだから……十ヶ月……約三百日、私は外に出ていないと、そう言うの？ いくら時間に感心の無い私でも、さすがにそれは異常だ。私は何をしていたのだろう？ なんだかぼんやりとして、思考が纏まらない。

「前、言ってた、寿命が来たのかと……!! 精霊様まで、私を置いていってしまったのかと……!! わた、わたし……!!」

寿命？ ああ、そう言えば、泉の精が代替わりするって言った時にそんな話になったような……。

『大丈夫よ。私達には寿命なんて無いから』

「じゃあ、前の泉の精はどこに行ったの？ あなたもいつか、どこかに行っちゃうの？」

どこに？ どこだろう？ 私は知っている気がする。どうして知っているの？ 以前は、記憶を覗こうとしても覗けなかったのに。ぐるぐる。ぐるぐる。思考が回る。混乱している私に気づかず、オデットはその光を放っているかのように見えるほどの白い手を伸ばし、私を掴んだ。

その、銀色の光を裂いた白い手が、三百日の記憶を呼び起こした。

「ゆ、許さないから……！！ あなたまで、いつてしまうなんて、許さない……！！ 私を、一人にするなんて、許さないから……！！」

いつもは冷静な色を浮かべている瞳が揺れて、零れる宝石のような涙。言葉こそ強気だけど、その様子はみつともないほど私に縋っていて、私がない孤独がどれほどオデットを押し潰そうとしていたのが窺い知れた。

震える。銀色の光によって曝け出されてしまった心が震える。

『オデット……。あなたは……なんてことをしてくれたの……』

全ての痛みから守ってくれる優しい世界から、強制的に連れ出された絶望。

全ての感情をなくしてしまう哀しい世界から、すくい出してくれた安堵。

二つの感情がせめぎあい、相殺されてはまた浮かぶ。今まで閉じ込めていた心は、激しい二つの感情についていけずに混乱する。

「なに……？ 私が、何をしたって言うの……？」

『あなたのせいじゃない……。いや、でも、あなたのせいで、私は……』

「はあ！？ 意味が分からない！！」

オデットのせいじゃない。分かっている。分かっているのに、久しぶりに外に出た心が昂って抑えがきかない。

水でできた身体は涙なんて出るはずもなく、それが余計にもどか

しくて苛立たしくて、沸騰して蒸発してしまいそうで、苦しみを紛らわすために私は心にもない事を叫んでしまう。

『私は！！　ずっと泉の中にいたかったのよ！！　それなのに、あなたが無理矢理私を連れ出したの！！』

「何よ、それ……。もう、出てくるつもりが無かったっていう事……？　私だけだったって言うの？　私だけが、あなたを大切に想ってたって言うの……？　あなたは！！　私にもう二度と会いたくなくなかったって言うのね！？」

オデットの哀しみが雫となって瞳から零れ、怒りが震えとなって唇をわななかせている。

——　傷つけてしまった。嫌われてしまう。

心が鈍い痛みに襲われた。

八つ当たりで身勝手にオデットを傷付けたくせに、私の狡い心は嫌われたくないという思いで占められ、皮肉にもそれで少し冷静になれた。

『……嘘。嘘よ。ごめんなさい、オデット。嘘なの。泉の中にずっといたかったなんて嘘。私だって、オデットに会いたかった。あなたは私の大切な友達。でも、あなたがここに来ない日が淋しくて堪えられなかった。あの人が、アレンが、もう、いない事に堪えられなかった……！！』

今さら心を締め付ける甘い痛み。

原初の泉の精が、オデットの先祖に抱いたものと同じもの。その、感情の名は何だっただろう。

それは——恋心。

そんなものに心を乱されるのが煩わしくて、捨ててしまいたいと思った。

人間ではなくなったら、そんなもの無くなると思っていた。だって、それはただの子孫を残すための人間の本能だとか、遺伝子だとか、そんなもののせいだと思っていたのに。

何故、こんなに心を乱されてしまうの。

分かっていた。予感があった。

アレンの真っ直ぐに私を想う心が嬉しかった。綺麗な涙を流す彼が手に入れ難い宝物のように見えた。

彼の子供達の温もりに触れて幸福感に包まれた。誰も来ない日は淋しくて仕方がなかった。

それも、これも、“人”だからこそ感じるものだと思っていたのに。それを感じてしまうのが怖くて、私はきつと無意識にあの哀れで優しい意識達に助けを求めていたのだ。

それなのに、心が失くなっていく事が哀しくて、怖くて、また助けを求めて……。

『ごめん……ごめんね、オデット……。あなたがそんなに心配してくれるなんて思わずに、私は逃げていたのよ……。ごめん……』

オデットの水色の瞳が大きく見開かれている。私がこんなに取り乱す事なんて今まで無かったから驚いているのだろうか。しかし、次の瞬間には全てを委ねてしまいたくなるほどの優しい瞳をして呟いた。

「……精霊様も、お父様の事、愛してたのね……」

愛なんて、きつとそんないいものではなかった。私のこの想いは、ただの自分勝手な恋だった。

オデットの白い手が私の手を握る。初めて会った時、氷のようだと思った水色の瞳は、今は癒しの力を持って私を見つめる。

「私だって、愛するお父様がいなくなってしまつて哀しかった。それどころかお母様もあんな事になってしまつて……。皆が哀しみに暮れる中、私はこの国を導く務めがあったから、哀しんではいけないと思つた。でも、やっぱり哀しいものは哀しくて。でも、皆の前では毅然としていなくてはいけなくて。心の行き場所がなくて苦しかつた」

そう言つと、また一筋の涙がオデットの頬を伝つた。

「でも、あなたがいてくれると思つていたから、私はなんとか立つていられたの。私がどんな立場であろうと、どんな事であろうと、あなたなら受け止めて、未来を指し示してくれると思つていたから」

こんな私の事をさも大切な存在であるかのようにオデットは言う。そんな価値なんて無いのに。私はただ臆病で、卑怯で、自分勝手なだけなのに。

「私も、あなたにとつてそんな存在でありたい。どんな哀しみに襲われて立つていられなくなつたとしても、支えてあげられるようなそんな存在でありたい。だから、私が側にいるから。出てきたくなかつたなんて、そんな哀しい事言わないで」

オデットの気持ちが痛い。でもそれは、鋭い痛みではなく、温かい痛み。

心を締め付ける痛みがやわらいだ気がした。

私の痛みを、オデットが受け止めてくれている。オデットの事も考えず一人だけ痛みから逃げ出した臆病な私を、それでもまだ必要としてくれている。

それがとても痛くて、とても嬉しい。

私の何が彼女をそんな風に思わせたのかは分からないけれど。私の事を必要としてくれているならば、私は側にいたい。

たとえまた痛みが私を襲っても、彼女が受け止めてくれる。そして私も、彼女の痛みを受け止めて、やわらげてあげたい。

『ごめんね、オデット……。もう、大丈夫。もう、あなたを一人にしないわ』

彼女の手を握り返すと、堪えていた不安を全部吐き出そうとするかのように泣き出した。

そうして私達は陽が真上にくるまで、オデットが泣けない私の代わりに泣いて、私は泣き続けている彼女の代わりに笑った。

19 水面の向こう側、眩い世界

今日も空が青い。風に流されて真つ白な雲が形を変えながら流れていく。太陽に照らされて森が喜んでいる。

きらきら輝く美しい世界。

今まで美しい世界だとは思っていたけれど、今はもっと美しく見える。長く眠っていた心は目が覚めた瞬間、眩しすぎて泣いてしまいそうになるほどに世界を輝かせて見せた。

それはこの風景に留まらず、人の心にも言える事だった。

アレンやオデットの真つ直ぐな気持ち。他を思いやる心。私なんかに向けられるのは烏滸がましいと思うほどの綺麗な心は、目を瞑ってしまいそうになるほどに眩い。

私はなんて馬鹿だったのだろ。世界はこんなにも美しいのに、自分が好んでしていた恋愛が上手くいかなかったくらいで全てを捨ててしまおうとしていたなんて。

太陽に手を翳す。私の透明な身体は光をゆらゆらと地面に届ける。光を通さずに受け止めて煌めいているのは、薬指にはまった銀の指輪。

本当に今さらだけでも、これがアレンの気持ちへの返事だった。

泉の精になつてから、少し乙女チックになつたかもしれない。これが人間だった頃なら指輪を売つてる可能性大だ。

今は、思い出をお金に替えるよりも、思い出を大切にしたい。アレンと過ごした時間は僅かな間だったけれど、今でも鮮明に思い出せるほど大切な時間だった。

この指輪を私が当たり前のようにはめているのを見たオデットは複雑そうな顔をしていたけれど。

それもそうで、元は大切な儀式の時に用いられる指輪らしいし、

何よりもアドリエンヌの事を思うと複雑な気持ちになるのだろう。

私が最後に見たアドリエンヌの顔が忘れられない。

一見、ただ呆然としているだけのように見えたが、あれは確かに今まで信じてきたものが崩れた時の――“女”の顔だった。

私には、アレンがアドリエンヌを、家族を裏切ったなんて思えない。だって、彼は人生を国のために、家族のために捧げたのだから。けれど、アドリエンヌにとって、アレンが最後に私の元へ来た事は酷い裏切りだったのだろう。

アドリエンヌは、アレンの私への想いはただの初恋で、過去の話だと信じきっていた。自分達こそが一番大切にされているのだと信じきっていたのだ。

一番大切にされていたのは間違い無いだろう。けれど、それは“家族”としてで、“女”として愛されていなかったという事に、アレンのあの幸せそうに眠る顔を見て気づいてしまったのだ。

そして、“裏切られた”と思ってしまった。

現代日本でなら、不貞行為にまではならないのかもしれないけれど、裏切りの部類には入るのだろう。しかし、それは自由恋愛ができる日本だからこそだ。

アレンの身体はアレンだけのものではなかった。国民を守らなければいけないが、そのためには子孫も残さなければいけないかった。心がどこにあるかと、王族の務めを果たさなければいけないかったのだ。

アドリエンヌも他国の王族だったのだから、それくらいは理解しておかしくなかったはずだが、アレンの事を愛し過ぎて盲目になっていたのかもしれない。アレンもまた、どういう感情であれアドリエンヌの事を大切にしていたから、今までが幸せ過ぎて反動が酷かったのかもしれない。

――それは、世界の全てを呪ってしまふほどに……。

オデットから、アドリエンヌの最後を聞いた時は衝撃を受けた。自分の心もままならないというのに、他人の心をどうにかするなんてできるはずもないのだけど、それでも思ってしまう。

私がもう少しアレンを強く突き放していれば、アレンも苦しむ事なく、アドリエンヌも絶望したままこの世を去る事もなく、オデットも二人の気持ちの間で一人思い悩む事もなかったのかもしれない。過ぎ去ったどうしようもない事を後からウジウジ悩むのは好きじゃない。けれど……。アドリエンヌの最後が凄惨すぎて、後悔せずにはいられない。

心が痛い。

痛みを感じると、私の心を守ろうと泉の底へ引つ張ろうとする意思を感じる。けれど、私はそれを拒む。

苦しみも、哀しみも、歡びすらも何も無かった世界。それはとても心地よい世界だった。今でも戻りたい気持ちがある事は否定しない。

それでも、私はもう心を閉じ込めたりしない。

苦しくても、共に苦しんでくれる友がいる。哀しくても、それ以上の歡びがある。

幸せが分かるのは、不幸せな事があるから。苦しみも、哀しみも、全ての痛みは歡びを感じるために必要な事。

だから、私はもう逃げない。

私がここへ戻ってきてからというものの、オデットは三日とあけずに泉に来るようになった。私がまた引き籠ってしまうのではないかという不安があるようだ。今日も私が泉から顔を覗かせると、安堵の表情を浮かべた。

『またそんな顔して。あなたが棺桶に入るまではどこにも行かない
って言ってるじゃない』

「何よ、どんな顔してるって言うのよ。私は髪のお手入れに来ただ
けよ」

最近、彼女は幼児返りみたいになっていて、妙に私に甘えてくる。
素直じゃないところがまた可愛らしく思えるのだけれど、こんな事
を言ったら怒られるだろうから、心の中だけに留めておく事にしよ
う。

『ここでわざわざお手入れしなくても、お城でできるんじゃないの
？』

そう言いながらも、私は動物達にハーブを持って来て貰って、年
季の入ってきた調合セットでゴリゴリとハーブを擦る。

「そうなんだけどね。一般に売る用の美容液を作るのに使う水を、
泉のじゃなくて普通の水にする事にしたから、今城にあるやつはイ
マイチなのよね」

イマイチなら泉の水を使えばいいのに。不思議に思っただけ聞いてみ
ると、私でも驚いてしまうほどの事を彼女は言った。

まずアレンの事。彼が倒れてから一年も生き長らえたのは奇跡だ
ったそう。そこで考えられるのは泉の水を飲ませ続けた事。だが
それだけで泉の水の効果だと言うのは早計だったので、オデットは
極秘裏に臨床実験を行ったそう。

腰痛、肩凝りなどの軽症の間から、この国の医療ではどうにも
ならない重症の間までを数人集めて私がいなかった三百日の間、
泉の水を飲ませ続けていたらしい。

そして、効果が出た。重症の人間は完治にまでは至らなかったらしいが症状が良くなり、腰痛や関節痛などの軽症の人間に至っては飛び跳ねるくらいに元気になったらしい。

オデットも風邪や疲れによる倦怠感やかすれ眼があった時に飲んだようで、三日も飲み続けると効果が出たようだ。

更には、生え際が怪しかったセルジユの髪量が増えたつぼく、城ではヅラ疑惑が浮上しているそうだ……。

グルコサミンや養。酒なんて目じゃなく、更には育毛剤まで兼ね備えているその効果に、私はただ驚くしかない。まさに万能薬。地球で売り捌く事ができるのなら世界一の大金持ちになってもおかしくない。

『どうして売らないの？ 国が一気に豊かになるんじゃない？』

「周辺諸国ではね、『欲しいものがあるなら奪え』っていう思想の国が多いのよ。売るにしても『力づくじゃ手に入らない』という印象を強く焼き付かせないと……。だから今のところ、泉の水の効果は国家機密扱いね」

国家機密。これに驚かずにいられようか。

だって、この泉は私“達”の涙によってできたのだから。

その事と、ついでに泉の成り立ち、私がどうやってここに来たのかをオデットに教えてあげると、彼女も水色の瞳がこぼれ落ちそうなくらい驚いていた。

「いや……。まさか、他の世界の人間だったなんて……。しかも、不倫をした挙げ句に刺されてとか……。どうりで神秘さのカケラも無いと……」

驚くところ、そこなんだ？ 他にも驚くところあったはずなのだけ

ど……。

なんだか複雑な気分になっていると、オデットはサラサラの銀髪を摘み、伏し目がちに呟いた。

「この髪の色、まだそんなに好きじゃなかったんだけど、泉の精を引つ張りあげる力があるって言うのなら……悪くないかもね」

どういう仕組みなのかは分からないけれど、王族は泉の底で閉じこもっている意識に触れられる力を持つ。銀色の髪を持つ人間はその力が顕著なようだ。

意識して使う事ができる訳ではない不思議な力。泉の底で見た銀色の光。あれは癒しの力を持っていたように思う。

哀しみに沈む心を癒し、癒された心は癒してくれた光を護る。

そうやって、この国と泉の精は共生しているのかもしれない。

私も護ろう。オデットを、オデットとアレンが愛するこの国を。オデットが生命の輝きを失う時まで。

そして、彼女の最後を見届けた後、私は帰ろう——元の世界へ。

20 氷の女王のなやみごと

あれから特に大きな事件はなく、穏やかに時は流れてオデットは二十五歳になった。

彼女は、何気に男性経験を積んでいるようだが、男に心底惚れた事は無いと言う。なので、いわゆる“ヤリ逃げ”を繰り返し、政治手段のエグさも併せて“氷の女王”と言う素晴らしい異名を獲得したようだ。

個人的に言わせてもらうと、もっと捻りのきいた異名はなかったのかと言いたい。

そんな“氷の女王（笑）”だが、最近なんだか様子がおかしい。空を眺めながら意識だけ遠い世界へお散歩していたり、お花を眺めながら甘い吐息を吐いていたり……分かりやすすぎるほど“恋する女”の顔になっている。

やっとオデットにも春が来たのかと思って、からかいのネタに問い詰めてみれば、とんでもない事を言い出した。

『オレリアの好きな人と寝たですって？』

気まずそうに頷くオデット。指をえんがちよの形にして少し離れる私。

「ちよっ！！　なんで離れるのよ！？　そんな目で見るなー！！」

だって、ねえ……？　いくら私でも、さすがに肉親の好きな人を横取りするような真似はした事ないし……？　鬼畜かと言いたい。私の穢らわしいものを見るような目に堪えられず、彼女は精一杯

の言い訳をし始めた。

なんでも、寝たのは“間違い”だったそう。なんて見苦しい言い訳だとまた少し離れようとしたら、ガツチリと羽交い締めになれてから話を続けられた。

とある夜会での出来事。誘った相手を、オデット専用の逢引用庭園（そんなもの作るなんてどれだけ男好きなんだ）で待っていると、誘った相手と背格好が似ているオレリアの想い人が迷い込んで来て、間違えてキスをしてしまったらしい。そしてその彼は、想い人であるオデットからのキスに興奮してしまい、そしてオデットが間違いに気づいたのは最後までしてしまっただけだったと……。

『なんていうか……。色んな意味で最低ね？』

「言わないで……。自分でよく分かってるから……」

耳を塞ぎ、嫌々と首を横に振るオデット。どうしてこんな子になっちゃったのだろう……。育て方を間違えてしまったのだろうか……私のせいではないはずだ。『喰われるより、喰う側になれ』と言った事もある気がしなくもないが、きっと気のせいだ。うん。

『その彼って、オレリアが何年も想い続けている人でしょう？ あなた、全然興味無いとか言ってた？』

「そうなのよ。仕事面では信頼できるヤツなんだけど、そっち方面では興味無かったし、持つ気も無かったのよ。だけど……」

言葉が途切れ、代わりに長く重いため息が彼女の口から盛大に漏れた。その後に、恥ずかしそうに頬を染め、けれど苦いものも混じる複雑そうな顔で呟いた。

「……あんなの、初めてだったの」

そこからは、オデットと相手との濃厚な行為を事細かに聞かされたが、そんな話を真面目に聞くのも馬鹿らしいので、適当に聞き流した。簡単に言つと、行為の中にすごく愛情を感じたらしい。

「今までも、ああ、こいつ私の事好きなんだなつ、て感じる相手とした事はあるけど、それでも“愛情”より“性欲”の方が上回ってる感じだったのよね。でも、彼は違うの。自分の欲を押し殺して、私の悦ぶ事を優先させて、慈しむように……。はあ……。あれから、今まで気にも止めてなかったアイツの行動の中に“愛情”が見え隠れしているのが気になって……」

そしてまた、長い長ーーいため息。

しかし、自分より相手を優先させる、か……。まるでアレンのよう。父親に似た人に惹かれるというアレだろうか。

「オレリアの好きな人だつて分かつてるのに……。忘れられないなんて、最悪……」

『そうね、最悪だし、最低だわ』

「……そう、よね」

『いや、冗談だってば！！ オデットつてばサバサバしてると見せかけて、実はウジウジするの好きなんだから。何が“氷の女王”よ、もう』

パシャッ！ つと、指から水を数滴オデットの顔に飛ばした。
いつもならこれで殴りかかってきたり、凄い勢いで言葉責めして

きたりしてからスッキリした顔をするのに、今日は駄目なようだ。
それが彼女の重症加減を窺わせる。

『開き直ってオレリアに打ち明ける……のは、さすがに罪悪感よね
……』

「そうよ。『諦めるな』って、一体誰があの子をけしかけたと思っ
てるの？ 私達よ？ さすがに六年間も想い続けるとは思っていな
かったけど……。さすがお父様の娘と言うか、なんと言うか……」

アレンなんて数十年だからね……。そんなとこまで似なくてよか
ったのに。

さて、困ったものだ。私はオデットにもオレリアにも幸せになっ
て欲しい。けれど、今の状況ではどちらか片方しか幸せになれない。
必ずしも、恋が実る事だけが幸せになれる方法ではないけれど、
恋が心に及ぼす影響は凄まじいと思う。オデットが恋に破れてどう
なるかは分からないけれど、オレリアは内に籠って生涯泣き暮らす
くらいにはなりそうだ。

だからと言って、オデットに諦めるなんて言えない。性行為には
興味あっても、恋には興味無かったオデットが初めてした恋なのだ。
それがどれほど貴重で大切なものを彼女自身理解していないかも
しれないけれど。後になって後悔だけはして欲しくない。

『ねえ。とりあえず、罪悪感をなくす事から始めない？』

「……どうやってよ？」

『やっぱり、オレリアに打ち明けるべきだと思うの。大切な人に“
隠し事”をしてたら、誰だって後ろめたい気持ちになるでしょう？
だから、オレリアに自分も彼の事を好きになってしまったって打

ち明けるのよ。さすがに大人の関係になっちゃった事は伏せて……っていうより、なかった事にしなさい、うん。例の彼にもなかった事にしてもらって。あなたなら簡単でしょ？」

「そんな、人を鬼畜みたいに……」

「何を今さら。でも、まあ、それが“ハンデ”になるかもね？」

意味が分からないといった風にオデットは眉間に皺を寄せる。

『元々、例の彼はあなたの事が好きで、更にもう既成事実を作ってしまった後で……オレリアに勝ち目なんて無いでしょう？ だけどあなたが彼に『この前の事は無かった事にして』なんて、今までのその他大勢の男達と同じ扱いをしたらどうなると思う？』

水色の瞳が揺れて、自然と視線は下へと向いた。

『今までのあなたの噂にも負けずに慕い続けていたけれど、彼は今度こそあなたに失望するかもしれない。そうすればオレリアのチャンスは増えて、あなたはオレリアと同じスタート地点に立つか、もしかしたらオレリアよりも不利な位置に立つ事になる』

しばらく泉を見つめながら黙っていたオデットは、こちらを見ないままに立ち上がり呟いた。

「……少し、考えさせて」

そうして森の中へと消えていくオデットの背中が、いつもの凛としたものではなく、道を見失った迷子の子供のようだった。

元々臆病なところがあつた。臆病だからこそ、子供の頃誰にも悩

みを打ち明けられずにずっと髪の事で悩んでいたのだ。

臆病な彼女は一体どんな答えを出すのだろう。ちゃんと逃げずに自分の気持ちと向き合えるだろうか。

私のように逃げないで欲しい。逃げる前に気づいて欲しい。自分の出した答えでどんなに傷ついたとしても、どんなに逃げ出したくなつたとしても、私がいる事を。

失敗しても、立ち止まって進めなくなつたとしても、どんな事があつても――。ただ、オデットの幸せを願う、私が側にいる事を。

21・女王であるために

また、“流された”。

人間の私が寝ている場所でも無いし、“彼”がいる散らかった部屋でも無い。

今、私の目の前には素っぴんの幼なじみがいた。

「——ナミ？」

久しぶりに見た、眉毛が無いのにまつ毛エクステのせいで不自然に目ヂカラがあるその顔に、思わず爆笑してしまった。

「いきなり出てきて笑うとかなんなのアンタ！？ 塩撒くぞコラ！
！」

透けて見える私を幽霊だと思っているのか、成仏させようと息巻く彼女。

『ふふふ、残念だけど幽霊じゃないからそんな塩じゃ追い払えないわよ。つか、身体は生きてんだから成仏させようとすんなー！！』

「いや……だって、そんな軽く現れるから、なんか色々とムカついて」

彼女が怒っている理由は分かる。口ではそんな事を言っているけど、

私の事を心底心配していたのだ。

子供の頃から友達で。掴み合いのケンカもした事もあったし、男の取り合いもした事があった。

けれど、やっぱり友達で。

楽しいと感じる時間はいつも彼女が側で笑っていたし、凄く辛い時も彼女は自分まで辛い顔をしながら側にいて。老人ホームに入っても一緒にゲートボールをしようと笑い合った。

そう、彼女とは確かな“絆”があったのだ。

私が泉の底に引き籠っていた時に理解した事。それは、私があちらの世界で強く“絆”を感じた時。似た感情を持つ人間の元へ“流される”。それは泉の底にいるあの優しい意思達が、私の潜在的な意志を感じ流してくれるのだ。

だから、私は焦っていない。私が“帰りたい”と願えば、いつでも帰って来れるのだから。

『心配させてごめんね？ でも、もう少しだけ待って。必ず戻って来るから……』

「もう少ししてどのくらいよ？」

少し涙ぐみながら私を睨む彼女。

大体ではあるけれど、あちらの二十年がこちらの一ヶ月くらいだろうか。だから、オデットが天寿を全うするまで……そう言えば、あちらの人間の寿命はどれくらいなのだろう？ アレンは四十代だったが、まだ若かったのと言われていたらしいし……。もし、百年以上……考え難いが千年単位だったなら……。

「おい、何だその笑い。あたしは知ってる。その顔は笑って誤魔化そうとしてる時の顔だわ」

バレた。仕方がないので、開き直って満面の笑みで手を振った。
怒ってまた塩を撒く彼女の姿を生暖かい目で見守り、そして私は
また泉へと戻って行ったのだった。

オデットがしょぼくれた背中をしながら去ってから五日後。オレ
リアと共に泉を訪れた。

オレリアの表情にはまだ少しの曇りも無い事が、オデットは何も
言って無い事を窺わせる。

「……私一人じゃ勇氣無いから……側で聞いててよ」

ヘタレだなあ………と思いつつ、そんな“氷の女王（笑）”の可愛
らしい姿を見れるのは役得だろうか。

なんの事だか分からず小首を傾げているオレリアをとりあえず泉
の近くに座らせ、オデットに話をするように促した。

「……オレリア。あなたももう二十四歳ね」

「え？ ええ、そうですね？」

一体なんの話をしたいのか。いきなり話すのは怖いから、世間話
から徐々に本題に入るというアレですか？

「王族が二十四歳まで独身なんて異例なのは分かってるわね？」

「……はい」

それならオデットはどうなるのだ、という話だが、彼女は「子供さえ産めばいいでしょ」というごり押しで、結婚しない事と色んな男に手を出している事を無理矢理容認させている。

「女王としてあなたに命じるわ。ギヤストン・フォスターと婚姻しなさい」

『え！？ オデット、ちょっと待っ………』

「精霊様はちよつと黙ってて！！」

ギヤストンとは、二人の想い人の名だったはず。

どういう事だろう？ オレリアに自分の気持ちを打ち明ける気になったから、ここにわざわざ来て話をしようと思った訳ではないのか。

「け、けれど、オデット姉様！！ あの方はまだオデット姉様の事を……」

「アイツにはすでに話をつけてあるわ。私への気持ちはもう無くさせた」

私はオレリアと視線を交わせる。オレリアの瞳は、不安とそれ以上の歡喜で揺れていた。

「後日、正式に発表。婚姻の儀の日取りは両家で取り決めという事で、もう話は決まってるの。オレリア、あなたが何と言おうとあなたに拒否権はないわ」

「私が……あの方と、結ばれる……」

オデットへの気持ちがまだあるのではないだろうかといまだ残る不安が、オレリアが素直に喜ぶ事を躊躇わせているが、それでも抑えきれない喜びが雫となつて大きな瞳からこぼれ落ちた。

「……オレリア」

「は……はい……」

「幸せに、なりなさい」

「オデット……姉様……！！」

オレリアは堪えきれず、オデットに抱きついて声をあげて泣きだした。オデットの胸に顔を埋めているオレリアには見えないうろが、私は見てしまった。

痛みを堪えながら、無理矢理微笑んでいるオデットを。

オレリアが落ち着いた後、オデットは私とまだ話があるからとオレリア一人で先に帰らせた。

私は黙ったまま、オデットの言葉を待つ。けれど、彼女も黙ったままで二人して何をする訳でもなく、ただ泉だけを眺めていた。そうやって時間だけが流れていき、やがて夕日が泉を赤く照らし出した頃、私は言った。

『……ホント、馬鹿な子』

そう言った直後、腹部に強い衝撃がきて私の全身が揺らめいた。凄い勢いだったので何事かと思えば、オデットが私のお腹に抱きつ

いている。

その抱きつくというよりタックル並みの勢いは普通の人間なら相当のダメージを受けると思う。痛覚の無い身体で良かったと今ほど思った事はない。

私にガッシリとしがみついて、声を殺して泣いているオデットの頭をペチツと叩く。

『あなたねえ……泣くくらいならどうして身を引くような真似したの？ 例の彼に嫌われちゃったの？』

声には出さないが、代わりに首を横に振って答えるオデット。

『それじゃあ、どうして？』

「……いや、だったの」

『何が？』

「毎日、毎日、アイツの事ばかり考えて……。心の中を占めるものが段々アイツで大きくなってきて……。このまま、アイツでいっぱいになってしまったらって思うと……。怖かった」

そこまで言うとおデットは突然起き上がり、ゴシゴシと涙を拭いた。手をどければ、赤くなった瞼とは対照的な静かな氷のような瞳が、揺らぎなく真っ直ぐ私を見る。

「私は女王。私の心は国民のもの。たった一人の男のためだけにあってはいけない」

そついうものだろうか。当然ながら私は女王になった事など無い

から、女王であるための心構えなど分からない。
だからこそ思う。本当にそれで良かったのかと。

『オデット。私は、あなたが結婚しようがしまいが、あなたが幸せならどっちでもいい。だけど……。好きな人をわざわざ遠ざけるのが分からない。本当に、“女王”であるためだけに諦めたの？ オレリアのためじゃないって言える？』

「言えるわ。もし、オレリアの事が無かったとしても、私はアイツを遠ざけたと思う。だから、オレリアがいて逆に助かったわ。……すっぱり諦められるもの」

『……後悔しない？』

「しないわ。私が自分で決めた事だもの」

語尾が震え、手をギュツと握りしめるオデット。地面に手を置いていたから土に指の跡が残っていて、その跡の深さがどれほどの力が入っていたか分かる。

強がり。そう言おうとしたけれど、やめた。

下唇を強く噛んで、涙を堪えている彼女の強がり責めるのは、酷なような気がした。

『後悔しないって確かに聞いたわよ？ 後でウジウジ言い出したら髪の毛モジャモジャになる呪いかけてやるから』

指から水を出して、オデットの顔に命中させた。顔が濡れたオデットは、怒って私に殴りかかってくる。

その顔が、泣いているように見えたけれど。きっと、私がかけた水のせいだ。

22・白銀の獣

オレリアが結婚して数年が過ぎた。結婚相手は本当にオデットへの未練は無いのか不明だが、子供もでき幸せだとオレリアが言っていたので、問題は無いのだろう。

アレンとアドリエンヌの他の子供達も殆ど結婚しており、その子供達ももうちらほらと私に挨拶に来るようになった。

オデットはその後、結局好きな人もできず相変わらず“ヤリ逃げ”を繰り返し、一昨年でたく父親が不明な子供を産んだ。

予想されていた事だが、権力欲しさだとか、単純にオデットの事が好きだからとかで、父親は自分だと名乗りを上げる人間が続出したとか。その対処法がまた呆れたものだった。

「子供の父親は、さる遠い国の王子。病気のせいで余命僅かだと診断され、治療法を探して隣国に訪れていた時に知り合った。結局、彼の方は隣国にて息を引き取ったので、私の妊娠は彼の方も知らないし、彼の方の国も知らないでこのまま我が国の王太子として育てる」

そんな事をいけしゃあしゃあとのたまったのだと言う。オデットの壮大な嘘を久しぶりに聞いた。勿論、あまり信じられはしなかったらしいが、女王の言う事は絶対！！ ばりに理不尽に権力にモノを言わせて黙らせたらしい。反乱が起きないのが不思議だ。

そしてオデットが子供を産んだのが去年の事。オデットに連れられて、満一歳になった王子様はもうここに頻繁に来ている。五歳になったら泉の精霊に会うつとかいう王家の決まりことなんて、オデットにとってはあって無いようなものだ。

このオデットの息子——コンラッドがまたとてもパワフルな子で、少し目を離すと泉に飛び込むわ、高速ハイハイで森の奥に消えるわ、泉に遊びに来た熊に戦いを挑もうとする（ように見えるくらい突っ込んで行く）わで、アレンの子供達とはまた違った意味で将来が不安な子だ。

今日もまた、オデットが髪のお手入れをしている間にどこぞへと消えてしまっている。お腹に薦を巻き付けて木に繋いでいたのだが、見事にもぬけの殻だ。それを見たオデットは「あゝ、木に繋いだだけじゃダメなのね」とひと事のようにのほほんとしている。この森では危険が少ないとはいえ、母親なら多少は心配しろと言いたい。そんなオデットに嫌味つたらしく、息なんて出ないからため息を吐くフリだけして、動物達にコンラッドを連れてくるようにとお願いをした。すると、なんだか動物達の様子がおかしい事に気づいた。そわそわと落ち着かず、好奇心と恐れが入り交じる感じ。何か変なものが入り込んで来たのだろうかと思うも、害意を感じるものの気配は森の中から感じないので放っておく事にした。

「きゃー！！ きゃつきゃつー！！」

わんぱく王子様のご機嫌な声が聞こえた。はいはい、動物達との触れ合いが楽しいんですねー。今日はどの子に連れて来て貰ったのかしら？ 狼さんの背中に乗って？ それとも熊さんに抱っこされて？ それか狸さんにくわえられて引きずられて？ …… って、えー！！？ それライオンさー！！ん！！？

「ちょ、ちょっと、精霊様……。小さいけど、あれ、ライオン……？ いや、本で見たのとなんか違う気が……。？ この森にあんなのいたんだ……。？」

『え……。？ いや、私も初めて見る子だけ……。？』

一見猫にも見えるライオンの子供のような動物が、コンラッドをくわえながらこちらへ近付いて来ていた。

ライオンもどきがコンラッドを無造作に地面に置く。コンラッドがまた高速ハイハイでどこかに行こうとするのをオデットが未然に止め、ライオンもどきはというと、何故か私の膝の上に顔を乗せて寛いでいる。

コンラッドがまだ暴れ足りなくて「だー！！　だー！！」と不機嫌そうに叫んでいるのを横目に、私はとりあえずライオンもどきの喉をこちょこちょしてみた。ゴロゴロと喉を鳴らしている。可愛い見た目は少し不思議な姿をしてはいるが、やはり猫科だろう。

猫のような顔。耳は三角で頭の上にツンと立っている。そこだけ見れば大きい猫……ライオンの子供のようにだけれど、違うのは身体というより、毛の色と生え方だろうか。

馬のたてがみのように長い毛が背中を一筋に通っており、そこから繋がる尻尾は猫のように細いものではなく、どちらかというと犬のようにふさふさしている。その全身を覆う毛の色は、まるで出会った頃のオデットのような薄灰色で……。

……。

「何してんの？」

『うん、汚れてるっぽいから、洗ってみようかな』って』

ライオンもどきを泉で水洗いしてみる。水につけても嫌がるそぶりすら見せず、むしろ心地良さそうに私になすがままにされているライオンもどき。汚れは頑固だったようで、なかなか綺麗にならなかったが、思った通り少しずつ色が薄くなってきた。

根気よく洗って、終わってみると……。

『見て、オデット。この子の毛の色』

「……見事な銀色ね」

水分を吸い取り乾いた状態にしてあげると、その銀色は太陽の光を受けて、キラキラと煌めく美しいものになった。

『命名、オデット二号……ってどうかしら？』

「却下」

『じゃあ、オデット・改』

「とりあえず私から離れなさいよ」

それは無理というものだ。薄灰色から銀色になるなんて、まんまオデットじゃないか。泉の中の意思をすくい上げる不思議な力も、もしかしたら持つてるかも？　なんて、そんな偶然ある訳ないか……と思っていると、ライオンもどきが私を“呼んだ”。

「でいー……な」

人間の言葉で、ハッキリと。

世界でたった一人しか知らない私の名を、呼んだ。

23・おかえり

一瞬。このライオンの子供のような子が何を言ったのかが理解できなかった。

だって、その名前は、彼がつけてくれて。彼にしか呼ばれた事のない名前。

彼がいなくなってもう数年。彼がない寂しさも、哀しみも、もう慣れた。それなのに、何故私をその名で呼ぶの？ どうしてその名を知っているの？

慣れたはずの哀しみが、また私の心を乱そうとした。

「うわ！！　この子、今喋ったわよね？」

少しの曇りも無い透明な声が私に話しかけてくる。

『え？　あ……。そう？　喋ったかしら？』

「ぜーったい喋ったわよ！！　凄いいい！！　ねえ、あなた、お名前なんて言うの！？」

「う……。うー？　な、まえ……。？」

「ほらほら喋った！！　そうよ、お名前は？」

私の動揺なんて知らないオデットは無邪気に瞳を輝かせていて、その声は波打っていた私の心を静まらせる。

それは、私の彼女への信頼がそうさせたのか、それとも不思議な力が声にまで宿っているのかは分からないけれど。確かに今、私は

彼女にまた救われたのだ。

「ぼくの、なまえ、ふあずる」

ファズルと名乗った彼は、獣だからだろうか、それとも単に子供なのだからだろうか、舌つたらずだけれど懸命に喋ろうとしている。その愛らしさに、先程の鈍い痛みなど完全に消え去ってしまった。

「ファズル？ …… ああ、ゴリユール系の名前ね」

『ゴリユール？ どこかで聞いたような、気のせいのような……』

「何忘れてんのよ！？ 私が子供の頃に周辺諸国のお勉強の時間にちゃんと教えてあげたじゃない！」

そんな事言われても困る。三歩歩いただけでも忘れるのに、そんな約二十年前の事なんて覚えてる訳ない。そもそも覚える気すらなかったのだが。

「ああ、もういいわ。あなたのヤル気の無さを忘れてた私がバカだったわ。ゴリユールはね、“獣人”の国なの。顔はライオンのような、狼のような獣そのままだけど、身体つきは私達と変わらない種族よ」

『ふーん？ ファンタジーねえ。それじゃあ、この子はそのゴリユールの子なのね？』

「うーん、名前といい、普通に喋れる事といい、ゴリユール人っぽいのは確かなんだけど……。この子、身体も動物じゃない？ 全身が動物のゴリユール人なんて聞いた事無いのよね……」

『知らないだけで、向こうじゃ当たり前かもしれないわよ？　ねえ、ファズル。あなたはゴリキュールから来たの？』

私の問いにファズルは小首を傾げるだけ。幾つかは知らないが、まだ幼いから分からないのかも。それとも、獣に近くて知恵が発達していないのかもしれない。

少し質問を変えて、どこから来たのか、どうやってここに来たのかを聞いてみると、やはり全てを理解できないようだったがファズルの置かれた状況は予想できる返答が返ってきた。

「あのね、あかいじめんしかないところでね、おとーさんとおかーさんがね、どこかいつちゃったの……」

赤い地面しか無い所……それがどこかは分からないけれど、そこで迷子になって彷徨っているうちにここに迷い込んで来たのだろうか。

「赤い地面しか無い所……？　もしかして、ダンコナー砂漠の事かしら……？　だとしたら、よく生きてたわね……」

オデットが眉間に皺を寄せて呟く。どういった場所なのかを聞いて私はやっぱりここは地球とは違う世界なのだと実感する。

“ダンコナー砂漠”とは、別名“死の大地”。赤い砂と赤い岩で覆われていて、砂漠につきもののオアシスなどそんな優しいものはなく、植物など皆無だという。

大きく凶暴な獣はいないが、代わりに独特の進化を遂げた微生物や虫などが徘徊しており、不用意に砂漠に立ち入ると知らぬうちに寄生されて、悲惨な最後を遂げるらしい。

唯一、砂漠に生息する生物の驚異を防ぐ術は、“ガンチー”とい

う香木の匂い。退治まではできないが、砂漠の生物はその匂いが嫌いらしく、一切近寄ってこないのだとか。

そして、その“ガンチー”はゴリユールにしか生息しておらず、国民には安価で売っているが、国外ではとても高値で取り引きされている。

「ねえ、ファズル。あなたのおうちはお金持ちだったの？」

私の問いにファズルは小さく首を横に振る。

「つまり、この子の父母はガンチーを安価で手に入れられるゴリユールの人間って事ね」

オデットの言葉に私は頷く。これでファズルがおそらくゴリユールの子だという事は分かった。しかし、ゴリユール人の特徴である『獣の顔に人の身体』ではなく、喋れる事以外獣であるこの子は一体何なのだろうという疑問が残る。

一番予想できる事は、ゴリユール人である事は確かだが、完全に獣の身体を持ってしまったために忌避されて捨てられてしまった……とか。いや、まだ捨てられたと決まった訳ではないけれど……。もし、そうなら、“死”が前提の場所に置き去りにするのはあまりにも残酷ではないだろうか。

オデットも私と同じ想像をしているようで、滑らかな肌に刻まれた眉間の皺がより深くなる。それでも、ファズルに話しかける時には優しく穏やかな口調になる。

「ねえ、ファズル。おうちに帰りたい？」

ファズルは俯いて答えない。無垢な表情からは、答えたくないのか、どう答えたらいいか考えているのか、という事は分からない。

私達はただ黙ってファズルの言葉を待っていると、やがて力なく首を振った。

「おかあさんにはあいたいけど、おとうさんはきらい。それに、おうちは、くらいし、おなががすく。おそとには、きれいなものがない。つばいだし、ここはおいしいものがいっぱいある。ぼくね、あのあかいのがすき」

ファズルはふさふさの尻尾を激しく振り、視線は泉の対岸にある木に実っている赤い果実に釘付けになっていた。ちょうど近くにいたりスに採ってきて貰うと、小さい前足で押さえて嬉しそうに齧り付く。そんな愛らしいファズルを横目に、オデットが小声で話しかけてきた。

「…………精霊様、どう思う？」

「おうちは暗くて、お腹がすく……………って、よほど変な所や貧乏じゃない限りは、閉じ込められてご飯もろくに与えられてなかった……………って事かしら？」

「やっぱり、そう……………なるわよね……………」

美味しそうに果実を食べるファズルを見て、どうにも痛ましく思えてしまう。だからなのか、それとも予感のようなものがあつたのかは分からない。でも、私は思わず言ってしまった。

「ねえ、ファズル。私と一緒にここに住む？」

ファズルは果実を食べるのを止め、私の言葉に果実でベタベタになった口を開いて小首を傾げながら私を見る。その姿が愛らしくて、

私は微笑みながら口元を拭ってあげた。その間、自分の口を拭う透明な手の薬指に付いている銀色の指輪をジッと見つめていたかと思うと、その猫のような口元は笑みを浮かべた後、指輪をぺろっと舐めた。

「ぼくの、およめさんに、なっってくれるの？」

心が、震えた。

まだ小さかったあの人が私に言った言葉を今でもよく覚えている。この銀の指輪をくれた時に彼は言った。

『死んでも、生まれ変わっても、ずっとボクの心はディーナと一緒にいるっていう証し』

この指輪はその証しだと、彼はそう言った。実直な彼は、生まれ変わる前の、更には幼い頃の約束を――ずっと守っていてくれたのだ。

そして、“帰って”来てくれた。

ああ、アレン。帰って来てくれたのね。

『ええ、お嫁さんになってあげる』

今はファズルになった彼を思わず抱きかかえ頬ずりをすると、彼はくすぐったそうに、けれど嬉しそうに笑い声をあげた。

おかえり。おかえりアレン。

ファズルになったあなただを縛るものは何も無い。もう、心と身体が自由にならない事に嘆かなくていい。

自由になったあなたと、心を取り戻した私。

もう私は自分の心から逃げない。

もう、あなたと離れたくない。

24・光に潜む、狂気の足音

ファズルがここに住むようになってから、私は満たされた日々を送っていた。

朝起きて、おはようと言う。一緒に空を見て、雲の形を何かにたとえて遊ぶ。花を眺めて綺麗だねと笑い合う。夜になると、瞬く星にファズルの幸せを願う。そして、彼が寝静まったら、私は泉の中で彼がどんな夢を見ているのかを想像する。

特別な事など無い、ささやかで穏やかな日々。

それが、彼がいるだけでどうしようもなく嬉しくて、幸せだった。

どうして、ファズルがアレンの生まれ変わりだと思ったのか。それは“勘”と言うしかない。けれど、確信。

私の心が……魂と呼ぶのかもしれない心の深い所で、ファズルがアレンの魂を持っていると告げる。

あの時、私とファズルのやりとりを横で見ていたオデットは、呆気にとられたような顔をしていた。

まあ、そうだろう。私の『ここで一緒に住む?』という発言もそうだが、その問いに何がどうなってそうだったのか『およめさんになつてくれるの?』という問いに私が快諾したのだ。

元々、この泉は神聖な場所としてこの国に在るので、王族しか侵入が許されていないのにこの国の住民ではない者が住むというのだ。大問題である。

一歩どころか数歩も引いて、ファズルがこの国の住人だしよう。

それでも私は紛う事なきシヨタコンになる。

アレンがこの世を去って八年弱。ファズルがアレンの生まれ変わりで間違い無いなら、七歳以下という事になるファズル。そんな子供と結婚するだなんて、日本にいれば間違いなくお縄になるか黄色い救急車のお世話になる事だろう。この国だって、価値観はそう変わらないはずだ。

それでも数万歩引いたとしよう。それでも、ファズルは“人”の形をしていない。完璧な人間であるオデットからすれば、獣と結婚だなんて考えられないのだろう。しかし、よく考えて欲しい。

そもそも私だって人間では無い。

心は人であるけれど、今の私の身体は人では無いために子孫を残すという本能が備わっていない。

恋だの愛だのという感情は、子孫を円滑に残すための本能だという考えは今でもある。しかし、そんな本能から逃れた私にはそんな話は無関係だ。

それでも、私はアレンを好きになってしまった。そして、今もその気持ちは変わらない。

それは彼の姿形を好きになった訳ではなく、彼の子供が欲しいと思った訳でもなく、彼の純粹で愚直とも言えるほどの実直なその“心”に惹かれたのだ。今の私には年齢や姿など関係無い。

身体が彼を求めたのではなく、心が彼を求めたのだから。

ファズルがここに居つく事に洩るオデットを、私がいいつて言ってるんだからいいのよ、と泉の精の権力を発揮し、泉の側にファズルの家を建てさせた。家と言っても、雨風を防げる程度の簡単な木の小屋で、寝るためだけの場所といった感じだけだ。

それでも、ファズルが心地よく寝れるためにまたもや泉の精の権力で高級なベッドを持ってこさせた。質素な小屋に、高級ベッドが置かれている様は不釣り合すぎて笑ったけれど、ファズルが柔らかいベッドの上で尻尾を激しく振りながら跳ねて喜ぶ姿は、どうしてくれようかというほどに可愛かった。この世界にデジカメが無い事に

憤りを覚えたのは初めてだ。

ファズルは、アレンだった頃の記憶を持っている訳ではなかった。言葉もたどたどしいし、私に認めて貰おうとあれだけ頑張っていたお勉強もサッパリだった。

「デイナー！ だいすき！」

ただ、アレンがつけてくれた私の名前だけは忘れていなかった。それがまた愛おしさを増す。

愛おしいと思うけれど、今はまだ子供に対する愛情だと思う。年齢など関係無いとは言ったものの、やはりまだ未熟な精神ではこちらが庇護する立場なので、それは仕方ない事だと思うし、それに対して不満も心配も無い。

彼が大人になった時――、私はまた、彼に恋をするだろうから。

ファズルがここでの生活に慣れた頃、アレンの長女シャルロットが本を数冊持つて泉に来た。成人してからというものめつきり顔を出さなくなった彼女が一人で来たので、オデットに何かあったのかと心配になったが、それよりも心配になるような事を彼女は言った。

「ファズルちゃんにお勉強を教えて欲しいって、オデットから頼まれたの。」

天然兄弟の中でも二大巨頭を誇るシャルロット（ちなみにもう一人は次男）。彼女に任せて大丈夫だろうか。どうして、また彼女をチョイスしたのか。

後でオデットから聞いたが、暇そうなのが育児放棄並に子供を放牧しているシャルロットしかいなかったのだから。まあ……、育児を放棄していると言うか、育児を放棄させられていると言うか……

（何かをしようとするたびに何か被害が出て、何もなくていいと言われているらしい）。

そんな彼女に勉強を教えて貰う……。不安しかないのは気のせいだろうか……。

「そうそう、精霊様にも教えろって言われてるから、精霊様も一緒にお勉強しましょうね」

なるほど。つまり、私にシャルロットの監視をしろと。

と、思っていたが、オデットは本当に私にお勉強して欲しかったらしい。オデット曰く、「文字くらい読み書きできるようになれ」と。

こうして、この世界に来て数十年、初めて文字の読み書きの勉強をするハメになった。正直、本気で面倒臭かったのだけど、ファズルが楽しそうに文字を覚えようとしていたので、私もつられて楽しく勉強できたと思う。

しかし、やはり二大巨頭の名はダテではなかったシャルロットの授業は大変だった。

絵本を持ってくるつもりがエロ小説だったり（それにも気づかずに高らかに朗読しだした）。

足し算をしようと用意したリングを、ファズルが計算中に食べ始めたり（極々自然な流れで食べていたので、気づくのに時間がかかった）。

この国の歴史を独自の解釈で説明し始め、やがて愛と欲望が渦巻くドロドロの恋愛創作話になったり（意外と面白かったので、小説書いてみたらと勧めてみた）。

そんなこんなで、私が文字を修得するのにやる気の無さも手伝って二年もかかってしまって、オデットにすごくバカにされた。

まあ、文字が分かればこっちのものだという事で。本だけ貰って、私がファズルに教える事になり、シャルロットはお役御免だ……と思ったら、何もしなくてもただファズルをモフモフするためだけに通うようになった。

その膝の上でゴロゴロ言ってるの、あなたの元お父様ですよ、と何度言いかけた事か。

言ってもいいような気はするが、言わない最たる理由は、もう彼は“アレン”ではなく、“ファズル”だという事。子供達は喜ぶであろうけど、私はファズルに、もう何のしがらみもなく生きて欲しいのだ。

泉の精が愛する前王の魂が宿る銀色の獣――。

変に担ぎ上げられる要素抜群だ。だから、オデットにさえ言っていない。私は、ファズルに自由に生きて欲しい。例えそれが私の側から離れる事になろうとも。

アレンの子供達に対して多少の罪悪感を抱きつつ、それでも穏やかに時は流れた。

ファズルが元々賢かったのか、それとも前世の記憶が多少は残っていたのかは分からないが、私とのお勉強を始めて二年ほどでもうオデットと政治の話もできるようになっていた。

そんなファズルをオデットが賢い賢い、偉い偉いと褒めそやす姿を見て、ライバル心を燃やしたのがオデットの息子コンラッドだった。

美しく聡明な自慢の母がファズルに盗られたと思ったのだろう。

勉強が嫌いで、七歳になっても間違った文字ばかり書いていたコンラッドだったが、急にやる気を見せてメキメキと賢くなっていった。オデットに褒めて貰うたびに、ファズルの方を向いてどや顔をしていたが、ファズルはと言うとヤンチャな弟を見る優しいお兄ちゃんという感じでニコニコとしているだけだった。

そんなお兄ちゃんを慕うのは当然の流れで、いつしか彼らは兄弟

のような親友になっていった。

とても穏やかで、幸せな日々だった。

永遠に続くと思うほどお花畑な頭はしていないけれど、それでも彼がまたこの世からいなくなってしまうまで不変だと思ってしまうほど、幸せに慣れすぎた。

不幸せな事があるからこそ、幸せを実感できる。

けれど、その逆もまた同じ。

幸せがあつたからこそ、その後の不幸せは、幸せだった分苦しみを齎す。

私は幸せすぎて忘れていた。哀れな“彼女”の事を。

命を燃やし尽くすほどの呪いを施しながら死んでいった“彼女”の事を。

呪いはすでに始まっていたのだ。彼が再びこの世界に生まれ落ちた瞬間から。

呪いが成就してしまうきっかけは彼が青年になった頃。

私が、もう一度彼に恋をした時だった。

25・安穩な日々の終わり

ファズルと共に暮らし始めてから十三年の月日が経った。

少し大きい猫のようだった彼の身体も、凄く大きい猫のようになり、愛らしくも威風堂々とした佇まいになっている。

お勉強を頑張っていてやはりわんぱくな所は変わらないコンラツドに森中引きつられ、しょっちゅう汚れて帰って来るので、そのたびに泉で洗っていたら銀色の毛は益々なめらかに輝き、太陽や月の光の下で見る彼は神々しくすらある。

『ああ……。この身体では手触りを感じられないのがホント悔やまれるわ……。』

「あはは、ディーナくすぐりたいよ」

ファズルを仰向けにさせて、お腹の上に寝転がりセクハラ親父のごとく撫で回すと、彼はくすぐったそうに身をよじった。

しかし、私と密着している事が嬉しいのdarう、私を落とさないように器用にくねくねしている。可愛い。

あまりにも可愛いすぎて、胸のあたりに埋めていた顔を上へと移動させて、ちゅっ、と猫のような口に口付けた。

「……………」

一瞬の沈黙の後、にへら、と彼の顔がだらしなく緩む。

キスなんて子供の頃からしているのに、嬉しそうだけどもまだに照れくさそうにモジモジする。まだ彼からしてもらった事は一度も無い。

いや、一度だけあったか。頬にだけど。すぐに離れて穴を掘り出して自ら入ったけど。純情すぎるのもたまに困りものである。絶倫アレンはどこへ行ったのだろう。

「精霊様、俺にも口付けしてください！」

「お前の顔で爪を研いでやろうかコンラッド」

一部始終を見ていたらしいコンラッドが、羨ましそうに指をくわえてこちらを見ていた。残念ながら可愛くない。図体がデカいのだ。コンラッドは、確かまだ十五歳だったはずだが、もう百八十センチ以上はあるだろう高身長に、しょっちゅう森の中を野生児のごとく駆け回っているので筋肉もガツシリついている。

顔はほのかにアレンに似た甘い作りだが、ギラギラとしたヤンチャさが滲み出ている、どちらかというと強面だ。なので残念ながらお嬢様方には恐がられてモテないようだ。

そんな肉食系はファズルに威嚇されながらも、まだ駄々をこねる。

「ファズルばかりずるいぞ！俺だって精霊様といちゃいちゃしたい！」

コンラッドは、大好きなファズルが好きなものは自分も好き、という性癖(?)がある。つまりは、ファズルの大好きな私の事が大好きで、それを恋と勘違いして言い寄って(というよりジャレついて)くるものだから、そのたびにこうやってファズルと言い争いになる。

二人の男に言い寄られて困っちゃう……というより、ママはボクの！と争う子供の喧嘩を見ているようで微笑ましい。

ここまでは、いつもと変わらない穏やかな日常だった。

しかし、それは少し沈んだ雰囲気のおデットが来たと同時に、二度と手にする事はできないほど遠い世界へと変わってしまった。

「戦争になるかもしれない」

彼女は開口一番に物騒な事を言い放った。

苦々しげに語る彼女の説明を聞いて、私はこの世界の好戦的な性質に呆れるしかなかった。

この世界は、大小様々な国が無数にあり、その中で保守的な国など数えるほどしか無い。

平和な国など、この国のように精霊の類に護られている所しかなく、それ以外は積極的に争いを仕掛けては他国を蹂躪し、蹂躪され、新しい国と消えていく国の多さから、地図など十年経てば役に立たないほどだ。

精霊に護られている国はどれも平和を望み、またそうした国だからこそ精霊に好まれるという。しかし、平和を望むからこそ国自体は大きくなり、小さな国では様々な物資の自給率は高くない。この国でも例に漏れず自給率は高くなく、他国からの援助で自国をギリギリ守っている。

そうした国を落とすのは、援助を断てば簡単な話なのだが、なぜ他国は精霊のいる国に援助するのか。

それは、この世界の性質に大きく関係する。

いつ他国から攻めいられるか分からない常に危険と隣り合わせの世界で、敗走した場合に逃げ込める安全な場所を確保しておきたいからである。

援助を受ける代わりに、もしもの時は全力で守る。それまでは勝手によそでやっていてくれと思うが、繋がりのある国が戦争を起こ

せば、敵国が先に逃亡先を潰しておこうと人外生物に果敢にも挑んでくる時がある。

今がまさにその状態になりそうだという。

今までの歴史の中で人外生物に人類が勝った試しが無いのに、それでも挑んでくるファイティングスピリッツは凄いなと思うが、少しは学習をしりたい。この世界の人間は脳筋ばかりなのか。脳筋世界。嫌すぎる。

「精霊様には申し訳無いと思うけど……。もし、そうなった時はお願いします」

あくまで“命令”ではなく“お願い”をしてくるオデット。そこには、打算も媚びもなく、純粹に嫌な役割を押し付けて申し訳無いという思いが感じとれる。

そんな人間がいる国だからこそ、私以外の人外生物達も護りたくなるのだろつ。

『私だつてこの国が好きなのだから護るのは当然よ。それに、私だけが頑張る訳ではないでしょう？』

私だつて万能ではない。私達——この泉の中にいる意思達の力が及ぶのは、泉の水が届く範囲だけなのだ。正確には泉の水に意思が宿り、染み込ませたものを操るというものだ。人体への影響も多分その一環なのだろう。人体に良い影響を及ぼす細胞を操り活性化させているのだと思う。

逆を言えば、水が届かない所では何の力も発揮できない。周りを囲まれて、援助を受け取らせない状況になれば、国内は飢餓状態になり内側から崩壊していくだろう。まあ、その手は時間も人手もかかるので小国には無理だろう。

それでも諦めないのが脳筋世界の人間である。大打撃を受けない

までも、せせこせこと地味な嫌がらせをされては生活に支障が出る時がある。そういう時には国民が動くのだ。

小さいこの国には、騎士団という戦闘に特化した存在がいる事にはいるが、軍というほど大きくはなく有事の際には一般人の中から有志を募って事に当たって貰わなければならない。

愛国心が強いこの国の人間は精一杯頑張るのだろうが、戦闘訓練を受けていない一般人ができる事には限界がある。死傷者を多く出す事を覚悟しなければいけないのだ。

「できるだけ死者を出さないように、もう既に一般兵を訓練しだしてるんだけど……。今回の相手は大国だから不安だわ……」

オデットは嘆息しながら泉に手を入れる。泉に触れていると落ち着くのだそうだ。

もう四十歳にもなる彼女は、泉の水の効果なのだろうかまだどう見ても二十代後半にしか見えず、物憂げな様子がまた妙な色気を醸し出していた。

そんな美貌の母の肩をコンラッドが抱き寄せる。

「母様、大丈夫です！！　どんな大軍が来ようとも、このコンラッドがバツバツと薙ぎ倒してみせましょう！！」

「前線に出るなんてダメに決まってるでしょう！？　王太子としての自覚を持ちなさい！！」

脳筋代表ですと言わんばかりのコンラッドの頭を叩くオデット。王位継承権を持つ親戚は幸いにもわんさかいるが、さすがに危険な真似をしない方がいいと私も思う。

彼は私にとっても我が子のように思っているので、危ない場所に行って欲しくない。だって、無謀に突っ込んで真っ先に怪我してし

まいそうだし。

けれど、彼は母のためだけに言った訳ではないようだ。

「後ろに隠れて守られているだけで何が王族でしょうか！？ 民を守り、導く、それこそが王族の務めでしょう母様！？」

子供の成長は本当に驚くほど早い。つい最近まで青っぱなを垂らしながら動物の糞を棒でつついていたのに、いつの間にかアレンの想いを、オデットの気高さをその心に宿す立派な次期国王になっていた。

息子の成長に、オデットもなんと行って止めたらいいか分からず、戸惑っている。私に助言を求める視線を投げつけてくるが、私だって『王族の務め』とか言われれば何と言っていいか分からない。

「それは、僕も参加できる？」

オデットと二人で戸惑っていると、なんとファズルまでもが参加の意志を示した。

『え……、何言っているのファズル？ ダメよ、行っちゃダメ』

「だって、僕は人間より速く動けるし、力も強い。きっとコンラッドを守る力になれる」

純粋な眼差しは、アレンだった頃の記憶がなくなっても変わっていない。

——ああ、私はその眼差しに恋したのだった。

私には彼を止める術が見つからない。

行かないで欲しいと思うのはただの私のエゴで、彼のコンラッドを守りたいと思う真っ直ぐな心を引き止めるのは無理だろう。

けれど、行かないで欲しい。もし何かあったらと思うと気が気じゃない。

まだ早い。いずれは死に別れる事は覚悟しているけれど、まだ早い。

もっと、抱き締めて。もっと、キスをして。もっともっと、側にいたいのに。

ああ、私が涙を流せるのなら、涙を見た彼は思いとどまってくれたかもしれないのに、なんて考える私は本当になんて浅ましいのだろうか。

「そんな顔をしないで。僕は大丈夫だから。ディーナを哀しませるような事はしないよ」

多分、情けない顔をしているであろう私の顔を、ファズルは慰めるように舐める。

「精霊様、ご安心ください！　俺が絶対ファズルを死なせませんから！」

「アンタは自分の身を一番に心配しなさい！！」

息子が戦地に行くかもしれないというのに、オデットはいつもどおりにコンラッドの頭を叩く。

彼女も心配だろうに、どうしてそんなに普通に普通でいられるのか。女王という責任のある立場が彼女を強くさせているのだろうか。私には無理だ。

そんな葛藤を抱く私を見て彼女は苦笑する。

「まだ何も起こっていない状態で心配したって仕方ないでしょ？　戦争になるかもっていうのはただの杞憂で終わるかもしれないし、

攻めてきたとしても何をどうされるのかはまだ分からないし。もし回避できないなら、被害が最小限に収まるように私も努力するし。だからそんな情けない顔しないでよ」

『そう、ね……。まだ、どうにかなるって、決まった訳じゃないものね……。』

気づかわしげにこちらを見ていたファズルの背中を撫でて、微笑んでみせる。すると彼は安心したようにゴロゴロと喉を鳴らして身体をすり寄せてきた。

不安は拭いきれた訳ではない。けれど、それでファズルを不安にさせるような事もしなくて、私は無理矢理明るく振舞った。どうか、平和なままでありますようにと、願いながら。

けれど、その願いは無情にも叶えられる事はなく、ひと月の後に大軍が攻めてきたのだった。

26・臆病な心の精一杯

火矢が一斉に森へと向かってきた。私は、高い土壁を瞬時に造りそれを防ぐ。

今のこの世界の文明では及ばない力を見せつけられても、なお彼らは攻撃を仕掛けてくる。土壁を造るために使った地面が抉れ、土壁を壊そうにも深く抉れた地面が障害になり飛び道具しか使えない。そのせいで、夜空は赤く照らされていた。

「精霊様、今はどんな感じ？」

オデットが赤く染まる不吉な夜空を不安気に眺めながら聞いてきた。

『まあ、人数は多いけれど、今のところは余裕ね』

軽い調子で答える私に、彼女は幾分か和らいだ表情になった。それでも、油断してはいけないと緩みそうになった顔を引き締めた。

今この森の周りは、四方を四カ国の大軍に囲まれている。

現在戦時中の友好国の敵国は、どうやら以前からこの国を疎ましく思っていた国と同盟を組んだようだ。

今朝、夜が明ける前に攻め込んで来て今。陽が沈み、月が真上に来るまで、攻撃は止む事はなく続いていた。実に粘着質な脳筋軍団だ。

『本当にしつこいわね。いつまでいるつもりかしら？ あんな稚拙な攻撃じゃ森に侵入する事はできないだろうけど、ずっと周りに居

座られると困るんじゃないオデット？」

「そうね……。三ヶ月くらいは余裕だけど、それ以上は国民に我慢を強いる事になってしまいわね……」

少しの我慢だけで済めば良いけれど。もし、三ヶ月居座る事ができるのなら、こちらが飢えて滅びるまで居座る事ができるのではないだろうか。

そしてその予想は当たる事になる。

とりあえず一ヶ月様子を見るという事で、こちらからは一切攻撃はせず、ただひたすらに私が侵入を阻止した。

攻撃しないのには理由がある。大地に血を染み込ませたくないのだ。

血には、血を流したその生物の意思が宿り、大地に融け込む。そうなると、私“達”の力が及びにくくなり、それは“負”の意思が強ければ強いほど私達の力は及ばなくなる。

“負”の力とは、血を流した時の死への恐怖、他者から傷つけられた場合の相手への憎悪などの感情だ。その“負”の力は、時として私達にとって“毒”となる。

私達は安らぎを求め、見返りに優しさを世界へと流す。その正反對とも言うべき感情は、私達にとっては劇薬となってしまうのだ。

しかし、もうそんな事を言っていられる状況ではなくなってしまうった。

最初の二週間で二カ国は引き上げて行った。このまま後の二カ国も近いうちに引き上げて行くだろうと安堵した二週間後、最初に引き上げて行った二カ国が残った二カ国と入れ替わりに戻って来た時には覚悟を決めざるを得なかった。

いよいよ兵糧攻めをするらしい。他国から送られて来た物資は奪われ、こちらから出向こうと出国したとしても、使者は帰って来る事はなかった。

向こうのスタミナ切れを待とうにも、二カ国が入れ替わりで居座るならば余程のアクシデントが起こらない限り、この状況は変わる事はないだろう。

「精霊様、出撃の許可を得に参りました」

浮いた様子が消えたコンラッドが、重々しい鎧を纏って現れた。側には、一般兵と共に戦闘訓練を受けていたファズルが胸当てを付けてコンラッドに寄り添っている。

「できるだけ遠い場所にて戦う事をお約束します」

『……それよりも、私はあなた達が傷つく事の方が嫌だわ』

ファズルが、困ったように喉を鳴らして私の手を舐めた。

「大丈夫。コンラッドには危ない事はさせないように、ちゃんと見張っておくから」

『それならファズルは？ ファズルがコンラッドの代わりに危ない事するって言うの？ そもそも、戦場で安全な場所なんてあるの？』

ゆっくりと、静かに言う。声帯があるならば、きつと凄く低い声が出た事だろう。

彼らを責めるような言い方に、二人は苦い顔をして無言になった。分かってる。国を守るためには仕方ない事だって。けれど、何も王子様直々に戦場に行かなくては良いではないか。国民のためだとか、兵の士気が云々とか、崇高な志なんてどうでもいい。そんなものでお腹がいっぱいになる訳でもないし、死んでしまえば何にもならない。

「あまり責めないであげて精霊様。コンラッドには、あくまで指揮官として前線には出ないようにキツク言い聞かせてあるから」

オデットが現れて、苦笑気味に私の手を取った。

「私だって、この子達を戦いになんて行かせたくないわ。だって、死ぬかもしれないし、誰かを手にかけるかもしれないんだもの。だけど、それでもこの子達は行くと書いた。守られるより、守りたいのだと言ったの」

分かってる。二人を止めるのは私のただのワガママだって分かってる。

コンラッドにとって、国民は家族であり、守るべき存在で、ファズルにとってもコンラッドは家族で、守りたい存在。

私が彼らに行くなと言う事は、守りたいものを見殺しにしろと言っているのと同じ事。

真っ直ぐなキレイな心に、私のただのワガママが敵わないことなんて分かってる。分かっているけれど、心が追いつかない。

素直に笑顔で見送ってあげる事ができればいいのに。思い通りにいかない心がもどかしくて、私はファズルを強く抱き締める。

「ディーナ、僕を信じて。必ず無事に帰って来るから」

信じて、とか。なんて、都合の良い言葉だろう。

「だから、僕にコンラッドを守りに行かせて」

ファズルから少し離れて、抱き締めていた手を猫のような顔に添える。

覗き込んだ瞳は、一つの曇りもない宝石のようで、触れる事すら躊躇ってしまうほど、キレイだった。

傷つかないように、壊れないように、宝石箱に閉じ込めたとしても、きつと閉じ込めた方が輝きをなくしてしまうのだろう。

そつと、瞼に口付けを落とす。次に、猫のような愛らしい口にも口付ける。「精霊様、俺にも！！」と条件反射のように言うコンラッドに近付き、口付けた。

まさか本当にされると思ってたなかったコンラッドは、驚きで目を丸くした後、急激に顔を真っ赤に染め、ファズルはというと白目を剥きそうなくらい放心している。

『今、口から泉の力を流したから。何かあった時には守ってくれるはず』

私の心移りではない事を知っても、ファズルは少し複雑そうな顔をしている。本当は別に口にしなくても良いのだけれど、私を心配させるのだからこれくらいのイジワルはしていいと思う。息子にチユーするようなノリだし。

『早く、行きなさい』

それだけ言い捨てると、私は彼らに背を向けて泉の中へと潜った。泉の中から水面を見上げると、ゆらゆらと揺れるファズルの顔がこちらを覗き込んで叫んでいた。

——ごめんねディーナ！！絶対に帰ってくるから！！心配しないで！！

謝るのは私の方。これから危険な場所へと行くのに、憂いを残したまま行かせてしまうのだから。

だけど、これが今の私の精一杯。

これ以上、顔を見ていると本当に閉じ込めてしまいそうだったから。

ごめんね、ファズル。あなたのキレイな心に釣り合わないほど、私の心は小さくて、卑怯で、臆病で。ごめんね。愛想を尽かされても仕方ない。

だけど。

どうか、私の元へ帰って来て。

二つの足音が遠ざかっていった後、白い手が泉の中に差し込まれた。

白い手の持ち主も、私と同じような不安で苦しんでいる。けれど、彼女は女王だから、表には出せずにここでしか弱音を吐けない。

それなのに、私まで弱っているから彼女は私を慰めようと手を差し伸べる。

きっと、もしファズルがこの戦いでいなくなってしまうたら、また私が出てこなくなってしまうかもという不安もあるのだろう。

大丈夫。なんて、胸をはって言えはしないけれど、それでも私は白い手を握る。

大丈夫ではなくたって、私には彼女がいるし。彼女を一人にはしないという想いを込めて。

白い手が私の手を強く握り返す。

水面の向こうの彼女が、笑った気がした。

27・チカラと穢れ（前書き）

R15？

残酷な表現はしていませんつもりですが、流血シーンが少しあります。
苦手な方、ご注意ください。

27・チカラと穢れ

こちらから攻撃を仕掛けると言っても、数的には圧倒的にこちらに分が悪く、奇襲をかけては深追いをせずすぐに土壁の中へと逃げ帰るという事を繰り返した。死傷者も出ているが、幸いにも多大な犠牲は出さずに一週間が過ぎた頃、この国と友好関係にある国からの援軍が到着した。

獅子が描かれた黒い旗と共に現れたのは、狼とライオンが混ざったような顔の獣人の軍団だった。

ファズルの生まれた国、ゴリユールである。

彼らは、普通の人間よりも力が強く、素早い。敵国の背後に現れた彼らは、瞬く間に敵国の半数以上を屠っていった。

余りにもの力の差に、尻尾を巻いて逃げ出すのかと思えば、そこはやはり脳筋世界の人間。一矢報いるために命を捨てて、こちら側に特攻をかけてきた。

命を捨てた人間の底力は凄まじく、平和に生きてきたこの国の人間の守りなど簡単に破り、コンラッドの近くまで接近を許してしまう。

コンラッドは、敵兵に囲まれても怯むどころか鬼神の如き闘志で剣を奮う。きっと、国民を殺された哀しみと、これ以上は死なせないという決意が彼を奮い立たせているのだらう。

恐れを知らないかのようなコンラッドの怒涛の如き進撃に塞がれていた道は開かれ、彼が通った後には敵兵の亡骸の道が作られた。

そんな彼を、ファズルが側でよく支えていた。猪突猛進で隙の多いコンラッドをフォローするかのようになり立ちは回っていた。

人間よりも、普通のゴリユール人よりも素早く動ける彼は銀色の閃光となり、コンラッドに刃が届きそうになる前に鋭い爪で薙ぎ倒す。

二人の戦う姿はまさに鮮烈。

その姿は、さながら闘神とそれを護る守護獣のようで、士気が落ちていた兵達を奮い立たせた。

その様子を泉に映して見ていた私の心は悲鳴を上げていた。生きるためには仕方ない。誰かを守るためには仕方ない。

けれど、二人が手を血で染めるのを見るのは耐えられなかった。コンラッドが剣を振り落とすたびに、敵兵の命が消えていく。ファズルの剛腕が敵兵の骨を砕くたびに、敵兵は断末魔の悲鳴を上げる。

ファズルの綺麗だった銀色の毛は血に塗れ、血の海から生まれた魔獣のようだった。

コンラッドの戦う姿は、血を求める狂戦士のようだった。

純粹で、キレイだった二人が血で穢れていく様は、とても、とても、哀しくて、辛くて、苦しくて。

まだ子供の彼らが血に濡れてしまわなければいけないこの世界を、私はここに来て初めて呪った。

猛然たる動きをしていた彼らだったが、実際は神でも何でもない彼らのスタミナは当然のように切れてくる。

やがてコンラッドの瞳が虚ろになり、ファズルの足元がおぼつかなくなった頃、駆けつけてくれたゴリユール人によって敵兵は数を減らしていき、残り僅かという時だった。

満身創痍だったコンラッドの背後から、剣が振り落とされた。

『コンラッド！！』

遠く離れたここからでは声なんて届かないのは分かっているけれど、叫ばずにはいられなかった。届かないはずなのに、届いたかのように彼は背後の剣に気づき、それを防ごうと剣を持つ腕を上げる。

しかし、その剣は彼に届く事はなかった。

剣が深く沈み込んだのは、ファズルの身体。

ファズルがその身を呈して彼を守ったのだ。

他者の血で赤く染まった身体は、今は彼自身の血を流す。

私は、その姿に悲鳴を上げた。

ファズルが死んでしまう。ダメ。嫌よ。イヤ。死んじゃイヤ。どうして。どうして、ファズルが血を流しているの。誰か、ファズルの血を止めて。助けて。誰か。

お願い、誰か助けて——！！

瞬間。泉の力が届かないはずの遠い場所で、優しい意思達の存在を感じた。

日常的に泉の水を摂取していたファズルは、身体の隅々にまで泉の水が染み渡っている。私がおかあった時のためにと施した加護という名の『無事でありますように』という願いに、彼の身体にいた優しい意思達が反応したのだ。

みるみる内にファズルの傷が塞がっていき、流れてしまった本来私達にとって毒となるはずの血は、彼の『守りたい』という純粹な心によって逆に力となり、血の盾となり彼らを守り、血の剣となって彼らを傷つけようとする者を葬った。

その神がかった奇跡が、後に別の問題を連れて来る事になるのだが、この時の私はただファズルが無事だったという事と、“毒”に触れてしまった意思達の事に心を占められていた。

血の剣は不純な血を流し、それに触れたせいでファズルに宿っていた意思達はこの世界にいらなくなってしまった。

私がファズルを助けてと願ってしまったせいで、消えてしまう事になってしまったのだ。

罪悪感と、後悔が押し寄せる。

あそこは感情の全てをなくしてしまう哀しい場所だったけれど、何からも傷つけられず、何も傷つけず、どんな場所よりも安全に眠れる場所だったのだ。

私が彼らの安息の地を奪ってしまった。心を捨ててしまうほど傷ついていた彼らにとってそれはとても残酷な事で、謝っても許される事ではない。

それでもファズルが助かったという安堵の方が大きく、私がどれだけ自己中心的で卑しいのかが知れる。そんな自己嫌悪の渦に沈みかけていた時、消えていく意思達の感情が流れ込んできた。

臆病だった自分が恐れずに動けた勇氣。その結果、キレイな心を持つ彼を守れたという誇り。これで、胸をはって“元の世界”に戻れる——と。きっかけを与えてくれた私に、感謝すらしながら。

そして、優しい意思達は満たされながらこの世界から消えていった。私が自己嫌悪に陥るのを消えていった優しい彼らは望んでいないだろうし、彼らの行為を穢す事になるような気がして、私は謝るよりも感謝の気持ちと、彼らのこれからの幸福を祈った。

周りにいた二カ国は壊滅。後の二カ国がこれからどう出るかわからない不安はあるものの、ひとまず危機は去った。

完全に無事とは言い難いけれど、ファズルもコンラッドも生きている事に、私は安堵しきっていた。

無事に帰ってくると言ったのに、命を投げ出すような行動をし、戦いが終わってもすぐに帰って来なかったファズルにどんなお仕置きをしようか。

そんな事を考えていると、聞きなれた足音が近づいて来ていた。私は足音の主の困った顔を思い浮かべ、ほくそ笑みながら待つ。一時間耐久くすぐりの刑に処そうか。それとも、彼からキスをするように言おうか。それとも……。

考えが纏まらないうちに、木々の隙間から鈍い銀色の体軀が見えた。

彼の真っ直ぐな瞳が私を捉える。血で傷んでしまった彼の美しい銀色の毛が輝きを失っていても、私を映す瞳は輝きを失っていなかった。

その瞳を見た瞬間、彼に言おうと考えていた文句の数々はどこかに消え去ってしまった。

次に、彼が微笑みながら言った言葉に、不満も何もかも消え去って、愛しさだけが残った。

「ただいま、ディーナ」

私は気がつけば彼に駆け寄っていて、強く、強く、抱き締めていた。

『おかえり、ファズル』

戻って来てくれた。

それだけで、もう充分だった。

生きていてくれた事が嬉しくて、まだ離れないでいいという事が幸せで。

その事だけで胸いっぱい、ファズルの雰囲気少し変わった事に、その時の私は気づけなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2616t/>

たゆたう世界

2011年9月14日19時18分発行